ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅲ－Ⅱ

1976

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅲ－Ⅱ

1976

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

はじめに

滋賀県下のほ場整備事業は、ここ数年来急ピッチで進められ、今年も約1,204haが実施された。ご存知のとおり、県下の風土は、美しい碁盤面を織りなす田園風景で知られ、その歴史も条里施行時の、今から千年以上も前の姿をとどめてきており、条里制の研究において近江は重要な地域とされております。

また、太湖をかかえた湖周辺は葦原中ッ国として、水稲耕作の格好の地域として、開発がおし進められ、各所に、その先人達の足跡ともみるべき古代集落跡が点在しています。

このような遺跡の状況にかんがみ、教育委員会では、三年目に入った遺跡調査を今年度も実施してきました。

本報告書の作成は、現地調査、後整理、報告書作成における、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶対な指導、助言、援助の賜物であったと深く感謝する次第であります。

昭和51年３月吉日

滋賀県教育委員会

教育長　柳原太郎

例　　言

1．本報告は、昭和51年度県営ほ場整備事業に伴なう遺跡調査のうち、県農林部の費用負担にかかる発掘調査の成果を収載したものである。

2．調査にあたっては、地元市町の役場、教育委員会・区長からは種々協力を得た。

また、現地調査は、本県文化財保護課技師田中勝弘・同丸山竜平がそれぞれ担当したが、特に、志那中遺跡については、藤岡謙二郎先生ほか多数の先生方に調査を依頼し、また、下総子遺跡については、野洲町教育委員会文化財担当吉川与志雄氏に全調査をお願いした。

3．調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとにしるすとともに、報告の文責は文末に明記した。記して感謝の意を表す次第である。

目　　次

はじめに
例　　言
第１章　草津市志那中遺跡
—条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告—
1．調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
2．序　説—志那中地区の発掘と歴史地理的背景— …… 2
3．発掘報告Ａトレンチ …… 5
4．発掘報告Ｂトレンチ …… 8
5．発掘報告Ｄトレンチ …… 10
6．発掘報告Ｅトレンチ …… 11
7．出土遺物と層序 …… 12
8．花粉分析の成果 …… 15
9．志那中遺跡附近の条里遺構 …… 17
10．志那中遺跡発掘調査日誌 …… 19
第２章　草津市片岡遺跡
1．位置と環境 …… 21
2．調査の経過 …… 22
3．遺　構 …… 27
4．遺　物（瓦） …… 35
5．旧地形の復元よりみた各遺構の位置づけ …… 35
6．むすびにかえて …… 37
第３章　野洲町下繰子遺跡
1．はじめに …… 63
2．位　置 …… 66

3．地理的環境 ……66
4．歴史的環境 ……66
5．調査の目的 ……68
6．層　序 ……68
7．検出遺構の概略 ……69
8．出土遺物 ……71
9．むすびにかえて ……74
第4章　湖北町小倉遺跡
1．位置と環境 ……84
2．調査の経過 ……84
3．調査の結果 ……84
4．遺　物 ……85
5．結　語 ……86
第5章　湖北町大安寺遺跡
1．位　置 ……87
2．調査の経過 ……87
3．調査の結果 ……87
4．結　語 ……88
第6章　高月町円通寺遺跡
はじめに ……89
1．位置と環境 ……89
2．調査結果 ……90
3．遺　物 ……95
おわりに ……103
付　章　びわ町難波遺跡

図 版 目 次

草津市志那中遺跡

1　出土遺物（写真）
2　出土遺物（写真）
3　出土遺物実測図
4　出土遺物実測図
5　出土花粉（写真）

草津市片岡遺跡

6　片岡遺跡位置図
7　片岡遺跡附近全景航空写真
8　片岡遺跡地形図
9（1）津田江上空から片岡・観音堂遺跡と近江富士を望む（西より）
（2）条里制の中の寺割が明瞭な観音堂遺跡
（3）片岡遺跡の試掘壕設定状況（西より）
10（1）発掘調査情景と観音堂の森（南より）
（2）片岡遺跡から観音堂の森と下寺の集落、近江富士を望む（西より）
（3）特設試掘壕設定状況と比叡山を望む（東より）
11（1）3－A特設試掘壕シケ抜き検出状況
（2）3－A試掘壕南東壁シケ抜き検出状況
（3）4－A試掘壕南東壁
12（上）10－B試掘壕南東壁
（中）11－A特設1試掘壕南西壁、溝（M－5）検出状況
（下）11－A特設1試掘壕南東壁、溝（M－5）検出状況
13（上）11－A試掘壕、溝（大溝第Ⅲ層掘り下げ）検出状況（南東より）
（中）11－B、12－A試掘壕南東壁、条里遺構検出状況（左下M－3）
（下）12－B試掘壕南東壁土層堆積状況（中央下M－3）
14（上）11－B、12－A試掘壕、溝（大溝第Ⅲ層）跡検出状況（北東より）
（中）11－B、12－A試掘壕、溝内（大溝第Ⅲ層掘り下げによる）
木材検出状況
（下）12－A試掘壕、溝内（大溝第Ⅲ層掘り下げによる）木材検出状況
15（上）12－B試掘壕、南東壁
（中）12－B試掘壕南西及北西壁

(下) 13—A試掘壙、南東壁
16 (上) 14—B、15—A試掘壙、寺域南端溝 (M—1) 検出状況 (北東より)
(中) 14—B、15—A試掘壙、寺域南端溝 (M—1) 検出状況 (南東より)
(下) 14—B、15—A試掘壙南東壁と溝 (M—1)
17 (上) 11—B特設試掘壙、寺域限溝 (M—2) と条里溝 (M—3？)
の交点 (南東より)
(中) 特設11試掘壙、南東壁
(下) 特設12試掘壙、(北西より)
18 (上) 特設10試掘壙、(西南より)
(中) 特設13試掘壙、北西壁
(下) 特設15試掘壙、(東より)
19 寺域を限る北東隅の溝よりかつて掘り出されたといわれる
木像群 (観音堂内安置)
20 片岡遺跡試掘壙設定位置図
21 片岡遺跡試掘壙断面実測図 (折入)
22 片岡遺跡試掘壙断面実測図 (折入)
23 片岡遺跡試掘壙断面実測図
24 (上) 出土土器
(下) 出土土器
25 (上) 出土土器
(下) 出土土器
26 (上) 出土土器
(下) 出土土器
27 (上) 出土土器
(下) 出土土器、土錘
28 出土土器
29 (上) 出土土器
(下) 出土木器
30 出土土器実測図
31 出土土器実測図
32 出土土器実測図
33 出土土器、土錘実測図
34 出土木器実測図
35 出土木器実測図

野洲町下繰子遺跡

36（上）下繰子遺跡遠景（南東、大岩山中腹より）

（下）下繰子遺跡近景（北より、向こう右側大岩山）

37（上）発掘風景

（下）発掘風景（Ｊ－２、３トレンチ、延長部が昭和49年度調査地）

38（上）発掘状況（西半部）

（下）発掘状況（東半部）

39（上）Ｊ－20発掘状況（東より）

（下）Ｊ－３ｔ、沼状落込み検出状況（北より）

40（上）Ｊ－14ｔ溝状遺構検出状況

（下）Ｊ－16ｔ隅丸方形状遺構検出状況

41　昭和50年度下繰子遺跡発掘調査平面図

42（上）出土土器

（下）出土土器

43　出土土器

44　出土土器

45（上）出土土器

（下）遺物出土状況実測図

46（上）出土木製品

（下）出土木製品

47　Ｊ－２・３ｔ沼状遺構出土土器実測図

48　Ｊ－14ｔ沼状遺構出土土器、Ｊ－19ｔ方形ピット遺物出土状況実測図

49　Ｊ－２・３ｔ沼状遺構上層出土木製品実測図

高月町円通寺遺跡

50（上）遺跡遠景

（下）遺跡近景

51（上）第Ⅱ地区Ｓ１

（下）第Ⅱ地区Ｓ１東壁土層断面

52（上）第Ⅲ地区ＤＯ～ＥＮ１、Ｍ１・Ｍ２（東より）

（下）第Ⅲ地区ＤＯ～ＥＮ１、Ｍ１・Ｍ２（東より）

53（上）第Ⅲ地区ＢＯ～ＣＯ、Ｍ１（東より）

（下）第Ⅲ地区ＢＯ～ＣＯ、Ｍ１（東より）

54（上）第Ⅲ地区ＥＮ１、Ｍ３（東より）

（下）第Ⅲ地区ＦＮ２、Ｍ３及び北壁土層断面

55　遺物
56　遺物
57　遺物
58　遺物
59　遺物
60　遺物

挿図目次

草津市志那中遺跡

挿図

1－1 a 志那中遺跡発掘調査地点…… 1
1－1 b 志那中遺跡トレンチ配置図…… 1
2－1　志那中付近遺物出土地分布図…… 2
2－2　志那中遺跡とその付近…… 5
2－3　発掘調査地付近空中写真説明図（上が北、約 1.2万分の1）…… 3
3－1　Aトレンチ拡大図…… 6
3－2　Aトレンチ上層断面図…… 6
3－3　Aトレンチ実測図…… 6
4－1　Bトレンチ実測図…… 9
4－2　Bトレンチ北壁断面図…… 9
5－1　Dトレンチ上層断面図…… 11
6－1　Eトレンチ周辺の水路網と小字…… 12
6－2　Eトレンチと耕土直下遺構…… 12
6－3　Eトレンチ南西側断面図…… 12
8－1　花粉ダイアグラム…… 16
9－1　志那中遺跡付近の条里地割…… 18
9－2　志那中遺跡付近の地割と小字名…… 18

草津市片岡遺跡

挿図

1　片岡遺跡位置図…… 22
2　11－B特設トレンチ南東壁断面…… 29
3　片岡・観音堂遺跡出土軒丸・軒平瓦拓影・実測図…… 62

野洲町下繰子遺跡

挿図1　野洲町富波下繰子遺跡位置図……64
2　下繰子付近遺跡分布図……65
3　下繰子遺跡調査地地形図……67

湖北町小倉・大安寺遺跡

挿図1　遺跡位置図……83
2　小倉遺跡グリット配置図……85
3　小倉・大安寺遺跡グリット断面土層図……86
4　大安寺遺跡グリット配置図……87
5　小倉・大安寺遺跡出土遺物実測図……88

高月町円通寺遺跡

挿図1　遺跡位置図……83
2　円通寺遺跡地区配置図……89
3　円通寺第Ⅱ地区グリット配置図および遺構平面図……90
4　円通寺第Ⅲ地区グリット配置図……92
5　円通寺第Ⅲ地区遺構平面図……93
6　円通寺第Ⅲ地区M1及び遺物出土状態実測図……94
円通寺第Ⅲ地区M1実測図(2)……94
7　円通寺第Ⅱ・第Ⅲ地区グリット断面土層図……95
8　円通寺第Ⅲ地区M1出土遺物実測図(1)……96
9　円通寺第Ⅲ地区M1出土遺物実測図(2)……97
10　円通寺第Ⅱ・第Ⅲ地区出土遺物実測図……98

写真目次

草津市志那中遺跡

写真1　志那中遺跡の展望……2
2　発掘調査地付近空中写真……3
3　Aトレンチの柱穴……4
4　角杭検出状況……10

表　目　次

草津市志那中遺跡

表７－１　各トレンチ遺物出土状況……13
　７－２　出土遺物、土師器……14
　８－１　分析結果の花粉構成……16

草津市片岡遺跡

表１　片岡（観音堂）遺跡出土土器遺物表……38
　２　片岡（観音堂）遺跡出土瓦観察表……57
　３　片岡（観音堂）遺跡出土木製遺物観察表……61

野洲町下緑子遺跡

表１　Ｊ－２・３ｔ沼状遺構出土土器観察表……76

第1章　草津市志那中遺跡

1　調査に至る経緯と調査の経過

数年前から県下一円で、県営圃場整備事業が行なわれてきたが、草津市でも山田・笠縫・常盤の湖辺地域がその対象地区とされ、継続して工事が進められてきた。ところで、昭和50年度事業実施区域の常盤工区内には、観音堂・片岡・志那中の遺跡が含まれており、その遺跡調査を如何にするかが問題となった。これらの遺跡はさきに県文化財保護課が遺跡目録ならびに遺跡地図作製に際して摘記したもので、志那中遺跡は散布地で石剣・土師器片・須恵器片が発見され、片岡遺跡も同じく散布地で石斧が出土しているのに対して、観音堂遺跡は寺院跡で白鳳期の軒丸瓦・須恵器片が出ているところである。

これら遺跡の調査について、昭和50年5月9日、県耕地指導課・県土地改良区・県文化財保護課・市農政課・市社会教育課の各関係者、および土地改良区理事長が、草津市役所において会合を開き相談した。その結果、調査個所は上記遺跡中、直接用排水路工事にかかわる部分とする。調査費についてはさらに話し合う、との結論に達した。ついで6月4日第2回目の会合を県地方事務所で開き、具体的な打合せを行なった。出席者は県耕地指導課・県文化財保護課・土地改良区・市農政課・市社会教育課の各関係者である。この打合せでは、①調査費については県耕地指導課と県文化財保護課で考える。②工事は志那中地区は夏、観音堂地区は冬に施工する。③遺跡に関しては、県耕地指導課、土地改良区とも記録保存を希望する。④調査実施主体については、市または県のどちらかで負担するが市では専任の技師がいないので県に依託したいとし、県では技師がいずれも他の調査のため余裕がなく他に探してみるとしていたが、やむを得ないので市文化財専門委員の小林博委員にはかってみることとする、などが話しあわれた。

6月16日相談をうけた小林委員は現地をみたうえ、市役所で各関係者と打合せを行ない、夏場工事施工の志那中地区については、7月に用排水路にかかる部分について調査する。

調査は条里景観の遺存地域でもあるから前年吉田条里の調査を実施した京都大学の藤岡謙二郎教授を中心にお願いする、との結論を出した。そこで同教授にお願いしたところ、県および市の事情を諒承され、前年調査の吉田条里（これについては草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告1974.3として報告済）との関連において当該遺跡の調査を引受ける旨の快諾を得た。かくして同教授を長とする別記の調査団が編成され、7月13～16日の間、志那中遺跡における用排水路部分の調査が行なわれることとなった。

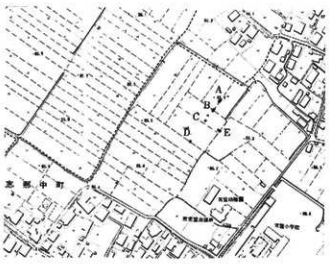


図1－1 a.b 志那中遺跡発掘調査地点

調査の経過は後掲の調査日誌に詳しいので省略するが、発掘に先立ち7月6日2カ所で深さ90cmのピットを掘り、遺物包含の状況と地層の状態を観察し、図1－1に示すA・B・C・D・Eの5カ所の発掘個所を選んで調査にあたった。その間付近既出土の遺物や条里の考察を併行して進めた。何分経費と

調査日数に制約があり、その限界内での調査であるため、なお残された問題も少なくない。それらについては後考をまちたい。（小林　博）

2　序説－志那中地区の発掘と歴史地理的背景

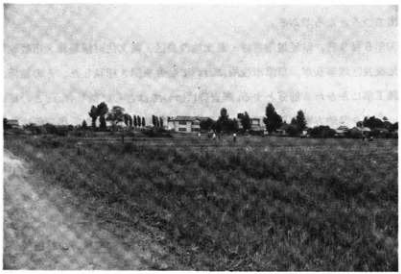


写真１　志那中遺跡の展望

今回発掘の志那中遺跡（写真１は片岡町から津田江に到る道路上から発掘地と背後の常盤小学校及び志那中集落（同右）を望んだものである）５ヶ所（図１－１）は前回発掘調査を試みた吉田集落の北々部にあたる志那中集落（行政上は草津市志那中町）と、そのさらに北東部の片岡集落（現草津市片岡町）にある水田地区である。図２－１は昭和46年度滋賀県教育委員会編の「滋賀県遺跡目録」(湖南地区）の付録図版に示めされた遺物出土地の分布である。このうち志那中町についてみると番号の17には、志那中遺跡、―― 散布地、志那中字昆布柿、平地、水田、畑地、遺物石剣（総社神社蔵）土師器片・須恵器片、時代は彌生とある。これはもとより石剣のことである。ほかに18は志那中湖底遺跡とあり、出土の石剣がやはり総社神社蔵とある。ただし筆者等の調査時にこの石剣を同神社に求めたが、現在同社には存在しないとのことであった。今回の発掘地点はこの17の番号で示された地点付近にあたる。（図２－２参照）付近既出土の遺物についても、現在散いつしており、常盤小学校出土のものについては後述のごとく須恵器２点が出土しているにすぎない。

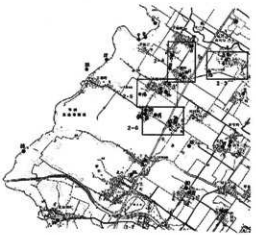


図２－１　志那中遺跡付近図

図２－２に示した志那中遺跡も写真２および図２－３に示したように真北の野州川並びに東の山麓から発した近江国栗田郡条里の４条13里に当る。げんみつにいえば発掘地点の小字下柿内はその30坪に当る。さきに調査した吉田集落の三大神社のある伊吹里が６条13里26坪であるから両者の相対的な位置関係もおのずから明かであろう。当然のことながら条里の坪割の方向もほぼ同じで、坪線は32°～33° Eとなる。坪並また東北隅に始まる

写真２　志那中遺跡付近空中写真

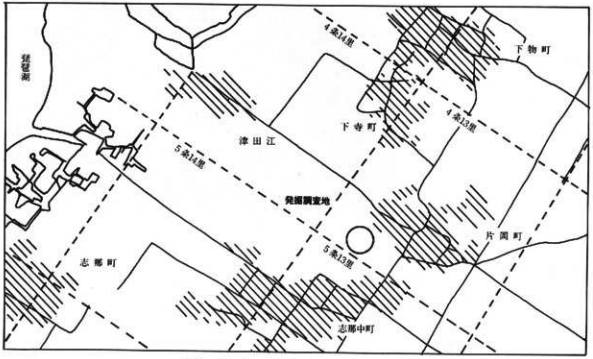


図２－３　志那中遺跡付近空中写真説明図

平行式である。つぎにその地条及び小字名は図９－２に示されたごとくであるが吉田に比べると固有名詞が多く、同図で数詞はわずかに「一ノ町」付近に4 ケ所見られるにすぎない。またその地条もこれら固有名詞の小字の個所その他に長地型が卓越するのに対して、「下柿内」やその西北の「沢前」東南の小字「藤ノ木」その隣りの「昆布柿」あたりの地条は半折型でもなく、不規則であって後世に建物等があって原地割が改変されたのではないかと思われる。

さて今般の発掘地点もまたすでに限定されており、日数にも限度があって充分な成果を果し得なかった。これらについては改めてトレンチ毎に報告がなされるが通じていえば遺跡、遺物ともに積極的に歴史的事実を語るものがなく、可能性にとどまったが、それでもなおＡトレンチにおける杭の年代測定や遺物包含層中の花粉分析の結果、その可能性を裏付けるに充分であったと考えられる。すなわちまず前者についていえばＡトレンチの灰褐色砂混り粘土層の小形ピットと同一層（図３－２参照）に掘り込まれた柱根と思われる木片（径10cm、長さ22.5cm）の年代測定を第四紀総合研究Ｃ14年代測定小委員会への依頼で学習院大学の木越研究室が行った結果によると1270±100年ＢＰと報告せられた。ＢＰは1950年を基準とするのであるから680年ＡＤとなる。つまり 680年以前には大きく溯らないことになる。 680年とは天武８年の薬師寺建立の時代であり、かりに 100年後の 780年としても宝亀11年で長岡京奠都以前の平城京時代の終りとなる。つぎに花粉分析ではＤトレンチのサンプルからイネ科の花粉が高率に出現されることが明かになったことである。その層が栽培種であるかの判定までなされ得なかったにしろ、当時の遺物包含層と思われる土壌の判定結果は貴重な資料である。以下各トレンチ毎の層序や遺跡、遺物包含の状況を概概すると、どの地区においても表土 1 m 以下になると湖底の自然堆積物たる青色粘土層があり、ついでスクモと俗称している黒色泥炭状の粘土層になる。

一般に湖東平野の湖岸や干拓地にはこれら黒泥土壌が多く、その上に粘質の細粒グライ土壌があって有機物質をふくみ古来水田に利用されている。本遺跡の場合も表土以下80cm位までに、これらグライ土壌があり、強粘土性のものに細砂をまじえるもの、その色も茶褐色や、遺物を包含するものはことに灰褐色を呈している。Ａ・Ｂ両トレンチではこれら灰褐色の土壌又はピット状凹地すなわち堀方やその中心の柱穴等がみられたが、

写真３ Ａトレンチの柱穴

（写真３参照）時期の異るピットが重複する箇所もあり、その性質や範囲は明かに出来なかった。またＥトレンチでは現畦畔に併行して溝状遺構が掘り出された。さらにＤトレンチは復原条里の４条と５条の里界線を掘り下げたのであるが、出土遺物がみられずここでは上述の土壌断面が比較的整層されていたので、上掲「スクモ」層とその上層の灰褐色粘土層及び粘土質細砂層中の有機質土壌の花粉分析を行ったわけである。ここで土壌分類で粘土層と称しているものはclayの含有率が50%以上のもの、粘土質細砂層の場合clayの含有率が25.0

～37.5%程度の壌土である。なお細砂といった場合はげんみつには粒経が0.25～0.05㎜程度であるが、今回の発掘では河川の氾らんを示す大型礫の集中する箇所はみられなかった。

つぎに出土遺物は表面採集による磨製石剣破片（粘板岩製）以外は須恵器・土師器を主にし、しかも、これらの土器類が主として掘り出されたA・B両トレンチにあって、これらがいずれも個々的に散乱して細砂層や粘土層中に発見されたことは、性質の不明なピットはともかくとして、土器等は再堆積によるものと考えてよい。

図2－2　志那中遺跡付近図

しかしいずれにしても付近に弥生式時代から古代・中世に到るまで人類集落が営まれたことを物語る。この地の歴史的重要性については、すでに吉田条里の報告書の中でふれたから、本書でも再び繰返えさないが、新羅王子と称する天日槍が暫住したと称する草津市穴町は本遺跡地の東南に隣接しており、げんに今もなお日槍を祭る安羅神社があり、ほかに草津市野村町（図2－1）にも同じ安羅神社があって、この場合はその創設を文武天皇の慶雲年間と伝えている。いずれにしても日槍自身はともかく、彼に引率された渡来人たる陶人の子孫が以後定着した土地であることには誤りがない。しかも志那町もまた日槍以来明治、大正のはじめ頃までも、この穴村の外港として、琵琶湖汽船が発着したところである。しかも付近には図2－1、22に示めすごとき銅鐸を出土した志那湖底遺跡もあり、もとは湖岸線がさらに前方にのびていて、対岸のやはり渡来人集落たる穴太や琵琶湖々尻への湖上交通距離も今日よりも、なお短捷であったと考えられる。もう一つこの地の重要性については前報告書でものべたように志那中町に近江国の総社と称し、現在では総社神社の名で呼ぶ式内社が存在することである。これと近江国府のあった瀬田に近い一宮なる建部神社との関係が問題である。しかもこれと関連するのであるが、上掲穴町と吉田町の間に北大萱町集落があり、一方、国府城の北には南大萱町があって、この両者の関係もまた問題にされなければならない。おそらくこの遺跡地付近に、瀬田の国府よりもふるい起源をもつ栗田郡々家がおかれ、総社もこれと接していたのではないのか、今回の発掘によって、これら律令的古代の何等かを語る遺跡の出現を願ったのであるが無駄であった。

（藤岡謙二郎）

3　発掘報告Aトレンチ

＜トレンチの設定＞

今回の調査地域は、栗太郡条里の4条13里30坪にあたるが、この坪は、長地型が優先する他の坪に比して特異なる地割形態を示しており、西半部が長地であるのに対し、東半部は長地とも半折とも判断のつかぬ地割を

呈している。また、西半部の内においても、北と南で地割が異なり、北半部は、栗太郡条里地割の方位であるN32°Eの地割を示すのに対し、南半部は、それと直交する地割を示している。

地盤高からみても、調査地区の北東に位置する片岡集落が最高87.7mを示し、南西部の調査地区に向かってゆるやかに傾斜している。調査地区にあたる30坪内においても、同様であり、北東から南西に向かって微妙な傾斜が見られる。このような微地形および、地割の諸特性を考慮した上で、特異なる地割の生じた原因を明らかにするということを主目標とし、トレンチの設定にあたった。

そこで、北の29坪と30坪との坪界線より31m南、東の24坪との坪界線より23m西の位置に、南北の方向に幅3m、長さ5mのトレンチを図3－1の如く設定した。

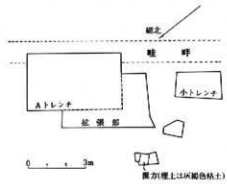


図3－1　Aトレンチ拡大図

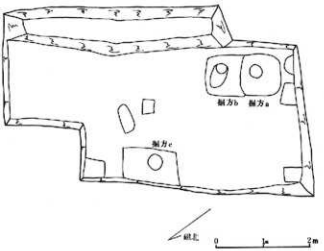


図3－3　Aトレンチ実測図

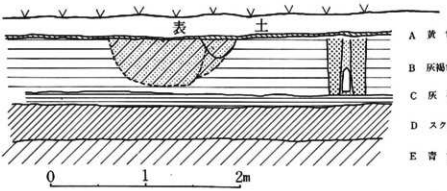


図3－2　Aトレンチ東壁断面図

Aトレンチの調査については、各層ごとに遺構・遺物を慎重に検出しつつ、層位の年代を明確に把握することに重点をおいた。

＜遺構の検討＞

Aトレンチの土層は、図3－2に示すごとくきわめて単純であり、最上層の耕土より6層で青色粘土に到達し、その深さはGL－1.3mである。

耕土から黄色粘土層（以下A層と称す）にかけては、遺物の包含が確認されたにすぎず、遺構はまったく見られなかった。耕土は、現代遺物から陶磁器・須恵器・土師器・瓦器など年代的に広範囲にわたる遺物を包含し、運ばれてきた土と考えられる。

A層からは、瓦器・土師器・須恵器・近世瓦などが主として出土し、年代的に見てかなり隔たりのある遺物を含んでおり、近世の整地土と考えられる。その後、今日に至るまで削平をくりかえされ薄層（2～5cm）を呈しているものと思われ、現水田の床土を形成している。

A層を除去し、第3層目にあたる灰褐色砂混粘土層（以下B層と称す）上面まで掘り下げた段階で、始めて遺構が検出された。

まず、トレンチ南端部において柱掘方と思われる遺構が検出されたが、大部分がトレンチ外に出ており、掘方の全貌を確認できないため、トレンチを南に1.5m、西に1.1m拡張することにした。（図3－1参照）

トレンチを拡張した段階で、大きな柱掘方3、小柱穴2、その他小ピット3が確認された。（平面図は図3－3に示してある。）また、トレンチ北西隅で柱掘方であろうと思われるものが一部検出されたが、その規模については調査期間の関係上、不明としておかざるを得なかった。しかし、これらの掘方は、すべて底部を残すのみで、大部分は削平されており、どれもうまく組み合うものがなく、いかなる建物が建つのかはつかみ得なかった。そこで時間の許す限りトレンチの南部および西部に3カ所の坪掘を行ない、柱穴の検出に努めたが、削平された小ピットを検出したにとどまり、柱穴は検出できなかった。

しかし、掘方の規模は大きく、掘方aは80×85cmの隅丸方形で柱穴は径26.0cm、掘方bは、90×90cmの隅丸方形で柱穴は径21.0cmで北西方向の抜き穴があるようで、柱は北西方向に抜かれたように思われる。掘方cも大きく、全体の規模は正確にはつかめぬが、1辺 110cmの正方形に近い規模を有するものと考えられる。

これらの掘方群の埋め土は、褐色粘土であり、特に掘方aの埋土からは、須恵（高台付杯）が出土しており、この須恵器は、陶邑の第Ⅳ期あたりに比定し得ることから柱穴そのものも奈良時代頃のものと考えられる。

最後にトレンチ東端に沿って、巾80cm、長さ5m、深さ 160cmの小トレンチを設定し、土層の観察と平行してB層以深（図3－1参照）の遺構の有無を確かめた。

観察の結果、第3－2図の如くトレンチ東断面において、B層上面より切り込んだ大小ピット3（大きいものは長さ 1.0m、深さ50cm、小さいものは径40cm、深さ19cm）と柱掘方1（巾42cm、深さ63cm）が確認された。

上述の東断面中央部で検出されたピットは、互いに切り合っているが、埋土は灰褐色砂質粘土で非常によく似ている。埋土からは、貝殻状タタキ目のみられる須恵器甕の小片などが出土したが、遺物そのものは、磨滅が激しく、時期判定には使い難い。また、南端部で検出された柱掘方は、B層直下の灰褐色粘土層（以下C層と称す）上面を底面としており、埋土も前述のピット群と近似しており、時期的にもあまり差のないものと思われる。この掘方の中央部からは、柱穴が検出され、底部に柱根（径10cm、長さ22.5cm）が残存していることが発見された。この柱掘方は、上巾41cm、下巾39cmと柱の太さから見れば狭小なように思えるが、柱掘方の隅が断面に露出していると考えれば、大きな掘方になることが予想される。

B層上面およびB層を切る遺構は以上のごとくであるが、遺物の出土はB層の上層に限られ、それ以深のC

層、黒色粘土層（以下D層と称す）、青色粘土層（以下E層と称す）においては、有機物を除いて土器類はまったく出土しなかった。

＜遺構の性格＞

調査地区全域は、地形的には、野洲川三角洲中位面（自然堤防起源の微高地に人工の加わったものと考えられる）に位置する北東の片岡集落と南西の志那中集落とにはさまれた三角洲下位面にあたる。このことは、草津市2500分の1地形図および1万分1航空写真から読みとれる。

Aトレンチで検出された大小ピットおよび柱掘方の性格については、今日に至るまでの削平が激しいこと、および調査面積の狭小なこともあって正確には把握し難いが、遺構の出土状況と出土遺物の検討、さらに他トレンチとの比較などの考察を行なうと以下のごとく述べることができる。

B層は、その上層において奈良時代の須恵器・土師器を多く含み、それよりも古いもの、新しいものをほとんど含まないことから見て、奈良時代に至るまでの自然堆積層と考えられる。

そして、B層上面において、底部のみを残して削平された柱掘方a・b・c・dは、掘方埋土内から検出された土器から考えると、奈良時代に比定し得る。奈良時代にB層上に盛土がなされ、なんらかの建物が建てられたものと思われるが、削平が激しく、トレンチ南方においては、これらの柱掘形に対応する掘形は検出されなかった。ただ、地形的に見ると、高い比高を有するトレンチの北および北東側にのびる可能性が強いように思われる。

さらに、これらの掘方が現在のB層上面まで削平された後に、トレンチ東断面で検出された柱掘方eおよび大小ピットが掘られたようである。これは、Bトレンチの同じB層より検出された土拡の埋土が、上述の掘方およびピット群と近似しており、Bトレンチ土拡内より出土した土器（燈明皿）が平安～鎌倉時代に比定し得ることによる。

柱掘方が存在することからみて、平安～鎌倉時代においても奈良時代に続いて集落の立地したことが考えられるが、その詳細については今回の調査では明らかにできなかった。（木原克司）

4　発掘報告Bトレンチ

＜トレンチの設定＞

調査地区は、栗太郡条里の4条13里30坪の東半部にあたる。この東半部は、西半部が長地型の形態を呈しているのに対し、長地とも半折とも判断のつかぬ地割を示している。そして、東半部においても、5条13里の里界線より53m北の東西方向の畦畔を堺にして北と南では地割が異なり、北部の畦畔は、N3°Eの方位を示すのに対し、南部は、それにほぼ直交する畦畔の残存が見られる。

そこで、東半部における特異な地割の生じた原因究明の一連の作業として、地割の変換線にあたる上述の東西方向の現畦畔下の土層を観察することに主目標を置き、5条13里との里界線より北へ53m、4条13里24坪との坪界線より西へ24.5mの位置に、東西方向の現畦畔を横断する形で、図1－1の如く5×3mのトレンチを

設定した。

＜調査の経過＞

まず、現在の水田の耕土（約20cm）を剝ぎ、A層（土層名称はAトレンチの項に準ずる。以下B・C・D・E層についても同様）上面の観察をおこなったが、遺構はまったく検出されなかった。

このA層からは、須恵・土師・陶磁器・瓦器・近世瓦などの小片が出土し、遺物から見て近世期の人工整地土と思われる。

次に、A層を剝ぎ、B層（25～50cm）上面を調査したところ、トレンチ北端部において、灰褐色砂質粘土を埋土とする掘込まれた遺構の一部が検出された。また、トレンチ中央部から南部にかけて暗褐色粘土層の落ち込みが確認された（図4－1参照）。

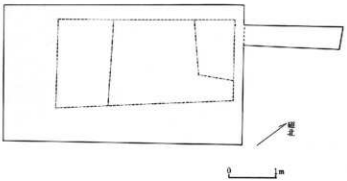


図4－1　Bトレンチ実測図

トレンチ北端部の掘込まれた遺構は、トレンチ西端より東へ1.3m張り出し、そこから北へL字状に屈曲し、トレンチ外に消えていた。そこで、遺構上面に柱穴が存在しないことを確認した上で、遺構内埋土の掘削を行ない、それと平行して範囲確認のため、トレンチ北側に長さ2.5m巾40cmのトレンチを、西側に長さ0.7m、巾2.5mのトレンチを新たに設定した。

その結果、この遺構は、東西3.0m、南北0.9mの長方形を呈していることが判明し、埋土内からは、平安～鎌倉時代と思われる瓦器皿および土師器片が主として検出された。

この遺構については、掘方が非常に大きく、柱穴も検出されなかったことから、一応土拡としておかざるを得ないが、その性格については明らかでない。

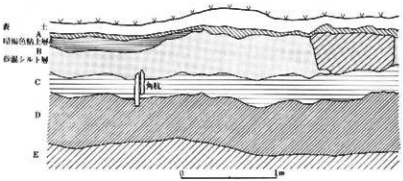


図4－2　Bトレンチ西壁断面図

さらに、トレンチ南半部で確認された暗褐色粘土層を除去する作業を行なった。この暗褐色粘土層は、B層を下面として厚さ10～15cmで、南から北へ上昇し、現畦畔の南肩部で消失し、そこから北にかけてはB層が露呈し、ほぼ水平を保ちながら北へ延びていることが明らかとなった。この暗褐色粘土層からは須恵器・土師器の小片が多数出土したが、時期決定に使用し得るものはほとんどなかった。

次にB層の掘り下げを進めたところ、地表下1m（B層最下層付近）の深さで、トレンチ西端より40cm、現畦畔の中心より1m南に角杭2本（写真4）を発見した。1本は長さ36cm、長辺5cm、短辺4cmのもので、他

の１本は、長さ23cm、長辺４cm、短辺１cmであり、いずれも上部は欠損していた。これらの杭は、南北方向に７cmの間隔をおいて並んでおり、長い方の角杭は、B層下層の灰褐色粘土層（C層、厚さ20cm）を貫ぬき、黒色粘土層にまで達していた。

B層からは、須恵器、土師器の小片多数の出土が見られ、その比率はほぼ同率であった。

さらに、C層の掘り下げを行なったが、土器類はまったく検出されなかった。C層以深の層位については、時間的な制約もあり、検土杖による調査に切りかえ、D層（45～50cm）・E層の存在を確認した上で一応調査を終了した。

＜断面の観察＞

トレンチ断面土層の状況は、図４－２に示すごとく、耕土を除くとA～Eの５層に区分され、耕土上面より1.3～1.5mで青色粘土層に達する。また、C層以深の層から土器類の出土が見られなかったことから、C層以深の層は、野洲川三角洲低位面の自然堆積層と考えられる。

ここで特に注目すべきことは、現畦畔の起源がB層に見られることである。図４－２に見られるごとく、B層は、現畦畔下で高まりを示し、南側の低い部分に暗褐色粘土が堆積しているのに対して北側では、B層がほぼ水平を保ち、暗褐色粘土の堆積が見られない。さらに、北側では、B層を切り込む土拡が検出されている。

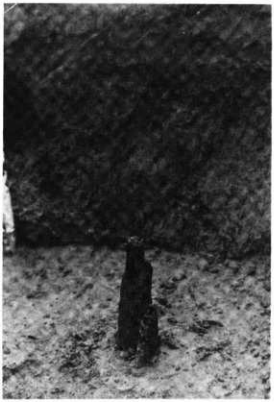


写真４　Bトレンチ出土木杭

これらの事柄を考慮すると、B層の堆積後、現畦畔の北と南で土地利用の形態に変化が生じたものと解釈し得る。すなわち、現畦畔以南は、水田として利用され、以北は集落の形成が見られた可能性が強いように思われる。

B層下部より検出された木杭も、その全長は不明であるが、上部が欠損していることからすると、B層上面から打ち込まれたとも考えられる。もし、そのような解釈が妥当とされるならば、集落と水田を画する杭としてこの木杭を位置づけることが可能である。

また、今日に至るまでに幾度となく削平がくりかえされていることが予想されるが、現畦畔は、B層の堆積後の畦畔、さらにA層堆積後の畦畔という少くとも２時期の畦畔を踏襲して、ほぼ同じ位置に設定されていると言える。

（小林博・田畑久夫）

5　発掘報告Dトレンチ

条里の４条13里30坪と５条13里25坪との里界線に相当する位置に、現畦畔に接する２m×３mのDトレンチを、図１－１の如く設定し、埋没畦畔の検出を試みた。作業はまずトレンチ内の表土およびA層（図５－１参照）を除去し、以後範囲をトレンチ西北半分の２m×1.5mに限ってD層が露出するまで試掘をすすめるとい

う方法で行なった。最後に調査区域外の水田との間の畦畔の崩壊の危険のない程度に現畦畔直下へとトレンチを拡張し、その断面を観察した。

標高86.4mの表土の下は深さ15～20cmに厚さ5～10cmの黄褐色粘土層（A層）がほぼ水平に堆積している。このA層の下には灰褐色粘土層（B層）が接しているのであるが、B層は地表下35～40cmで色調が変化し、そこから下はやや黄色がかった層となる。A層とB層の境界は明瞭であり、A層底部には酸化鉄が一面に沈殿している。現畦畔直下には、これらの層のきわだった起伏はみられない。直下から約1.5m東北方向にA層およびB層内の漸移部分の盛りあがりがわずかに見られるがこれを埋没畦畔と断じることは困難である。

なお、図5－1の断面図にもあらわれているようにA層からB層に続く径5cm、深さ20～25cm程度のシルトのつまった小穴が多量に見られた。遺物としてはA層からB層上部にかけて須恵及び土師の小片が出土したが、量的にも少なく原形の復原すら困難なものばかりである。

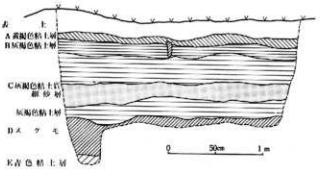


図5－1　Dトレンチ土層断面図

B層の下は地表下65cm前後で粘土質の灰褐色細砂層となる。この層からは土器の出土はなく、植物繊維ないし炭化物が採取された。灰褐色細砂層は15～25cm程度の厚さをもっており、地表下80～90cmで再び灰褐色粘土層に接する。炭化物はこの境界部において特に多量にみられた。灰褐色粘土層は黄褐色の斑を有している。そして地表105～115cmで黒色泥炭質粘土（スクモ）層が露出したため試掘をうちきった。さらに部分的に掘り下げた結果では地表下150cmで黒色粘土層の下に青色粘土層があらわれる。

Dトレンチでは以上のような結果であり、当初予想された堰状畦畔の遺構は確認できなかった。

（金田章裕・南出真助）

6　発掘報告Eトレンチ

トレンチEは、小字「下柿内」と「藤ノ木」の境をなす畦畔を切るように設定した。この畦畔は条里制の30の坪と24の坪の坪界線であり、現存畦畔の下に、条里施行時まできかのぼる畦畔ないし溝渠の遺構が堆没していることが予想できたからである。図6－1で明らかなとおり、「下柿内」と「藤ノ木」の界線上の北東半分には溝渠が現存しており、この溝は「舟入」と「昆布柿」の境に流れる溝渠に続いていたのではないかということが窺われる。率直にいって、われわれの主要な予想はその点にあった。

トレンチEのひろがりは、現存畦畔に直交する長さ4m、幅2mである。厚さ15cm内外の表土（耕土）を除去すると、その下に厚さ3～7cmのほぼ水平な黄色粘土層（A層）があらわれた。この層は現水田の床面をなすものであるが、現存畦畔の下でも田面下と同じように水平で、従って、現存畦畔は、両側の水田耕土をかきあげて作られたのみの構造を示し比較的新しいものと判定せざるを得ない。また、現存畦畔の北西縁に、畦畔に並行する、幅45cm、深さ13～14cmの浅い溝状遺構が検出された。この遺構はA層を切っており、従って現存畦畔に並行する新しい時期のもので、畦畔付随の側溝のようなものかと考えられたが、畦畔東南側の縁には、これに対応する遺構がなかったので断定できない（図6－2）。

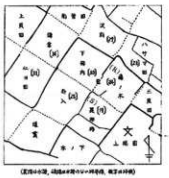


図6－1　Eトレンチ付近の水路網と小字

図６－２　Eトレンチの耕土直下遺構

A層の下には、厚さ40cm内外の茶褐色粘土層（B層）、厚さ10～15cmの茶灰色砂まじり粘土層（C層）、厚さ10～20cmの灰青色粘土層、黒色粘土層（D層）の順で層序が形成されている（図６－３）。C層およびそれ以下の層は、遺物を包含せず、自然堆積層と見てよい。須恵器・土師器等の遺物片は、耕土層・A層およびB層の上半部に混入し、耕土中からは瓦器――中世的遺物も出土する。他のトレンチ（A・B・D）においては瓦器片がA層・B層からも出土しているから、Eトレンチにおいて A・B層から瓦器片を得なかったのは、偶然に検出しなかっただけであると解するのが適当であろう。

それはともかくとして、上記B層・C層・灰青色粘土層を切って、暗褐色土で埋まった溝状及び土坑状の掘りこみが確認される（図６－３中のX及びY）。Xは断面図で見る限り、現存畦畔の真下にあるため注目されるが、

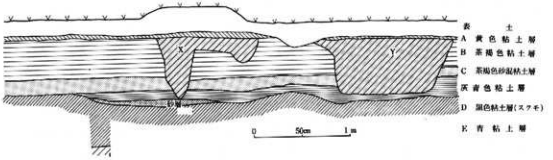


図６－３　Eトレンチ南西側断面図

トレンチ北東側断面には連続しないもの、つまり直径約40cmのほぼ円形で、深さ60cmほどの土坑及びその拡張遺構であった。それに対しYは北東側の断面にそのまま連続するもので、幅1.2～1.5m、深さ60cmの溝あとであることが明らかである。埋まっている暗褐色土中には、周辺の茶褐色粘土層（B層）より若干多いめの須恵・土師器片を包含する。現存畦畔の心から北西側約２mのところに溝心があり、北東・南西それぞれの方向への延長は、ほぼ確実にR・Sの現存溝渠に達する。断面のありようから見て、黄色粘土層（A層）によって現在の田面の床が形成されるまで、長期間安定した溝であったことが、うかがわれよう。（足利健亮）

7　出土遺物と層序

各トレンチの層位は、層厚の多少の差は見られるが、ほぼ同じとみなされ、上層より耕土（10cm～25cm）、黄色粘土層（A層、３～10cm）、灰褐色砂混粘土層（B層、40～60cm）、灰褐色粘土層（C層、10～30cm）黒色粘土層（D層、35～60cm）、青色粘土層（E層？）となっている。ただ、調査地区南部及び東部のD・Eトレンチにおいては、A・Bトレンチと異なり、C層とD層との間に灰褐色細砂や灰青色粘土の堆積が見られる。これは、調査地区の北部のA・Bトレンチが、今日の片岡集落の立地する野洲川三角洲中位面（自然堤防起源の微高地）の縁辺

部に位置するのに対して、D・Eトレンチが、片岡集落と南の志那中集落の両三角洲中位面間の三角洲低位面に位置することに起因するものと考えられる。

今回の発掘による遺物の出土状況は表7－1の通りであり、遺物は付図の如くである。

表7－1　各トレンチ遺物出土状況

Aトレンチ

	須恵	土師	瓦器	スミ	計
表土	18	15	2	0	35
A層	22	18	3	1	44
B層	31	28	2	1	62
不明	2	0	1	0	3
計	73	61	8	2	144

Bトレンチ

	須恵	土師	瓦器	スミ	計
表土	7	5	2	0	14
A層	20	7	1	0	28
B層	45	55	1	1	102
不明	7	6	0	1	14
計	79	73	4	2	158

Dトレンチ

	須恵	土師	瓦器	計
表土	0	1	0	1
A層	1	5	0	6
B層	3	5	1	9
不明	2	1	0	3
計	6	12	1	19

Eトレンチ

	須恵	土師	瓦器	スミ	計
表上	23	12	5	1	41
A層	2	6	0	0	8
B層	2	16	0	0	18
不明	5	3	0	0	8
計	32	37	5	1	75

A層からは、古墳時代から近世に至る多種多様の遺物が検出され、その遺物の多くが、磨滅著しい。出土遺物からみると、A層は近世の整地土と考えられ、その後削平がくりかえされつつ現在に至り、現在の水田の床土を形成しているものと思われる。

B層からは、須恵・土師を中心とした遺物が多く検出されたが、とりわけA・Bトレンチからは表7－1に示すごとくその数量が多く、総出土数の約56%にも及ぶ。

B層出土の須恵器・土師器には器形が判断し難いほど小片化しているものが多いが、器形としては総体的に杯、高台付杯、杯蓋、宝珠（付図ＫＳ－Ｒ－18）つまみなどが多く、ほぼ田辺昭三氏の編年による陶邑の第Ⅳ期（７Ｃ後半～８Ｃ末）に比定でき、B層が奈良時代の生活面であったことを推定し得る。

D・Eトレンチにおいて、B層出土遺物がA・Bトレンチに比してきわめて少ないということは、奈良時代における土地利用の相違を表わしているように思われる。

Aトレンチに於て奈良時代の集落址の存在を考えさせる柱掘形が検出されたことは、上述の推測を裏付けるものと解釈され、奈良時代に於ては、A・Bトレンチの位置する地域（A・B地区）は、集落の立地部分にあたり、D・Eトレンチの位置する南の地域はそうではなかったものと考えられる。

A・B地区に於ては、奈良時代の生活面が削平されたことが、遺構の出土状況から察せられるが、集落の縁辺部としての性格は、平安～鎌倉時代まで存続していたようである。このことはA・Bトレンチにおいて、平安～鎌倉時代のものと思われる柱掘形・土拡・大小ピットが検出されたことから推測し得る。

B層以下の層においては、有機物を含むのみで土器類はまったく検出されなかった。ただ耕土からではあるが、弥生時代の磨製石剣（付図ＫＳ－Ｒ－26）が１点出土したことは、現在の志那中集落内より弥生時代の磨製石斧がかって出土していることとあいまって、志那中における弥生時代の集落立地を考える上で興味深い。

また今回の調査地区の南東約 180ｍに位置する常盤小学校内より、出土層位は不明であるが、須恵器の杯の

身（付図ＫＳ－Ｒ－20）と蓋（付図ＫＳ－Ｒ－19）がほぼ完形に近い形で２点出土している。

これらの須恵器は田辺昭三氏編年による陶邑の第Ⅰ期の末（ＴＫ47）に比定し得るものであり、５Ｃ末～６Ｃ前半にかけて常盤小学校付近にまで集落が広がっていたものと思われる。（木原克司）

表７－２　出土遺物、土師器（番号は写真、図版と同一）

番号	トレンチ	出土層	名称	色	胎土	焼き	整型	備考
ＫＳ－Ｒ１	Ｂ	Ｂ	土錘	白	密	不良		
ＫＳ－Ｒ２	Ｂ	Ｂ	壺	黄褐	粗	不良	口縁部、内壁は横ナデ。頸部外壁に横方向のハケ目がかすかに見られる	磨滅が激しい。
ＫＳ－Ｒ３	Ｂ	Ｂ	高台付杯	白	礫粒多し	良	高台はややあまい作りで、体部底へはり付けられている。	体部底内壁にススの付着がある。
ＫＳ－Ｒ４	Ｂ	Ｂ	高台付杯	白	断小礫アリ	良	高台はつまみ出しである。	体部底内壁にススの付着がある。
ＫＳ－Ｒ５	Ｂ	Ｂ	燈明皿	黄白	断小礫アリ	良	全面横ナデである。	口縁部は外反している。
ＫＳ－Ｒ６	Ａ	Ｂ	燈明皿	白	断小礫アリ	良	全面横ナデである。	

表７－３　出土遺物、須恵器（番号は写真・図版と同一）

番号	トレンチ	層序	名称	色	胎土	焼き	ろくろの回転方向	整形	備考
KS－R7	Ｂ	Ａ	杯身	灰白色	細粒小礫少ない。	良	左	体部は横ナデ。底部はヘラけずり後、なでられている。	底部にまきあげ痕跡が残る。
KS－R8	Ｅ	Ａ－Ｂ間	杯身	灰色	細粒均質	良		体部と底部内面は横ナデ。底部外面はヘラおこしのみ。	
KS－R9	Ａ	Ｂ	杯身	灰色	細粒砂礫小粒混入	良	右	ヘラ削りの後、なでられている。	
KS－R10	Ｂ	Ｂ	高台付杯（無蓋）	灰白色	砂礫やや含む	良	右	底部内面の中央部はナデ。それ以外は横ナデ。高台の付根はヘラできりこみ。	口縁部は外反。高台はつまみ出しでしっかりしている。
KS－R11	Ｅ	表土	高台付杯	暗灰色	均質非常に密	最良		体部外面にヘラ削りあり。磨耗がはげしい。	
KS－R12	Ａ	Ｂ	高台付杯	灰色	均質	最良		底部にヘラ削り。	
KS－R13	Ａ	Ｂ	高台付杯	暗灰色	細粒	良		ヘラ削り後横ナデ。底部および体部の外面にたて方向のヘラ目。	高台ははりつけ。
KS－R14	Ａ	Ａ	高台付杯	灰白色	細粒均質	良		ヘラ削り。ヘラの溝が顕著。	高台はつまみだし。
KS－R15	Ｄ	Ａ	長頸壺の頸部	暗灰色	砂粒すこし均質	最良		横ナデ。	頸部外面全体に、灰をかぶっている。

KS—R16	E	表土	壺の口縁	灰白色	少礫混	良		横ナデ。		外面に沈線一本。水びきの可能性あり。内面は灰かぶり。
KS—R17	A	B	短頸壺の口縁	暗灰色	細粒だが小礫含	並良	右	横ナデ。		灰かぶりあり。
KS—R18	A	B	杯　蓋 宝珠つまみ	灰白色	均　質	良				
KS—R19	常盤小学校内	不明	杯　蓋	淡灰色	やや粗砂粒を含む	良		口縁部：横ナデで端部も横ナデが施されまるくおさめられている。 端部はやや外反し、さらに内に折られている。 体部：内外面とも横ナデ。 天井部：口縁部に近い部分は横ナデ、他はヘラ削り。 内面は横ナデ、及びナデ。 宝珠つまみ：扁平で、上面はへこみナデで調整。 側面は横ナデ。 陶邑のＴＫ47に比定。 天井部と体部を区切る突出部の端部は横ナデでやや丸くおさめられている。		
KS—R20	常盤小学校内	不明	杯　身	灰　色	やや粗砂粒を含む	良		口縁部：横ナデされてたちあがる。 端面もヨコナデされ平担化し、やや外反している。 体胴部：外面底部より、受部直下までヘラ削り。 内面は横ナデおよびナデ。 ロクロの回転方向は右。 陶邑のＴＫ47に比定。		

8　花粉分析の成果

筆者にもたらされた試料のうち今回分析結果をえたのは「Ｄトレンチ、炭化した植物？」および「スクモ填土」と仮称されていたものである。ここでは前者の試料名をＫⅠ、後者をＫⅡと呼ぶことにする。

〔方法〕花粉分析の方法は島倉巳三郎によって改良をなされてきた以下の操作をなすものである。[1]

(1)ピロリン酸ナトリウム飽和溶液による試料の泥化→(2)試料をジョッキに移し傾斜法で水をかえフミン酸とシルト粒子の除去→(3)湿酸（HNO_3＋HCl＋H_2Oの等量混合）によって酸可溶成分の溶解とフミン酸の酸化→(4)10% KOHによって再生フミン酸の除去→(5)湯のみ茶わんで植物質の濃縮→(6)HFで珪酸分の除去→(7)アセトリシス液（無水酢酸(9)＋濃硫酸(1)の混合液）でセルローズ質除去→(8)プレパラート封入→(9)検鏡・同定。

表8－1　分析結果の花粉構成

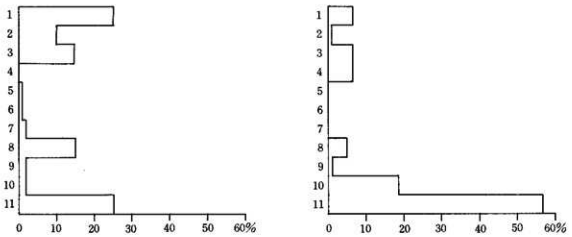
	K Ⅰ		K Ⅱ	
	絶対数	%	絶対数	%
Abies	53	27.0	11	6.4
Cryptomeria	16	8.2	1	0.6
Pinus	33	16.8	11	6.4
Tsuga	—	—	11	6.4
Alnus	1	0.5	—	—
Castanea	1	0.5	—	—
Fagus ?	3	1.5	—	—
Quercus	31	15.8	7	4.1
Chenopodiaceae	3	1.5	1	0.8
Compositae	3	1.5	32	18.8
Gramineae	52	26.5	96	56.5
Σ(AP+NAP)	196	100	170	100
Polypodiaceae	40		35	

今回は発掘調査遺跡の性格からイネ科植物と主要木本植物の花粉を中心として総花粉数 200以上を同定し、木本花粉（AP）と非木本花粉（NAP）を一括して全体の花粉総数に対する各花粉の占める割合を算出した（第1表）。

〔結果〕KⅠにおいてはAPでは*Abies* が27.0%と優占しついで*Pinus* (16.8%)、*Quercus* (15.8%) となる。NAPではGramineae が圧到的で26.5%となり、全体を通じても*Abies* についで多い。

KⅡの試料ではAPの出現率が極めて低く、*Pinus*、*Tsuga* および*Abies* がいずれも6.4%でついで*Quercus* の 4.1%となる。NAPではGramineaeが56.5%と全体を通じて優占し、ついでCompositae が18.8%を占

図8－1　花粉ダイアグラム



1 *Abies*（モミ属）　2 *Cryptomeria*（スギ属）　3 *Pinus*（マツ属）　4 *Tsuga*（ツガ属）
5 *Alnus*（ハンノキ属）　6 *Castanea*（クリ属）　7 *Fagus*?（ブナ属？）8 *Quercus*（コナラ属）
9 *Chenopodiaceae*（アカザ科）10 *Compositae*（キク科）　11 *Gramineae*（イネ科）

めている。なおPolypodiaceae（ウラボシ科）の数値は胞子についてであるため算出されていない。（同定された主な花粉の形態については写真で示しておいた）。

〔考察〕KⅠの分析結果で*Abies* の優占が注目されるが、これが局地的な植生の反映かそれとも気候の影響

かは、今回の唯一の試料からは判断できない。ただGramineaeがこれについで多いということは、草本植物は花粉の生産量が少く、かつ飛しょう距離も小さいことを考慮すれば、遺跡周辺の植生を忠実に表現しているとみてよく、イネ科植物からなる景観を推定することは可能である。またKⅡにおいてはNAPが絶対数において圧到的にAPより多いということは遺跡周辺の景観が草本植物よりなるとみられ、中でもGramineaeが高率を占めていることはイネ科植物を中心とする構成であったと推定される。

ただ花粉分析においては Gramineae（イネ科）については属まで同定することができず、栽培種の*Oryza*であるかどうかの判断はできない。Gramineae の粒径の大きさから *Oryza* を識別する試みもあるが、それに対して不可能とする見解[2]もあり、イネの同定についての困難な問題となっている。しかし今回の分析によってKⅠおよびKⅡにおいてイネ科の花粉が高率に出現することが、発掘の所見との関係において吟味されることによって景観復原の一つの見通しが得られるものと期待される。（千田 稔）

(注)

(1) 島倉巳三郎（1970）：古代遺跡における微古生物学的研究（演習）第四紀研究9－2。

(2) 中村 純（1974）：イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として、第四紀研究、13－4。

9 志那中遺跡付近の条里遺構

志那中遺跡とされている範囲は草津市志那中町と同市片岡町にまたがっており、今回の発掘調査地点は片岡町小字下柿内の部分である。

この付近の条里地割の方向は、図9－1からも判明するように汗線が約32度東偏するものである。この方向は吉田地区の報告書[1]ですでに明らかにしたように、栗太郡の3・4条に相当する部分すなわち現在の主要地方道大津・能登川・長浜線の聞魔堂・市ケ原間付近の方向と一致するものである。やはり同書の復原に従えば、[2]小字下柿内は栗太郡4条13里30坪に相当することになる。この復原は図9－2の如きこの付近の小字名によっても傍証される。すなわち、大字志那中の小字一ノ町・二ノ町・七ノ町・八ノ町の配置から、東北隅に始まって南行する並行式の坪並であることと、この一ノ町の北東辺が条界線、南東辺が里界線に相当することが知られ、上述の復原と合致する。ここではさらに、この条里界線が志那中の東北辺、東南辺の大字界とも一致していること、前掲の4箇の数詞の付いた小字名のほか、図9－2の範囲のみでも井ノ町・東ノ町など「町」の付いた小字名が多く、「町」が「坪」とほぼ同義で使用されているらしいこと、の2点にも留意しておこう。

さて、図9－2を一見すれば明らかなように、この付近の1町方格の内部にはほぼ典型的な長地型の地割が卓越している。ところが、下柿内の部分は長地型と半折型を複雑に複合した如き異質な地割形態であり、その北東の沢前、南東の藤ノ木・昆布柿・三反田・上総田などもやはり不規則な形態である。図9－1をみると藤ノ木・昆布柿の北西辺に86mの等高線が描かれており、昆布柿と舟入では約80cmの比高があり、下柿内と舟入でも約40cmの比高があって上記のような不規則な地割の部分はやや微高な部分であることが判明する。

ところで、野洲川西岸には守山市街の部分から西方へ延びる微高地が存在しており、野洲川の旧分流跡とみてよいと判断される。その途中にある草津市長束町から片岡町・志那中町・志那町へと連続する一帯の集落・微高地・不規則な地割列が認められ、やはり旧河道に起因するものと考えられる。下柿内およびその南東辺の不規則な地割からなる微高地は、この途中に位置するから、この部分は自然堤防性の微高地と考えてよいであ

図９－１　志那中遺跡地形図

ろう。従って長地型の整然とした地割とやや不規則な地割とは、ここではほぼ微地形に対応しているものということになる。また志那中遺跡もこの自然堤防上に位置するものといえる。

発掘の結果はすでに詳説されているが、下柿内の東南辺のEトレンチではすぐ北まで現存している溝の延長が地下に確認されたが、南西辺の条の界線に相当する部分を掘ったDトレンチでは地下に畦畔あるいは溝の遺構などは発見されず、Aトレンチが住居跡の可能性の高い部分であったことなど、いずれも上述の微地形・地割形態などと密接に関連するものといえよう。地割形態と微地形及び地下遺構に関する一事例として報告しておきたい。

（足利健亮．金田章裕）

（注）

(1) 滋賀県・草津市：『草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告』所収、足利健亮：吉田地区の条里遺構、1974。

(2) 同上書、服部昌之：草津市とその周辺の条里、1974。

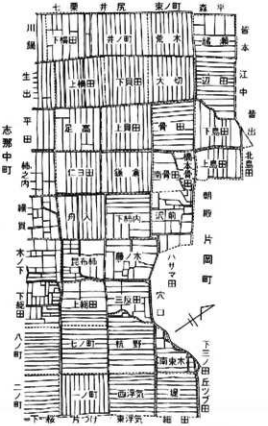


図９－２志那中遺跡付近の地割と小字名

10　草津市志那中遺跡調査日誌

本報告の執筆者（各項末に記載）の所属は次のとうりである。

藤岡謙二郎（京都大学教授）　　小林　博（大阪市立大学教授）
足利　健亮（京都大学助教授）　　千田　稔（奈良女子大学助教授）
金田　章裕（京都大学助手）　　木原　克司（難波宮址顕彰会調査研究員）
田畑　久夫（大阪市立大学・院生）　　南出　真助（京都大学・院生）

1975年７月に実施した志那中遺跡の調査は、上記の執筆者のほか次の参加者によって行なわれた。

広富　博（京都大学研修員）	吉田　敏弘（京都大・学生）	中尾久美子（大阪市大・学生）
神前　進一（大阪市大・院生）	石原　宣秀（大阪市大・学生）	新宮　由子（大阪市大・学生）
石田　繁則（関西大・院生）	片木　哲男（大阪市大・学生）	西海　隆夫（大阪市大・学生）
矢野　重文（京都大・聴講生）	金井　年（大阪市大・学生）	西口　明（大阪市大・学生）
出田　和久（京都大・学生）	島中　明彦（大阪市大・学生）	場野　哲夫（大阪市大・学生）
海道　静香（京都大・学生）	原田寿美子（大阪市大・学生）	古川　一之（大阪市大・学生）
長谷川正雄（京都大・学生）	霜山　知子（大阪市大・学生）	

7月6日（日）

発掘調査予定地である草津市片岡町小字下柿内にて、トレンチ設定の為の試掘実施。

7月13日（日）

排水溝掘さく予定地に沿って東北～南西方向にならぶA～Dの４トレンチと、その東側の坪界線相当部分にEトレンチを設定。排水の為の周囲の浅溝および排水用モーターポンプなどを準備。

7月14日（月）

午前中は雨天の為作業中止。

午后、排水と共にB・Eトレンチの掘り下げ開始。土師・須恵器片・磨製石剣の破片等の遺物が出土。

7月15日（火）

B・Eトレンチの掘り下げ続行。さらにA・Dトレンチの発掘も開始し、同時に発掘地点付近の層序確認ならびに出土遺物確認の為の聞きとり調査も実施。

Aトレンチでは柱穴遺構、Bトレンチでは黒色粘土層の落ち込みによる地類界遺構、Eトレンチでも溝遺構を発見。平板測量および泥炭質粘土層（スクモ）下の青色粘土層まで掘り下げが完了したEトレンチから壁面セクション実測を開始。

Bトレンチで燈明皿が出土した他、土器片多数出土。

7月16日（水）

各トレンチの掘り下げと実測を続行。Aトレンチでは柱穴および柱根（径約20cm）も出土。南西方向へのトレンチを拡大。Bトレンチでも木柱出土。実測を進める一方で、Cトレンチに余力を投入。但し、D・Cトレンチからはいずれも遺構は発見されず。

第２章　　草津市片岡遺跡

1　位置と環境

片岡遺跡は『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』において、「片岡石斧、分銅形石斧」と小項目をもうけ「石斧は同村字片岡より一個出土。その一つは地中より出で、一部に破損があるが、長さ四寸一分、幅最大一寸五分、蛤刃、磨製。その二は長さ四寸八分、幅刃部で一寸八分、蛤刃、磨製。分銅形石斧は片岡氏宅地出土、長さ三寸四分、幅二寸、厚さ一寸四分。中央部に幅七分の抉入部がある。安山岩磨製、共に常盤小学校蔵。」とある。

また、昭和40年度『滋賀県遺跡目録』では片岡遺跡として名称を付されている。

＜位　　置＞

湖東、湖南の琵琶湖寄りを北上する主要地方道彦根近江八幡瀬田線が大津市瀬田、草津市を抜けて守山市へ達するおよそ1km手前、南寄りに県道の西側に1集落がある。これが片岡の村であって、右手には、県道片岡栗東線が延び印岐志呂神社の境内の杜がみえる。

片岡の南には200mを距てて志那中町と常盤小学校があり、北へは同じく200mを距てて下寺町の集落がある。

片岡は、いわば野洲川旧南流域の最南端にして最西端に位置し、野洲川の水系に沃された土地である。野洲・守山両郡の郡境をなした旧南流、守山川は、さらに長束、芦浦にて南へ支流をつくり、郡境の流れと分かれて、印岐志呂神社境内を経て片岡、琵琶湖へと達するのである。

＜環　　境＞

野洲川旧南流域西端部の歴史的な環境を一べつしておこう。

当地域における従来の考古学的調査は皆無に近く、知られる資料もごく断片的であって多くを語ることは困難である。しかし、わずかな資料といえ、点々とその出土が知られていることは、かなりの遺跡が埋没していることをわれわれに推測させるのである。

まず、片岡遺跡と同様な蛤刃石斧が芦浦観音寺境内からかって掘り出されており、また、寺の北側で土器の散布を見ることも出来る。

この芦浦の下流部下物町においても弥生式土器集成に掲載された土器の出土がある。

さらに志那中町の総社神社の北側でも、かって溝の工事において石器が出土しており、各々現在の集落に重なりつつ古代集落跡が予想される。

すなわち、野洲川旧南流域は、野洲川そのものと異なり、小河川であって、水利用が得られやすく、当時の農業生産に豊かな水を送ることが可能であった地の利を得て、弥生時代以来、集落が栄えていたのではないかと思われる。

このため、そのあとの古墳時代においても印岐志呂神社境内に古墳群を見い出すことが出来るし、さらに白鳳時代に至っては、芦浦に3町四方の寺域をもつ寺院が、また、下寺には2.5町四方、下物には2町×2.5町四方の規模をもつ寺院が建立されていたと思われ、その寺院建立密度の驚きに驚くのである。

なお、『目録』には、片岡においても白鳳時代の瓦の出土を録しているが、現在確証は得られていない。但、集落中に方位のやや異なる道などもあり、将来、瓦を出す明確な遺跡が確認されるかもしれない。

なお、片岡遺跡における今回の調査対象地は、片岡町字下島田、上島田、北島田、下寺町字皆出にまたがる個所であった。（丸山竜平）

2　調査の経過

本調査は、圃場整備による支線 129号排水路敷設区域を対照としたもので、平安仏像が安置されている観音堂南にあたる。

まず、排水路敷設予定地中央に穿れた10m ごとのクイを基準に、調査区南端、アスファルト道側溝付近から北へ1、2、3……16とし、それらの間の距離10m をそれぞれ二分し、A、B、と名付け、1－A、1－B、2－A、2－B、3－A、3－B……とトレンチ名をつけていった。(なお、掘り込んだトレンチの長さが2mや3mの場合もあるので実質は、トレンチというよりも地点名である。)

ただし、1m 幅のトレンチでは、遺構が十分におさえ切れないので、その時々のケースに応じて、幅を拡張し、拡張が東の場合には、トレンチ名の後にe、西の場合にはwをつけて、それを示すことにした。

また、当地域は、51年度の調査予定地にもなっているので、調査方針を当調査区内の全遺構・遺物の検出よ

図1　片岡遺跡位置図

りも次時の予備として、調査期間内に出来るだけ、遺跡の性格追求を行うこととした。このため、各所に特設トレンチが設けられたが、この名称は、その特設トレンチの位置を平行移動したとき、排水路敷設予定地内のどのトレンチに合致するかで、例えば、11－B、12－A特設トレンチ1、2というように呼称した。

調査は、十二月十一日、寒風つく日に開始された。

現在、観音堂周囲の畔割りと他の周辺地域の畔割り方向が異なるため、トレンチは、各畔を中心として点々として穿れることとなった。

その結果、遺構が各所で検出されたが、それぞれの性格は異なっていた。南から、3－A～5－Aトレンチ間では、時期が判然とせぬ掘り方不明の湿気抜きが（図版11／上・中段）、11－A～13－Aでは、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての推定幅12.2mにも及ぶ大溝が、14－A～16－Aでは、白鳳期と思われる溝が検出された（図版16）。また、11－B特設トレンチ1では、二つの溝が切り合って検出され（図版17／上段）、その時期差が注目された。さらに、11－Aでは、14－Bで検出された溝と同方向の溝が検出され、あわせてその性格が問題となった。

以上のことから、調査の経過をそのまま目をおって述べることは繁雑にすぎるので、各遺構をA～Dまでのグループとして便宜的に区分けし、順次、説明していくことにする。

なお、A～Dまでのグループであつかうトレンチは、下記の如くである。

Aグループ、3－A、4－A、5－A、3－A特設トレンチ1。

Bグループ、10－Ae～w、11－A特設トレンチ。

Cグループ、11－A、11－B（eも含む）、12－A（wも含む）、11－B・12－A特設トレンチ1、11－B・12－A特設トレンチ2、12－B、13－A。

Dグループ14－A、14－B・15－A、14－B持設トレンチ1、14－B特設トレンチ2、16－A。

その他、11－B特設トレンチ1、12－A特設トレンチ1、

＜Aグループ＞

まず、3－A（2m×1m）、4－A（5m×1m）、5－A（2m×1m）でトレンチが設定された。今までの観音堂の調査の経験からV層までが一気に掘り下げられ、さらに、遺物包含層と目されている第VI層も除去された（これは後述する各トレンチも同じ）。ここにおいて、灰黒色粘土層がその下より検出され、今まで第IV層から出土した羽釜や瓦片数点を除いて遺物が見られないことから、一時は地山と考えられた。しかし、4－A、5－Aで灰黒色粘土層の色が薄くなったり、一部途切れたりしたこと、その下に、明確に地山と考えられる灰青色粘土層が見られたことから、5－Aが2m拡張され、3－Aトレンチにおいては、灰黒色粘土層が除去されることとなったのである。

ところが、この層中より、遺存状況の良好な湿気抜き状の割竹が検出されたことから、3－A特設トレンチ1が設けられ、その性格が確められることとなった。同様の割竹は特設トレンチにおいても認められ、中に土砂の堆積をとめるための葦の葉が入っていること、現在の水田の地割りとほぼ同方向であることなどから湿気抜きと判断された。しかし、その掘り方は、平面的には認められず、また断面においても、一部、土層の乱れはあるも確認はされなかった（図版22／第8・9図）。

＜Bグループ＞

このグループは、Cグループで確認された大溝の支流追求のため、調査なかばで設けられたものである。まず、10－Ａｅ～ｗが、溝幅をおさえる意味で他のトレンチとは直角の方向に設定された。ところが、溝は意に反して、ほぼ90度に曲がり、さらに、それと切り合って東西方向にはしる溝（M－５）も検出された。

これにより溝が方形を呈するかどうかを確めるため、11－Ａ特設トレンチが穿れた。予測通り、トレンチの中央に溝が確認され、また、M－５もトレンチの東南隅で認められた。しかし、方形を呈するかと考えられた溝は、わずかに見えたのみで面カキの時点で消えさり、断面にもあらわれなかった。

M－５については、大溝支流との切り合いが平面で判然としないため、10－Ａｅ～ｗトレンチの東壁部で、少し深掘りがなされ、支流が、M－５を切り込んでいることを確認した（図版22／第12図）。また、11－Ａ特設トレンチでのM－５掘り込みの際に、多数の弥生～古式土師に混って、完形復元のできる坏身（No. 201）が検出されたため、後に述べるように多くの問題を提示することとなった。

＜Cグループ＞

当初、11－Ｂ・12－Ａトレンチと14－Ａトレンチが設けられたのみであった。14－Ａで第Ⅳ層下より（一部地山の低い部分に第Ⅵ層が検出）早々と灰黒色砂層＝地山が検出されたのに対して、11－Ｂ・12－Ａで遺構が確認されたため、次々にトレンチが設定されていった。

まず、11－Ｂ・12－Ａでは、第Ⅵ層下より地山が確認されないため遺構中の可能性を考え、初めの規模より南北に２ｍづつ拡張された。ところが、第Ⅵ層下をやや掘り込んだ南側の地点で、東壁に一部うかがわれた灰青色の地山とは異なり、弥生～古式土師片や木材の他、木片多数を含む褐色がかった灰黒色のスクモ層（大溝第Ⅲ層）が検出され、また、それを切り込んだ形で第Ⅵ層の落ち込みであるM－４が検出された。これにより、11－Ｂの東側がさらに１ｍ拡張され、掘り込みのやや遅れていた北側、つまり12－Ａ地点も同レベルにそろえられた。

その結果、11－Ｂｅでは、第Ⅵ層除去によって一部明黒灰色粘土層（大溝第Ⅳ層）が薄くのっていたが、その下より地山である灰青色粘土層があらわれ、M－４も地山面にくっきりとあらわれた。これにより、弥生末～古式土師片や木片多数を含む遺構は溝になることが予測された。しかし、12－Ａではあいかわらず、瓦片が続出した。さらに、この12－ＡではM－３が、M－４と同方向で検出することができた。

この同一レベルでの弥生～古式土師片を含む層と瓦片を含む層との併存の問題は、トレンチを11－Ｂ・12－Ａの両側にいくつか設けることによって解決されることとなった。つまり、これらの層は、全体的に見て地山より低位置にあり、大溝か、あるいは、地形的なことからくるたまりの部分と考えられたからである。ここに、弥生～古式土師片を含む溝を追うために、11－Ａ地点に、そのたまり部分の端を知るために、12－Ｂと13－Ａ地点にそれぞれトレンチが穿れた。

予測通り、13－Ａで、そのたまり部分を示す地山と包含層との切れ目が確認された。

また、11－Ａでは、11－Ｂと同じく第Ⅵ層下の黒灰色粘土層を掘り込んだところから木片多数を含むスクモ層（大溝第Ⅲ層）の溝が検出され、やや東に曲がる傾向があることを確認した。このため、10－Ａｅ～ｗトレン

チが穿たれたことは、すでにAグループとして記述しておいた。

ところで、13－Aで、大溝あるいは、たまり部分を示すラインが確認された後、それに含まれる土層は次々と掘り下げられていった。しかし、調査の手順から言うと、11－B・12－Aでは瓦片を含む層からはずすべきであったが、既に、Ⅶ層除去後から湧水状態にあり、掘り下げ前の排水段階ですでに面をこわしていたので、面ならしの意味もあり同時に掘り下げられた。

ここにおいて青味がかった灰色粘土層（大溝第Ⅴ層）をベースに、12－A地点では北隅に溝が、11－B・12－Aの境付近よりは、南へ折れ曲り、11－A・10－Ae～wにつながるスクモ層の溝がそれぞれ明瞭に検出された。また、M－3の底の部分からは、緑釉片（No.202）と瓦片が出土し、溝の時期決定に大きな役割を果すこととなった。

ここで遺構確認された二つの溝は、大溝あるいはたまり部分、つまり低地帯内の支流として掘り下げられることとなった。南へ折れ曲る溝のスクモ層（大溝第Ⅲ層）からは、当初一部のぞかせていた木材の他、多くの木片が検出され、また、スクモ層下の砂層（大溝第Ⅳ層砂層）上面には、器台（No.51）の他、幾つかの土器片が検出された。ところで、ここにあらわれた砂層（大溝第Ⅳ層砂層）は、その中に無数の土器片を含んでおり、本トレンチ内で出土したものはことごとく取り上げられたが、そのあり方は一考に値するであろう。

一方、12－A北端で検出された溝は、その上部に黒灰色粘土層を残しており瓦片が出土したが、下部はスクモ層で、用途不明の木器（No.12）が検出された。はじめこの溝は、底部に砂層をもつことから、11－Bのそれと同一に考えられていたが、のちに一段階古いものと確認された。

つまり、11－Bのスクモ層、砂層（大溝第Ⅳ層）は、灰色粘土層（大溝第Ⅴ層）の切り込み内にたまったものであり、12－Aの溝は、同じく灰色粘土層を切り込んで黒灰色粘土層（大溝第Ⅱ層）が上部に堆積してはいるが、本質は、大溝第Ⅴ層下のスクモ層（大溝第Ⅵ層）がさらにその下の砂層（大溝第Ⅶ層）の落ち込みにたまったものであった（図版21／第3図）。

以下、11－B・12－Aでは、順調に地山である灰青色粘土層まで掘り下げられていった。

この結果、11－Bにおいて、灰青色の地山は、南折する溝にそって落ち込まずむしろ13－Aでみられたたまり部分を示す線と同一方向に落ち込むことが確認され、このたまり部分はほぼ12.2m幅に及ぶ大溝であることが知られた。そして、これにより南折する溝は、この大溝中に流れ込む一流路として考えざるを得なくなった。

ところで13－Aでは、たまり部分を示す線、つまり、大溝の一方のカタが検出された後、掘り込みが試みられたが、地山が砂質土であり、水湧きによる崩壊が著しいので中止された。

12－Bでは、黒灰色粘土層（大溝第Ⅱ層）より、坏蓋（No.203）や瓦片などの白鳳期の遺物が多く出土し、調査者に大溝第Ⅱ層が、その時期のものであることを確信させた。そしてその下のスクモ層（大溝第Ⅲ′層）よりは、古式土師（No.91～97）などが出土している。この中には布留期のものもあり、大溝中のスクモ層がすべて同一にとらえられないことを示していた。

このことは、大溝と平安溝（M－3・4）の方向をおさえるために設けられた11－B・12－A特設トレンチ1でも同様で、スクモ層中からは、多くの木片とまじって古式土師＝布留式併行のものが出土した。これは、大溝が長い年月にわたってその中に豊富な水を貯え、土を堆積させてきたのではなくて、そのようなことがあったとしても、ほとんどが小さな水の流れをあちらこちらと分岐させ、また、移動させながら機能してきたことをも意味している。

このグループでのもう一つの問題となるM－３・M－４はどうかと言うと、11－B・12－Aにおいて、これらの溝が現在の畔下より検出され、さらに同一時期の可能性が多かったため、条里を示すものとして注目された。現在の畔が、11－B・12－Aの境であってみれば、それはそのまま、南のアスファルト道の側溝より 110mの地点であることを示していることになる。

また、第３図の如く、第Ⅶ層より畔が現在まで継続していることと考え合せれば、当然その下層で検出されたM－３・M－４を側溝として、平安期の坪堺の道があると考えても奇異ではなかろう。

しかし結果的には、11－B・12－A特設トレンチ１において、その方向が現在の畔の方向よりもやや南にずれて検出され、さらに、11－B・12－A特設トレンチ２では、M－３・M－４として十分おさえきれないものとなった（図版21／第６・７図）。

＜Dグループ＞

観音堂周辺は、他と違ってほぼ東西の畔割りとなっていることははじめに述べたが、その境であるほぼ東西方向に走る水路が、14－A・B地点を通っている。Dグループはこの地点より北側、観音堂近くのトレンチをいう。

まず始め、14－B・15－Aトレンチと16－Aトレンチが設定された。16－Aでは、早々と地山の灰青色土が見られ、遺構は検出できなかった。ところが、14－B・15－Aトレンチの南側、つまり、現在の水路付近より古い様相をもった溝（M－１）がそれと同方向であらわれた。この溝はⅦ層下の灰黒色砂層＝地山を切り込んであらわれたもので、多くの瓦片が出土した。また、その右岸には、浅い溝状の落ち込みも認められ、瓦片も含まれていた。

これにより、M－１の方向を得るため11－B特設トレンチ１、14－B特設トレンチ１が設定され、のち最大幅を得るため14－B特設トレンチ２が設定された。14－B特設トレンチ１では、M－１は同じく灰黒色砂層を地山としており、右岸にやはりM－１より古い落ち込みが見られた。（図版22／第17図ｅ層）

また、14－B特設トレンチ２でも右岸にM－１より古い落ち込みがみられ（図版22／第16図）瓦片や小孔を穿った板（図版35－11）などが出土した。その性格は51年度の調査によってあきらかにされるであろう。

こうした結果、溝＝M－１はU字形の溝であり、ほぼ現在の水路と同じ方向に走っていることが知れた。

＜その他のトレンチ＞

ところで、これより以前、14－B特設トレンチ１でM－１が検出された際に、現在の水路よりもやや南にふれていると考えられていたことから、11－B特設トレンチ１が設定された。このトレンチの設定は、M－１の追求のみではなく、11－B・12－Aで検出された平安時代の溝であるM－３・M－４との切り合いをも確認するためであった。

予測通り、M－４とM－１が切りあって検出され、次に、M－３とM－１の切り合いを見るために12－A特設トレンチ１が設定されたが、M－３は検出されなかった。しかし、こうした考えは、まわりの調査が進むに従って打ち消されていった。

まず、M－１と思われていた溝は、切り合い確認をするために幾度も面がけずられ、①M－１と違って幅の

狭いものと認められた。②14－B特設トレンチ2の調査からは、M－1は、本トレンチにあらわれるような方向にはならず、現在の溝と同一方向を保っていることが予想されたこと。これら①②のことから、この溝は、M－1の南に位置する別の溝＝M－2であると考えられた。

さらに、M－4と考えられていたものは、11－B・12－A特設トレンチ1・2の調査でM－3・4の平安溝の延長かどうか判断し難くなった。もし、強引に比定するなら、むしろM－3の方ということにもなる。

いずれにしても、これらの溝の性格は、51年度調査にゆずった形となった。

（中西常雄）

3 遺　　構

本調査で検出された遺構は、調査の経過の中で述べたとおり、大小いくつかの溝（Mで示す）と遺気抜きである。これらの説明をする前に少々、土層についてことわっておかなければならない。それは、本報告文で述べる層位は、スクリーントーンで示した基本土層の順位に依拠しているということである。

これは、調査区が広きにわたり、地山も含めて各トレンチで土層の堆積状況が一率ではなく、同じ土層でもトレンチによっては、異なった層として表現される不合理さをおこすため、銘名上の修正を加えたのである。ただ、すべてがこれにより統一的に土層間の上下関係がおさえられたわけではなく、第Ⅰ層～第Ⅵ層を除いては各グループの小範囲の中で統一性をもたせたのみであった。

しかし、B・Cグループにおける第Ⅵ層は基本的に第Ⅵ層とかわりがないと考えられるため（後述）、グループをはずした形での遺構説明は混乱なくすすめられると思われる。これにより以下、遺構毎に説明していくこととする。ただし、混乱をさけるため、第Ⅰ～第Ⅵ層以外はそれが何のグループの第何層かを示すことにした。たとえばDグループの第Ⅵ層なら、D－第Ⅵ層という表現をとった。

＜M　－　1＞　　（図版16参照）

14－B・15－Aトレンチの南隅、つまり14－B部分ではじめ検出されたもので、推定幅3～4m前後、深さ0.4mの溝である。この推定幅は、以下の考察によるものである。方向確認のために設けた14－B特設トレンチ1・2と14－B・15－Aトレンチでの溝の右岸を結んだ線上より、左岸の検出できなかった14－Aトレンチの北端へ直角に向けた長さを計り、次に最大幅で検出できた14－B特設トレンチでの溝幅を計った。そうして、両者の中間点を機械的に求め、それ前後としたのである。これは、溝底が極めて平らなU字形であるため中央部分が想定できず、このようなあらわしかたをした。

なお、M－1の方位は、近距離でしかも曲折部分の測定なのであいまいさを残すが、ほぼ N－77°－Wである。

溝中の堆積土は、暗黒灰色土のみで、一部それに灰褐色土の堆積した部分（図版22／第15図）も認められるが、いまのところ溝中の一般的なあり方ではなさそうなので言及はしないでおく。

次に出土遺物であるが、土器片はほとんどなく（裏）布目文、（表）格子目文の瓦が多く出土した。したがって、溝が機能していた時期は白鳳期以降ということになるが、その出土遺物のあり方から考えて白鳳期そのものに絞ってよかろう。

けれども、これを層位関係から考えればやや不安も残る。それは、本溝が、14－B特設トレンチ1では第Ⅵ層

除去後に検出されたものであるのに対して、11－B・12－Aトレンチの平安期溝M－3・M－4がC－第Ⅶ層除去後に検出されたものであるということである。さらに、本溝に切られて、次の地山である灰黒色粘土あるいは砂層までの間に、同じく白鳳期の瓦が出土する小溝とも包含層ともつかぬものがあるということである。（第15図b・c層、第17図c・d層、第16図D－第Ⅶ層）

しかし、第Ⅵ層とC－第Ⅶ層が本質的にかわらないものとすれば、――事実その層分けは、地下水位と関係するかと思われる鉄分の浸透部分とそうでないものとに分けた――問題は少なくなろう。また、小溝とも包含層ともつかぬ層も、出土遺物が木片や白鳳期のみの瓦片であってみれば、この層自体も白鳳期中の一時期の堆積と考えられ、本溝はこれと同時期中の差として考えることができよう。

＜M　－　2＞　　（図版17／上段参照）

本遺構は、11－B特設トレンチ1で検出された幅0.75m、深さ（未掘のため）不明、方位N－89°－Eの溝である。このトレンチは、調査の経過で述べたように、M－1の方向がまだ十分想定されない時点で、それの延長とM－3ないし4の交点を求めるために設けられたものである。しかし、調査がすすむにつれて、この溝はM－1と異なったものであると認知されるようになった。その経過は既に述べた。

遺構中の堆積土は、M－1と同じく黄緑灰色粘土で、M－3らしきもの(?)に切られているようである。つまり、このM－3(?)はM－2とよく似た色の堆積土を有しているので、切り合いは断定できないのであるが、わずかの黒砂を含み、これがM－2上にも及んでいるため上のように考えたのである。

本溝の時期については、遺構を掘り込んでいないため、これもまた断定はさけざるを得ないが、表面から白鳳期の瓦の出ていること、M－1とほぼ同方向であることから、白鳳のある時期と考えられよう。ただ、この溝が、M－1と平行の位置にあり、同時期に機能していたかどうかは、性格追求が十分でないため不明と答えざるを得ない。

＜M　－　3＞

11－B・12－Aトレンチ、11－B・12－A特設トレンチ1の12－A側で検出されたもので、幅約1.4m深さ0.22mの小規模の溝であり、大溝を切って形成されている。方向はN－51°－Wで、M－4とともに、現在の水田地割より下流に向ってやや南にぶれている。

堆積土は、C－第Ⅶ層土に砂分を多く含む土層である。

なお、11－B・12－Aトレンチでは、本溝の底より、緑釉片（No. 202）、瓦片が出土しており、溝が平安中期以降のものであることを示している。

次に、このM－3と、11－B特設トレンチ1で検出されM－2と切り合っているM－3(?)との関係を一言述べておこう。この特設トレンチが設けられ溝が検出されたとき、M－3と推定されたように、M－3の延長線上にM－3(?)がある。ただ、その断面がM－3のそれのようにしっかりとしたものではなく、自然流の如き、浅い窪みのような形であらわれたこと（図2）。さらには、M－3の方向よりもトレンチ東壁ではやや南の位置にあり、そこより西壁に向って北に曲がっていく傾向を示していたことから、一時は、M－3とのつながりは否定されていた。

ところが、11－B・12－A特設トレンチ1が設けられ、M－3・4が双方とも11－Bよりは南の位置で検出されたことから、再びM－3とのつながりが問題となった。つまり、現在の水田地割と同方向であらわれた

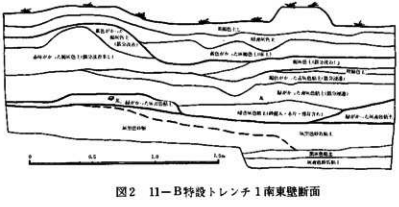


図2　11－B特設トレンチ1南東壁断面

M－3は、この特設トレンチ1に近づくにしたがって、やや南に向きをかえ、11－B特設トレンチ1できらに北に向き直したと考えるに至ったのである。

しかし、両特設トレンチの中間点に設けられた11－B・12－A特設トレンチ2では、M－3らしきものが検出されはしたが、層位から考えると低位にあり、M－3とM－3?をつなぐものかどうか再度不確かになったのである（第7図）。

以上のように、M－3とM－3?との関係は、同一線上に捉え切れないところがあり、一層綿密な調査を必要とするところである。

＜M　－　4＞

今少し触れたように、M－3とほぼ2.65mの間隔をおいて平行しており、その地点が坪境であることも関係して、M－3とともに条理が問題視される溝である。規模としては幅0.95m、深さ0.22mで、方向はN－47°－Wである。

11－B・12－Aトレンチでは、11－B側で大溝を切ってあらわれており、明らかにC－第Ⅶ層灰褐色土が陥ち込んでいる。

時期は、出土遺物がないため定かではないが、11－B・12－A特設トレンチ1でもM－3とほぼ同一距離を保ちながら存在しているので、M－3と同じく、平安中期以降のものであると考えられる。

なお、11－B・12－A特設トレンチ2ではM－4は検出できなかった。

＜M　－　5＞　　（図版12参照）

10－Ａｅ～ｗトレンチと11－A特設トレンチ1で検出されたもので遺構中の堆積土は、黄緑灰色土層である。ただ両トレンチとも、溝の一部が見られたのみで、溝幅、深さ等の規模は言及しえない。これについては、M－5の性格を究めるために幾つかの特設トレンチが設けられたので、その項を参照されたい。

したがって、ここでは、付近の各トレンチで検出された遺構との絡みで、少々紙面を費しておきたい。

本遺構中よりは、幾つかの弥生式土器片に混って白鳳期の坏身（No. 201）が出土しており、その時期が推し測られる。そして、この溝はN－89°－Wのほぼ東西の方向にはしっている。ここで、想起されるのがM－1・M－2で、これらもほぼ白鳳期と考えられ、しかも、M－5とほぼ同方向の溝である。こうしたことは、白鳳期に、東西の地割がこの調査区域内に存在していた可能性を意味するものであろう。ただ異なるのは、M－1の遺構内より多くの瓦片が出土したことに対して、M－5は弥生式土器片、坏身などであり、瓦片が、二、三片あったのみである。このことは、両溝が当時どのような遺跡、遺構の上を流れ、付近にどのような構築物が存在していたかによるものであって、時期的な差というよりも、存在する位置の差として考えるべきではなかろうか。もしそうだとすると、このことによって遺跡の性格が一層浮び上ってこよう。

＜大　　溝＞

11－B・12－A、11－B・12－A特設トレンチ1、12－B、13－Aの各トレンチで検出されたもので、幅12.2に及ぶ大溝であり、深さは、底確認がなされた11－B・12－Aトレンチ、12－Bトレンチで1～1.2mである。

本遺構の規模に比して設けられたトレンチの数が少ないので全貌は十分に述べ切れないが、N－85°－Wの方向をもち、堆積土は下層より、砂層（大溝第Ⅶ層）、スクモ層（大溝第Ⅲ～Ⅵ層）、粘土層（大溝第Ⅰ～Ⅱ・Ⅱ′層）というパターンと考えられる。以下、この堆積土を順おって述べていき詳述したい。

(1) 砂層（大溝第Ⅶ層)　底確認がなされた11－B・12－Aトレンチ、その上面まで掘り下げられた12－Bトレンチで検出されたもので、砂粒が厚さ約0.46～0.5 mにわたって層をなしていた。そのあり方から、この大溝底部に一般的に検出さるるものであろうと考えられる。遺物は細かい破片のみで図示し得なかったが、弥生後～末期の可能性がある。

なお、この砂層の下は、11－B・12－Aトレンチでは、灰青色粘土層の地山があらわれた。

(2) スクモ層（大溝第Ⅲ～Ⅵ層)　大溝の中位に認められるもので、粘土層や砂層が一部くい込み、また、地点により出土遺物の時期にひらきがあり、その層の形成過程は複雑である。

まず、11－B・12－Aトレンチ（第1図～3図参照）について述べよう。このトレンチでは前述の砂層の上に、普遍的に厚さ0.12～0.28mのスクモ層（大溝第Ⅵ層）があり、数々の木片や、板状の用材、トレンチの西壁（12－A部分）には、櫓らしきものが一部伺われた（その破片を図示したので参照されたい―図版34－4）。さらには、北隅に砂層を切り込んで、このスクモ層の落ち込みがあり、その中より用途不明の木製品（図版35－12）が出土した。この層よりの出土土器は、数少ない小片のみであるが弥生末期ともものであろうと考えておきたい。次にこのスクモ層の上に12－Aでは、青味がかった濁灰色の粘土層（大溝第Ⅴ層）があり、これを切り込んで小溝がある。この小溝は11－B部分の北側、つまり12－Aとの境目付近の東壁から、11－Bの南壁へと流れをかえて11－Aにつながる。そして、そのトレンチでは、再び東にのびる傾向を示しており、10－Ａｅ～ｗでは東南方向へ向って曲っている。

このような小溝は、どのように理解すればよいのであろうか。N－85°－Wに向かって流れる大溝の支流としては考えるわけにはいかない。なぜならば、そのように考えると、再び東側に向きを変えることの意味が判然としない。また、この小溝の底に土器の小片を無数に含む砂層があり、それをもって水の流れの早さを想定するなら、逆流することの意味を説明するのはなおさら困難である。

そうであるなら、むしろ、10－Ａｅ～ｗ側から大溝に流れ込むものと考えざるを得ない。調査の経過では、11－B・12－Aより拡張として、11－A、10－Ａｅ～ｗを穿ったため先述の順位で述べざるを得なかったが、このように考えることが順当であろう。その場合、大溝の動きと堆積土の形成過程にそって、次のように説明することができる。

大溝形成当初、水流は比較的穏やかであったが、その底に普遍的に砂を堆積させるほど規模は大きなものであった。ところが、琵琶湖の水位の上昇のためであろうか、弥生末の頃になると、水の流れは停止し、スクモ層（大溝第Ⅵ層）を堆積させていった。その後12－Aでは、青味がかった濁灰色の粘土層（大溝第Ⅴ層）が厚さ0.06～0.12m程堆積し、大溝左岸付近11－Bでは、それと前後して青味のある黄緑灰色土（大溝第Ⅳ′層）が堆積した。この時期は出土遺物から、明らかに弥生終末か最古式土師器の時期かと云々される頃のものであることには間違いはあるまい。

そうして、やがて水位は下降する傾向を示したが、その時点で、大溝第Ⅳ層砂層を堆積させるような水の流

れがおこったと考えられる。その場合、この水流は小溝を形成し、山側から琵琶湖の方へと流路をとっていたが、低地に（これについては考察の項で述べる）大溝が存在していたため、水流は10－Ａｅ～Ｗで大溝へと向きを変え、これに注ぎ込んだものであろう。

ただ、大溝のカタの部分は大溝第Ⅳ′層がすでに堆積していたことから、その水の流れ込み方は、大溝の流れの方向と異なったものになったと思われる。つまり、大溝第Ⅳ層砂層を運んできた水流は、大溝のカタの部分で不均等に堆積したⅥ′層の低い部分をぬうかのように東へ流れ、大溝の中央部へと進出する。そうして、合流することにより、流れを大溝と一体にし、西へと流れることになったのであろう。

こうした結果、大溝自体、水位の上昇を再びひき起こし、これに注ぎ込んだ小流もその流れを停止し、スクモ層（大溝第Ⅲ層）の堆積をひき起したのであろう。

なお、大溝第Ⅳ層砂層が、砂層というよりも土器層と言える程、最古式土師が云々される時期の土器を、小片であるが無数に含んでいたこと。スクモ層（大溝第Ⅲ層）が、柱状や板状の木片、流木、さらには、葦の葉などの腐食物を多く含んでいたこと。また、第１図の如く小溝の断面には、水門としての意味合いでもあるのであろうか、矢板かクイ跡と思われる幅６cm深さ30cmの落ち込みがあり、その形成が元来自然のものとしても、手入れがなされていることなど興味ある事実が多い。

以上のように、大溝に注ぎ込む小溝のあり方を検討したのであるが、話を再び大溝中心にもどし、スクモ層（大溝第Ⅲ・Ⅲ′～Ⅵ層）の最終堆積について述べておこう。

小溝にスクモ層が堆積した時、大溝を含め、水流は上昇したまま再び停止したことを述べたが、これがほぼ停止したままの状態で再度穏やかに下降したふしがある。それも、水の流れの幅をせばめながら。つまり、11－Ｂ・12－Ａのスクモ層よりは、弥生末～最古式土師の土器片が多く出土したのであるが、12－Ｂや大溝の右岸を検出した11－Ｂ・12－Ａ特設トレンチ１のスクモ層（大溝第Ⅲ′層－第６図）では、古式土師器（布留期のもの）が出土した。特に、12－Ｂでは、こうしたスクモ層（大溝第Ⅲ′層）が砂層（大溝第Ⅵ層）の直上に堆積しており、スクモ層の中でも比較的低位置にある。

これらのことは、大溝が今述べたように、水流が停止したまま下降し、溝の中央部から右岸の方にその水流幅をせばめながら移動していったと考えざるを得ない。そして、大溝第Ⅲ′層＝スクモ層の最終堆積した段階で、溝として機能はほぼ終わったと考えてよいであろう。

(3) 粘土層（大溝Ⅰ～Ⅱ・Ⅱ′層）　大溝中、さらに、これに注ぎ込む小溝の上部（第１～３図）、または大溝の上をおおって（第５図）普遍的に認められる褐色がかった黒灰色の粘土層である。

こうしたことは、11－Ｂ・12－Ａ特設トレンチ１（第５図）では、大溝中の堆積土は、スクモ層（大溝第Ⅲ′層）をもって完了し、その上にこの粘土層が堆積していることを意味する。

しかし、11－Ｂ・12－Ａトレンチや、11－Ａ、10－Ａｅ～ｗトレンチでは、粘土層の堆積時でも、大溝とそれに注ぎ込む小溝の機能が、完全に停止していなかったことを意味している。

この様な相異は、大溝が切り込んでいる地山の傾斜によるものであり、琵琶湖に近い11－Ｂ・12－Ａ特設トレンチ１では、大溝が既に小規模な氾濫現象を起しているとしか考えようがない。否、むしろ粘土層堆積時には、溝というよりも総体的に低湿地の如き景観をもち、大溝はごくわずかその上流域でのみ、その姿をとどめ得たであろう。

この粘土層中よりは白鳳期の瓦片が多く出土しているが、スクモ層堆積後五世紀代前半～白鳳期の約二百何十年間かは右のような様相を呈していた荒地であったのではなかろうか。

次に、一言述べておかなくてはならないことがある。M－5との切り合い関係についてである。第12図のように、白鳳期の溝であるM－5が、最古式土師を云々する時期から白鳳期まで継続していると考える小溝（大溝に注ぎ込む小溝）によって切られている事実がある。この断面については、図示後、すぐ埋め戻したため、再度、または、再々度確認するということはなかったが、これを事実として受けとめると次のように考えられる。大溝とともに低湿地化しながらもかすかに命脈を保っていた小溝は、白鳳期に至って、寺域に伴なう開発のために設けられた（考察の項で述べる）M－5によって切断されることになった。ところが、寺院が廃絶したためであろうか、M－5はM－1とともにすぐさま埋め戻され、その地形的な要因から、切断された小溝が再び回復し、M－5を切り込むに至ったのではなかろうか。M－5が設けられたときは、小溝は埋め戻されることなく、一帯の土地自体も荒地のままであったと考えられよう。それ故、小溝は、低湿地的な様相を示したまま、一方ではM－5に水を注ぎ、M－5が氾濫した場合には、反対方向からその水を受け入れ、同じく低湿地化した大溝の方へ水を送っていたであろう。M－5が埋め戻されたとき、再び何事もなかったの如く低湿地的機相は継続し、粘土層（大溝第Ⅰ～Ⅱ・Ⅱ′層）を大溝に堆積させ続けていたのである。

なお、これら褐色がかった粘土層は、その相対的な差によって、白色の強いもの（大溝第Ⅰ層）、ややスクモが混入しているもの（大溝第Ⅱ′層－但し、11－A、10－Ae～Wではスクモの混入はない）、そうでないもの、（大溝第Ⅱ層）の三つに区分できることを付記しておきたい。

＜湿気抜き＞　（図版11／上段・中段参照）

3－A、3－A特設トレンチ1において検出されたもので、現在の水田地割とほぼ同一方向にある。細かく割った竹や、細い竹をいくつか組み合せ幅0.12m程のパイプとしている。その中には、土が充満していたが、保存の良好な葺の葉などが多くみられ、湿気抜きとして使用する際の土砂混入止めの役割を果していたものと思われる。

本遺構は、床土下にはなく、A－第Ⅶ層（灰黒色粘土層）から検出されたものであり、この第Ⅶ層下が灰青色粘砂層の地山であることから、本地区の水田開発と深いかかわりがあると考えられる。ただ、施設のあり方や形態から考えると湿気抜きと考えざるを得ないが、これが、A－第Ⅵ層を切り込んで設けられていないところにやや問題を残す。第9図を見ると本遺構の上部には、土層の乱れが伴なっており、切り込みがあるのではないかとして何度も確められたが、平面にも断面にもそのあとは残していなかった。本遺構が湿気抜きとしてしか考えられないとすると、本遺構敷設後、床土としてA－第Ⅶ層を土入れし、A－第Ⅵ′層を耕作土としてさらに土入れしたことになる。そして、それはそのまま当時の水田開発が大がかりなものであったことを意味するようになる。

しかし、湿気抜きとして使用するためには、水通しを拒絶する床土を切り込む必要があるようにも思われるので、断言はせずにおこう。

いずれにしても、本遺構を湿気抜きとして取り扱う以上、A－第Ⅵ′層が耕作土として考えられ、その下層に水田面が想定できないことから、本地区の水田開発と深いかかわりをもつことは否定できない。A－第Ⅵ′・Ⅶ層からの出土遺物がないため、その時期を限定し得ないが、最も古く考えても平安期以降ということになろう。これは、A－第Ⅵ′層に相当するであろうC－第Ⅵ層が、平安中期頃の溝（M－4）を埋めているC－第Ⅶ層と本質的な相異はないと考えられたためである。ただ、A地区とC地区との間に、後述するようにA－第Ⅵ′層とC－第Ⅵ層との関係を裁ち切る微高地部分があるため、両者が一線でつながれるかどうか疑問の余地を残す。その意味では、時代幅もまた考えざるを得ず、中世末まで下げて考える必要も出てくる。本調査では第Ⅰ～Ⅴ

層までの分析はおこなっていないので、正確に述べたとは言えないが、これは、近くの観音堂の調査で、第V層がその出土遺物から中世末～近世初期以降に堆積したものと考えられているためである。　（中西常雄）

＜特設10トレンチの考察＞

既堀、特設11トレンチにおいて、東側方向に伸びる溝が確認され、特設11トレンチ出土溝の方向性を追求、確認するため、特設10トレンチ（1m × 4m）を設定した。基本的な層序は一層＝表土、二層＝床土、三層＝砂質混りの灰白色土、四層＝暗灰色粘質土、五層＝灰黒色粘質土、六層＝黒灰色粘質土、七層＝灰青色粘土であり、七層の灰青色粘質土、琵琶湖水成ローム層がベースとなり、遺構はこの琵琶湖水成ローム層が切りこまれた状態で出土した。出土した遺構は幅50センチ前後、深さ30センチ前後で、U字型に掘りこまれ、北北東に走る溝であり、既堀・特設11トレンチで出土している溝とは、溝巾と溝の方向性も若干異なり、異質の溝である可能性もある。

溝の性格、年代らを調べるために出土溝の一部掘りこみを行った。溝の底の土質は小礫を含む、暗黒色砂質土であり、その土に、砂質混りの灰黒色土、灰黒色砂質土、濁灰黒色粘質土、暗黒色粘質土の堆積が確認された。

出土遺物は器台の脚部と、外面ハケ目、内面ヘラ削り調整を施した甕の胴部の破片、他数点の器形不明の土器が出土し、溝の時代は古式土師器の時代と推定される。既出の六本の溝とは溝幅、方向性も異なり、特設10出土溝＝溝6はU字型を呈する、古式土師器の時代に推定される単独の溝であることが判明した。（勢田広行）

＜特設11トレンチ＞

11－Bトレンチにおいて確認された東西方向に走る溝の性格を追求すべく、その延長上に特設トレンチ11、（1m×2m）を設定した。トレンチを掘り下げた結果、11－Bトレンチで確認されている東西方向の溝の続きと思われる溝、及び条里と平行に走ると思われる溝を検出しえた。両者は、ほぼ同一平面において切り合っており、後者が前者を切っているという関係を認めることができた。両者の性格、年代を確認するために掘り込みを行なった。その結果、東西方向の溝は褐黒色土層上面から掘り込まれ、灰青色粘質土層にまで及んでいることが判明した。また、溝内の層序は、一層＝黄々褐灰色土、二層＝灰褐黒色土、三層＝黄褐色土ブロックを若干混入する灰褐黒色土で、成層的に堆積していた。これに比して、条里の方向に走ると思われる溝は、片側のみではあるが、U字形の断面を呈しており、その層序は複雑な様相を示していた。なお、遺構の年代については、年代を決定しうるような遺物を検出できなかったため、不明と言わざるをえない。　（奥野宗寛）

＜特設12トレンチ＞

特設11トレンチで検出された溝－5の続きを確認する為に、特設11トレンチの西方約18mの所に1.4×1m・2.3×1mの特設12トレンチを設定した。先ず、層序をのべるならば、耕土・灰褐色粘土の床土、第3層の灰褐色粘土層（床土との区別は鉄分の量の多少である）、第4層の暗灰色粘土層、第5層の暗灰色粘土層（第4層にくらべると色がやや濃くスクモを含む）、地山の青灰色粘土層となる。

溝は、地山を切り込むかたちで出土し、方向から言って特設11トレンチで検出された溝－5の西側の続きと考えられる。この溝の方向は、ほぼ東西を示す。南側の約½を掘り込んだのであるが、この溝内の土は、第5層の暗灰色粘土と同一のものであったが、スクモをより多く含んでいた。溝巾は約1m、深さ約0.3mで、船底型をしていた。この溝内よりの出土遺物はなく、年代決定の手がかりはない。　（本田修平）

＜特設13トレンチ＞

11－Bトレンチ、及び特設11、12トレンチにおいて検出された東西方向に走る溝が、どの程度西方向に続くかを検討すべく、特設12トレンチの西方36mの地点に特設13トレンチ（1.6m×3.6m）を設定した。トレンチを層毎に掘り下げていった結果、地山である灰青色粘質土層に達するまで90cmを測り、地山上面から掘り込まれている東西方向に走る大溝の南の肩を検出した。このトレンチにおける層序は、地山までに6層、つまり一層＝耕土、二層＝床土、三層＝黄々褐灰色粘質土、四層＝黄々褐灰色粘質土に黄褐色土が混入、五層＝黄々褐灰色粘質土、六層＝暗灰色粘質土、また溝内は2層に分かれ、上層＝灰褐色粘質土（スクモ混入層）下層＝暗灰褐色粘質土（灰青色粘質土のブロック状混入）に分けられる。なお出土遺物としては、溝下層より弥生式土器の高坏脚部と若干の破片、及びハンドスコップ状木器と若干の焼けた木片が認められた。土器の出土を見たと言っても少量であり、二次的堆積の可能性も十分考えられ、この溝を弥生時代のものとするには不十分である。その他の各層においては、年代を決定しうるような遺物は何ら確認できなかった。（奥野宗寛）

＜特設14トレンチ＞

特設11・12トレンチで検出された溝－5のさらに西側の続きを見る為に、特設12トレンチの西方約9mの所に2×4mの特設14トレンチが設定された。このトレンチの層序は、特設12トレンチと同一である。遺構は、特にトレンチと同様に地山を切り込んだかたちで東西に走る二本の溝が検出された。この二本の溝の南側を溝－6、北側を溝－7とすると、溝－6は現状ですくなくとも2m以上の幅を持つし、溝－7は1m以上である。溝－7は入り込んでいる土が灰色であり、他の溝とやや違いを示す。溝－6はスクモを含んだ暗灰色粘土が入り込んでおり、溝－5とのつながりはややおかしいがこの溝が下流（湖岸側）にややひらきながら流れ込む可能性が考えられ、特設13トレンチから検出された大溝とつながる可能性はさらに強い。なぜなら、特設12・13・14トレンチで検出された溝は地山を切り込んでおり、同一時代に作られたと考えられるからである。なお、特設14トレンチにおいては、掘り込みを行っていないのでその形状・深さ・時代などは不明であると言うほかはない。（本田修平）

＜特設15トレンチ＞

14－B、15－Aトレンチ及び11－B特設1トレンチより、条里に伴うと思われる東西方向の溝が検出されており、この確証を得るため11－B特設1トレンチより南方向へ一町（約109m）離れた地点に、この溝に垂直に4.0×1.5m、3.0×1.5mさらに北に2.0×1.0m、2.0×1.0mののトレンチを各々アゼを残して設定し、層毎に掘り下げたが何らそれらしき遺構は検出できなかった。なお、南端のトレンチに於て、黄々灰褐色土層の下、灰褐黒色土層を切り込んで直径約2.4mの円形プランの土坑が検出された。この土坑の内部は三層に分かれ、第三層に於てその下の青灰色砂層に乗る形で、革のような植物繊維と木片が散在しており、実測に耐えない少量の土器片も検出された。この青灰色砂層以下は掘り込んでいないため遺構の性格は明らかではないが、おそらくこの青灰色砂層を底とする円形の井戸の上部を削平されたものと思われ、出土した土器片（器台受部口縁）からその破棄された時期を推定するなら弥生時代末期から古式土師の時期と比定し得る。

（石原道洋）

4 遺　　物（瓦）

片岡観音堂遺跡における瓦の出土は、特設トレンチ10～15を除く、すべてのトレンチにおいて認められ、その総数はコンテナパック10箱に達した。

出土瓦中大部分が平瓦、丸瓦片であるが、軒丸軒片四点、軒平瓦片二点が含まれている。

軒丸瓦

素弁八葉蓮華文軒丸瓦片と同花弁片の二点及び複弁八弁鋸歯文縁軒丸瓦片とその中房部片の二点の総計四点である。

軒平瓦

重弧文軒平瓦片二点があり、いずれも、顎部の張り付け面からの剝離となって、三重弧か四重弧かが判明しない。なお、裏面＝凸面には二本の凸線が巡り、裏甲からこの部分までが張り出していたことを物語るものである。

この軒平瓦は複弁八弁蓮華文軒丸瓦と対をなすものであろうか。

平瓦・丸瓦

平瓦・丸瓦は総じて磨耗が著しく、正しく観察することの困難なものを除外し、平瓦約70点、丸瓦約20点を詳しく観察した。その結果は表(2)のとおりである。

平瓦は、その裏面＝凸面における正格子目叩文が99%以上を占め、縄目叩文は二点が知られたにすぎない。格子目叩文中には極少ではあるが、斜格子や5・6角格子目叩文が正格子目叩文の例外的変形として認められる。

正格子目叩文は総じてその目が小さく、線は太い。

内面＝凹面はすべて布目が認められ、布の繋ぎは認められなかった。

なお、これらの平瓦には、焼成の相違により二者がみうけられ、一方は通有の灰白色あるいは黒灰色を呈するものであるが、他方は、いわゆる赤瓦と呼ばれるに近い赤橙色を呈したやや軟質のものであり、後者の方が数量的に少し勝っていた。

しかし、この二者が、軒丸瓦の二者とどう対応するかは不明である。但、素弁八葉蓮華文瓦二点がいずれも平瓦の後者ーすなわち赤瓦と同系の焼成に成るものであって、あるいは関連を有するかもしれないが、複弁八弁蓮華文瓦片のうち中房部分片のものは、いわゆる赤瓦系譜に近い橙灰色を示すものであるため、いずれとも決め難いとみておきたい。

丸瓦は、その裏面＝凹面はすべて布目である。他方、表はすべて調整を施し、格子目叩文や縄目叩文の残るものは皆無に等しい。

（丸山竜平）

5 旧地形の復元よりみた各遺構の位置づけ

この度の調査で、多くの溝あるいは湿気抜きが検出されているが、これらの遺構を位置づけるために旧地形の復元を行なっておきたい。

観音堂片岡遺跡の調査区で地山を構成しているものは、主として灰青色粘土層あるいはその下に伺われる暗灰青色粘砂層であるが、その堆積の仕方は一定ではなく、粘土層が厚いところ薄いところ、ないところなど色々ある。例えば、13－Aの大溝のカタは、その大部分が暗灰青色砂層で構成され、一部、灰青色粘土層がそ

の上に乗っかって検出されている。

また、この溝カタはそれのみにとどまらず、さらに灰黒色砂層に薄く覆われている（第5図)。この灰黒色砂層は、本調査区においてやはり地山を構成するものであるが、同色の粘土層も含めて、13－Aトレンチ以北で主として検出されるものである。

今、これらの地山の線をつないでみると興味ある事実が導き出せる。14－B、15－Aトレンチの地山面（絶対高=84,815）を基準にして考えると、M－1をはさんだ反対側14－A～B－10では、マイナス15～25cmの低地形となっており、その部分に大溝が通っていることになる。また、この低地形は、南にそのままのびていくが、5－Aでは、プラス10～15cmの微高地を形成していることがわかる。低地部分との比高差は35cm前後である。しかし、4－Aから再び低地形に移る傾向を示し、3－Aでは、マイナス15～25cmとなっている。このように調査区では、二つの微高地と二つの低地部分が旧地形を構成していることになる。

次に、以上の認識をもとにして、時代毎に遺構を説明していくことにする。まず弥生後～末期に――地形から考えると…野洲川旧南流が氾濫をおこし、その支流として低地部分に大溝が形成されたと考えられる。遺構の項でも述べたように、当初、溝底に砂層を堆積させる程の水流があったが、弥生末か古墳時代初頭には、琵琶湖の水位の上昇のためか水流が停止し、白鳳期には湿地のような景観を呈していたと考えられる。

こうした時期に、14－B以北の微高地の南端にM－1・M－2が、低地にはM－5がそれぞれ東西方向に開設された。特にM－1の底は先述の基準からするとマイナス35cmで、低地部分と比べて10cm低いだけである。[1] このことは、M－1が、人工のものとしか考えようがないことを意味する。

では、なんのために微高地の南端に溝が開設されねばならなかったのであろう。M－1内の出土遺物のあり方からずばり言って、この微高地に建立された寺院の南端を画するためではなかったであろうか。現在、このすぐそばに美しいお姿をした平安仏像を安置する観音堂がある。この平安仏像は信長の焼き打ちにあって、近くから移されたとのことであるが、観音堂と周辺の水田地割も含めて本調査でその前身の一端が伺れたようである。

M－5もこの寺院建立に伴って開設されたものと思われるが、低地に設けられたのは、寺院建立に伴って水田開発が志向されたためでもあろうか。その場合M－1・M－2も用水として十分機能を果す位置にはあった。しかし短期間のうちに寺は廃絶され、M－1・M－5も埋め戻されたようである。それが何によるものかは明らかではないが、M－1内の遺物のあり方が短期間内の埋め戻しを示唆している。

この寺院廃絶後、しばらく大きな変化は見られない。湿地部分も次第に堆積作用が進み、大溝が表面では確認されない程になった。大溝第Ⅰ～Ⅱ・Ⅱ′層が周囲の低地部分と同じレベルまで堆積したのである。

そうして、平安中期に至り、旧大溝の上に二つの溝M－3・M－4が開設された。この溝はM－1・M－5と全く方位を異にし、現在のこの付近一帯の水田地割とほぼ方位を同じくするものであった。そうしてまた、二つの溝にはさまれた2.65mの道（？)は、1－Aの南にある水路やアスファルト道から約1町の距離にあり、条里の様相が濃い。しかし、このM－3・M－4も約20m下流の11－B・12－A特設トレンチ2では、その姿をとどめていなかった。この時期には、そのレベルからまだ微高地部分も存在しており、溝カタの線が、地山である灰黒色砂層や、M－5の切り込みにつながるものであってみれば当地が水田開発された形跡はない。M－M－3・M－4は、上流域の開発に伴うものでもあったのであろうか。

本地域に、純然と水田開発がなされたのは第Ⅵ層堆積後であろう。（但しこれ以前にも低湿地として、それなりの土地利用はあったかもしれない。）今、第Ⅵ層上面のレベルを求めていくと、絶対高=84.793の線で統一される。このことは、整地が行われたことを意味し、12－Aポイント直下では、畔が削り出され（第3図)、水

田開発がなされたことが知れる。ただ、Ⅵ層の堆積のない二つの微高地は、整地を受けてはいるようであるが、地山線が整地部分まで上ってくるので、耕地化されているかどうかは疑問である。

いずれにしても、現在の条理地割に見られる水田開発は、本地区では、この時期に至って確実におさえられるのである。しかし残念なことに、これがいつの頃のことか判然としない。また湿気抜き（3－A、3－A特設トレンチ1検出）もこの整地部分の下の層に存在するものであるが、先に述べたように、11－B・12－Aトレンチとでは、微高地をはさむので、それがこの整地に伴うものであるとは断定できない。しかるにこの整地に伴う水田開発が現在の土地景観の直接の前身になることは、畔が現在まで造りかえられながらも継続していること（第3・6図）で明らかである。

以上、本調査で明らかになったこと、問題点を旧地形と絡み合せて述べてきたのであるが、ここで提示した問題は、今後の調査などでその正否が次第に明らかにされていくことと考える。（中西常雄）

注記

(1) M－2は、11－B特設トレンチで検出されたものであり、図2には、本遺構の断面が見えないが、第Ⅷ層灰黒色砂層南（左側）への延長線上に存在する。14－B・15－Aトレンチの地山面を基準として考えるとマイナス10cmのところにM－2があることになる。琵琶湖側への土地傾斜を考えるとこの低さは問題にならないし、第Ⅷ層と第Ⅸ層の上面をつなぐ線を地山と考えても、挿図1は、M－2がM－1とともに微高地の南端に形成されているものとして理解し得る。

6　結びにかえて

調査の目的は大きく三つに分けられ、1は下寺観音堂の寺域南端の確認であり、2は寺域地割と条里遺構との関係であり、3は片岡弥生遺跡の確認であった。

幸運にも、われわれの当初の目的は幾分なりとも満す事が出来た。しかし、それだけ疑問点も大きくふかまり、あらたな問題が生れることになった。

確認出来た事項を箇条書きとして結びにかえたい。

1．寺域の南端を確認しえた。それは、現条里景観とかなり角度のずれをもち、N－84°－Eの方向に掘削された溝であり、寺院造営時に設けたものと考えられた。

2．現条里景観と一致する溝、畦畔が確認されたが、調査地点では奈良時代に遡る可能性は薄く、平安時代前中期の後半の遺物の出土とみている。このあと一度整地され、再び畦畔のみが直上に掘削された。条里の方位はN－30°－Eであった。

3．河川、溝とともに多量の流れ入んだ弥生終末期土器群を層位的に検出することが出来た。

そして、この遺跡「弥生終末期土器群」を当遺跡にみられる如く、弥生式土器群本来の壺（収入れ）、甕（煮沸）の構成が一気にくずれる壺の皆無をもって『最古の土師器』とみなすことにした。

なお、器種構成を下表にまとめた。

表（11－Bトレンチ第Ⅳ層出土）

器種	壺	甕	高杯	器台	計
個数	2	32	10	6	50

（丸山竜平）

表1　片岡（観音堂）遺跡出土土器遺物表

11－Bトレンチ内出土土器

（Ⅳ層砂層）

1～土師質土器
201～須恵質土器
301～その他（施釉土器，黒色土器，陶磁器，土錘等）

器形	No	法量 単位(cm)	形態上の特徴	調整上の特徴	その他の特徴
甕A－a	1	口径(16.2)	頸部で屈曲して外方に伸びさらに真直ぐに立ち上がる口縁部を有するもので，端部でさらに外上方に軽くつままれるため，内傾する少し窪んだ端面を成す。頸部は厚いがそれより上は薄く伸ばされている。口縁部外面下部の稜は甘い。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なっているが，口縁部外面にはヨコナデの後右上がりの3個1単位の列点文を廻らせるが，列点文lol志が連らなる部分もある。肩部内面の調整法は不明であるが，外面はタテハケ目を施した上からヨコハケ目を施している。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1㎜内外の砂粒を多く含む。 (焼成) 良好 ※外面，口縁部～頸部にかけて煤が付着する。
甕A－a	2	口頸(14.5)	頸部から内面に軽く稜を成しつつ外方に伸び，さらに外面に稜を成してやや内弯気味に立ち上がり，端部で外上方に軽くつままれるため，やや内傾気味の端面を成し，先端部は丸く終わる。	口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を行ない，かつ外面はその後右上がりの2個1単位の列点文を廻らせ，これが2・3単位ずつまとまりをもって付されているようである。 頸部内面はヨコハケ目の後にヨコナデ調整を行ない，外面はヨコナデ調整を行なう。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好
甕A－a	3	口径(14.8)	全体に薄く仕上げられている。頸部は丸く屈曲し，内面に稜を成して外方に伸び，さらに直上方へ外面に特に稜は成さず丸く立ち上がり，端部で外やや上方に軽くつままれるため，内傾気味の端面を成す。	口頸部は内外面ともにヨコナデ調整を行ない，かつ口縁部外面にはその後右上がりの5個1単位の列点文が廻る。頸部外面にも列点文らしき痕跡が残るが単なるハケの跡かは不明。内面の頸部より下は，ヘラ削りか，指ナデによって調整し，器壁を薄く仕上げている。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好 ※口縁部外面に煤が付着する。
甕A－a	4	口径(14.0)	やや厚味のある頸部が丸く屈曲し，一旦外方に伸びた後内外からつままれて上方に立ち上がり，さらに端部で外方につままれるため，少し窪んだ上端面を成す。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面に2条のヘラ描き沈線を廻らせ，2個1対の棒状浮文を貼付し，その2ヶ所に刺突文を入れる。肩部外面に斜格子状に外面にヘラで沈線を入れる。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好 ※口頸部外面に煤が付着し，特に口縁部のそれは著しい
甕A－a	5	口径(14.8)	張りの無い肩部から頸部で丸く屈曲し，外方に伸びた口縁部は，さらにやや外傾	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，頸部外面やや肩部近く左上がり	(色調) 灰褐色 (胎土) 0.5～2㎜大の砂粒を含む。

			気味に立ち上がり，端部を外上方につまむため内傾し，やや窪む端面を成す。器壁は全体に薄い。	の荒い列点文状の痕跡が残るが，これはおそらく，ハケ目の痕跡と思われる。	(焼成) おおむね良好
甕 A － b	6	口径(15.6)	なだらかに屈曲する頸部から，外方に伸びた口縁部は，2段に稜を成して立ち上がり，さらに端部で外やや上方につまみ出されるために，窪んだ上端面を成し，先端部は外上方を向いて少し尖り気味である。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面下端部にやや右上がりの列点文が連らなって廻る。頸部より下，外面にはやや右傾斜のハケ目が残る。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
甕 A － b	7	口径(15.8)	頸部からやや上方になだらかに伸びた口縁部が，少し外傾して立ち上がり，さらに外方に端部をつまみ出すため，窪んだ上端面を成す。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，外面にヘラ描き沈線を1条廻らす。頸部内面に荒いヨコハケ目が残る。外面はヨコナデ調整を行ない，それより下はやや左上がりにハケで調整している。	(色調) 灰褐色 (胎土) 0.5～1㎜大の砂粒含む。 (焼成) 良好
甕 A － b	8	口径(16.5)	丸く屈曲する頸部から内面に軽い稜をもたせながら，外方に伸びる口縁部は，さらに上方に立ち上がり，端部で外上方につまみ出すために，少し窪んだ内傾する端面を成し，先端部は比較的丸く終わる。	口縁部内外面はヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面にヘラ描き沈線を2条施すが，必ずしも平行ではない。頸部内面には，右上がりのヨコハケ目の痕跡が残り，その後ヨコナデしていると思われる。外面はヨコナデ調整を行なう。肩部外面にはやや右上がりのハケ目調整痕を残している。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
甕 A － c	9	口径(14.2)	頸部が丸く屈曲し，外やや下方に外反する口縁部はさらに真上に立ち上がり，端部を外やや上方につまむために内傾する端面を成し，丸く厚味をもった先端部を有する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後口縁部外面下部に左上がりの3個1単位の列点文を廻らせる。頸部から肩部にかけて，外面に右上がりの3個1単位の列点文とそれと連続させてさらにその下に6個1単位の同傾斜の列点文を廻らせる。内面には指ナデをしたと思われ，指圧痕が残る。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 2～3㎜大の砂粒多く含む。 (焼成) 良好
甕 A － c	10	口径(15.2)	比較的締まりのない頸部から口縁部が外上方に外反し，外面に稜を成して真上に立ち上がり，端部を外上方につまむために内傾する端面を成し，先端部は丸く厚味を有する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なうが，外面のそれは細かいハケ状工具によるものである。外面下部にはその後，やや右上がりの7～8個1単位の列点文が密に廻らされる。頸部外面には，左上がりのハケ目の上からヨコナデ調整を行	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好

				ない。さらに棒の先で刺突したと思われる痕跡を残す。	
甕 A － c	11	口径(14.6)	比較的締まりのない頸部から外方に口縁部が外反し，さらに外傾気味に立ち上がり，端部を外方につまみ出すために，先端部は外方に突出するが厚味がある。口縁部と胴部との接合痕を頸部外面に残す。	口縁部内面はヨコナデ調整を行なう。外面はハケ状工具によるヨコナデ調整を行なう。頸部内面は指ナデを行なったと思われ外面には右下→左上のハケ目の痕跡が残り，上半部にはその後ヨコナデ調整を行なっている。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 2㎜内外の砂粒含む。 (焼成) 良好 ※外面には煤が付着する。
甕 A － d	12	口径(17.8)	外やや上方に伸びる口縁部はさらに低く立ち上がり，外方に軽くつままれるため，若干内傾気味の端面を成し，先端部がやや外方に突出気味である。	内外面ともにヨコナデ調整を行なっているが，外面上半部を特に強くヨコナデしているので，溝状を呈す。	(色調) 灰白色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を少し含む。 (焼成) ややボ十分
甕 A － d	13	口径(15.8)	頸部から外方に伸びた口縁部は，内外から強く押えられて立ち上がり，さらに外上方につまみ出されるため，内傾する端面を成し，先端部は少し尖る。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。頸部内面はヨコハケ目の調整後ヨコナデ調整を行ない，外面は左下→右上のハケ目調整の後，よこにヘラかハケで施文しているらしい。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好
甕 A	14	————	なだらかに締まる頸部から口縁部が外方に伸び，さらに立ち上がるが，端部を欠くので形態はわからない。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。口縁部外面下端にヘラ描沈線らしき溝が少し残る。 肩部内面は指でナデ上げており，外面は右下→左上の荒いハケで調整した後，ヘラでよこに2条の沈線を廻らす。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 0.5～1㎜大の砂粒を少し含むが良好。 (焼成) おおむね良好
甕 B	15	口径(14.0)	張りのない肩部から頸部で内面にはっきりした稜をもって締まり，外反する口縁部は端部を外下方につまむために外傾する端面を成す。口縁部と胴部との接合痕を内面の稜の下に残し，接合の際の押えのため，稜の上に窪みが出来る。胴部内面にも輪積み痕が残る。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行ない，口縁部端面には，内外からつまんだ際に出来たと思われる窪みが出来る。 肩部内面は指で左下→右上にナデ上げている。外面には右上がりの叩き目かハケ目かの痕跡が残る。	(色調) 淡褐色 (胎土) 2㎜内外の砂粒少し含む。 (焼成) やや不十分
甕 B	16	口径(12.6)	比較的締まりのない頸部から口縁部がゆるやかに伸び，端部で少し内弯気味を呈し，外傾する端面を有する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。 頸部内面ヨコナデ調整を行なう。外面は右下→左上にハケで調整している。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1㎜内外の砂粒少し含む。 (焼成) やや不十分
甕 B	17	口径(10.6) 最大腹径	ほぼ球形の体部を有する。ゆるやかに丸く屈曲した頸	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。口縁部外	(色調) 淡灰褐色(内面赤味を帯びる)

		（10.7）	部から外上方に口縁部が真直ぐに伸びて端部は丸く終わる。胴下半部は欠くが，おそらく小さな平底を有すると思われる。	面に接合痕残り，それを指で押えた痕跡が残る。頸部より下の体部内面は左下→右上に指でナデ上げている。外面にはやや左上がりの叩き目（4条/cm）を施し，最大腹径よりやや下の箇所に指圧痕が残る。	（胎土）1～3㎜大の砂粒含む。 （焼成）やや不十分
甕	C	18	口径(12.2)	頸部内面に稜をもたせて外方に屈折し，器体の厚みを増し，口縁部外面に稜を成してやや外上方に立ち上がり，内傾する端面の先端部は丸く終わっている。肩部以下は欠くが頸部より下が急激に薄く仕上げられている。	口縁部内面はヨコナデ調整を行なう。外面は擬凹線とまでは沈線の不ぞろいさや浅さから言えないが，腰の強いハケ状工具によってヨコナデしている。頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なうが，内面に指圧痕が残る。それより下をヨコにヘラ削りして器壁を薄く仕上げている。	（色調）赤味を帯びた灰褐色 （胎土）1～2㎜大の砂粒を含む。 （焼成）やや不十分 ※　全外面に煤が付着している。
甕	D	19	口径(20.0)	肩は張らず，胴部最大径あたりからほぼまっすぐに頸部に至り，内面に稜を成して屈折し外上方に伸びるが，口縁部外面を一旦肥厚させ，稜をつくって再び内外から強くひきしめ，端部によくらみをもたせ，外傾する端面を成して終わる。	口縁部内外面はヨコナデ調整を行なっている。外面は板状工具でよこになでた後，ヨコナデ調整を行なっていると思われる。 頸部内面はヨコナデ調整を行ない，稜より下は左下→右上にヘラ削りを施して器壁を薄く仕上げている。 外面頸部以下は荒いハケで下→上に調整しUターンして上→下へ調整した後，頸部にはヘラかハケでよこにひっかいた痕跡を残す。	（色調）淡褐色 （胎土）2～3㎜大の砂粒含むも良好。 （焼成）良好
甕底部		20	底部径（4.7）	安定した平底である。胴部からなだらかに底部へ移行する。	内外面ともに指圧痕を残す以外に調整痕残らず。	（色調）淡赤褐色 （胎土）2～3㎜大の砂粒を含む。 （焼成）不十分
甕底部		21	底部径(5.0)	やや不安定な平底を呈し，底部下面中央が窪む。胴部から底部への移行は少し屈曲をもつ。	内外面ともに指圧痕を残す以外に調整痕残らず。底部下面中央部の窪みには底部をひきしめた際のしわがたてに走る。	（色調）淡灰褐色 （胎土）2㎜大の砂粒少し含む。 （焼成）やや不十分
甕底部		22	底部径(3.4)	小さな平底を呈し，張ると思われる胴部から底部へほぼ直線的に移行する	内面指圧痕のほかにヘラで調整した痕跡あり。外面には指圧痕のほかには調整痕は残っていない。	（色調）暗灰褐色 （胎土）2㎜大の砂粒を含む。 （焼成）やや不十分
甕底部		23	底部径(3.8)	胴部から底部にかけての移行部は外から圧されて屈曲し，底部は少し外開き気味に終わる。 底部下面の上げ底は深い。	内外面ともに指ナデもしくは指圧による成形時の痕跡をとどめるのみ。	（色調）淡褐色 （胎土）1～2㎜大の砂粒含む （焼成）やや不十分 ※　外面屈曲部以上には煤が付着する。

壺口縁	24	口径(13.5)	口縁部のみの残存でしかなく，比較的強く外反し，端部は丸く終わり，端部に近いほど厚味は減少する。	内面の調整法は全く不明である。 外面はヨコナデ調整を行なう。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1～3㎜大の砂粒含む。 (焼成) 不十分
壺口縁	25	口径(11.4)	外上方に伸びる口縁が，内面に軽い稜を成して外反度を強め，外傾する端面をつくって終る。	内面は調整法はわからず，何かの圧痕が三日月状に残る。外面は，やや左傾斜にハケで調整した後，端部をヨコナデ調整し，さらに外端部に刻目圧痕を施す。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分
高杯口縁A	26	口径(22.3)	杯部上半のみの残存であるが，ほぼ均一な厚味を呈し，外上方に伸びて，端部付近で少し内弯する。外傾する端面を有する。	内外面ともに縦ヘラ研磨を施し，端面のみよこにヘラ研磨する。	(色調) 淡赤褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分
高杯口縁B	27	口径(27.4)	内弯する杯部が，外面に段を成してやや外反気味に外上方に伸び，端部を内外から指圧するため，先端部は内外に少し肥厚し，かつ窪んだ外傾する端面を成す。	内外面ともに縦ヘラ研磨を施すが，内面の杯上半部と下半部との接合部はよこにヘラ研磨する。 外面の端部付近及び段の部分はヘラ痕が消えているがヘラでよこにナデたのか，ヨコナデをしたのか不明である。	(色調) 明灰褐色 (胎土) 1㎜内外の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
高杯口縁B	28	口径(27.8)	杯部上半のみの残存で，被下はないが，外反して外上方に伸び，厚味も減少して先端部は丸く終わる。	内面の調整法は不明である。 外面は縦ヘラ研磨がかすかに残る。	(色調) 淡赤褐色 (胎土) 精良 (焼成) やや不十分
高杯口縁C	29	———	内弯して外上方に伸びる杯部が，外面に突帯状に段を成してさらに内弯度を強めるが，端部は欠く。	内面にうっすらとヨコハケ目が残り，おそらくハケ目調整の後ヨコナデ調整をしたと思われる。外面は突帯状の段（接合部）の上下をヨコナデし，その段に右上がりの刻目を入れる。その他の箇所の調整法は不明である。	(色調) 灰褐色 (胎土) 2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) やや不十分
高杯脚部	30	———	脚部上半のみの残存である。中空の脚部が円孔付近から外反度を強めて裾部に広がるようである。外から内へ3円孔を穿っている。	内面円孔より下は指でナデ下している。 外面，杯部との接合近付に櫛描の沈線が6条廻り，その下は細かい縦ヘラ研磨を施している。裾部への移行部分を指で押えた痕跡がある。	(色調) 灰褐色 (胎土) 精良 (焼成) やや不十分
高杯脚部	31	———	外方に伸びる杯部と，ほぼ直線的に外下方に伸びる中空の脚部を有する。 杯部はそのほとんどを欠き，脚部も円孔以下を欠く。外	内面には縦に絞り目が走り，指圧痕を残す。外面は細かい縦ヘラ研磨を施す。杯部と脚部との接合部をよこにヘラ研磨している。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 精良 (焼成) おおむね良好

			から内へ円孔を穿つが，数量大きさは不明である。		
高杯脚部	32	——	外やや上方に伸びる杯部は薄くつくられている。脚部はやや外下方にすんなり伸び，中空である。 穿孔の有無不明。	内外面ともに調整法は不明であるが，内面にうっすら指でナデ下したような痕跡を残す。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) 不十分
高杯脚部	33	——	やや外下方にすんなり伸びる脚部は円孔付近で少し外反度を強めているがその下を欠く。外から内へ3円孔を穿っている。	内面は縦に走る絞り目をよこにヘラで削っている。 (右→左)	(色調) 明灰褐色 (胎土) 0.5～1㎜大の砂粒を含む。 (焼成) 不十分
器台	34	口径(14.5)	内弯気味に外上方に伸びる受部が，端部で垂下し，外傾する端面を成す。垂下端部は丸く終わる。	内面の調整法は不明である。外面には指圧痕が廻るが，左上がりのハケ目が少し残っている。垂下部外面には，櫛描波状文を施しているが磨滅の為ほとんど消えている。さらに3個1単位の棒状浮文が貼付されているが両側の2つは痕跡を残すのみである。棒状浮文には刻み目が入る。垂下部内面はヨコナデされている。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
器台	35	口径(17.0)	外上方にほぼ真直ぐに伸びる受部が，端部で垂下し，上にも少し肥厚し，内弯気味の外端面を成す。垂下端部は丸く終わる。 全体に薄手である。	内外面ともに磨滅のため調整法は不明である。垂下部外面には3・4条の櫛描き波状文が施された後棒状浮文が貼付されるが，個数，間隔は不明である。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～3㎜ (焼成) やや不十分
器台	36	——	外上方にほぼ真直ぐ伸びる受部と，徐々に外反度を増しながら拡がる脚部との接合部内面には2段に稜を形成する。	受部内面は指ナデによる指圧痕を残す。外面は細かい縦ヘラ研磨を施し，接合部を指で押える。 脚部内面は縦に走る絞り目を指でなでて消している。下半に少しハケ目を残す。外面は細かい縦ヘラ研磨を施すが指圧による凹凸が著しい。 外から内へ3円孔をヘラ研磨の後に穿っている。	(色調) 赤味を帯びた淡灰褐色 (胎土) 良好 (焼成) ややや不十分
器台	37	——	外上方にほぼ真直ぐに伸びる受部と，やや外開きに伸びる脚部との接合部は稜をもたずに丸く屈曲する。	受部内面はヨコハケ目調整，外面は右下→左上のハケ目調整を行なっている。接合部内面は指ナデによる調整，外面は粘土を貼付して補強した後ヨコナデしている。 脚部は調整法は不明である。外から内へ3円孔を穿つ。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1㎜内外の砂粒を少し含む。 (焼成) やや不十分

（Ⅳ層粘土層）

甕 口 縁 A — d	38	口径(15.4)	薄手の肩部が比較的強く外反し，外面に稜を成して低く立ち上がり，外上方につまむために内傾する端面を有する。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なうが，頸部内面にはうっすらとよこにハケ目が残る。口縁部外面には調整の後にやや左傾きに2単1単位の列点文を施す。肩部内面は指でなで上げている。外面の調整は不明だがかすかにヘラか右上がりの4個1単位の列点文が施されている。ハケ目の痕跡が残る。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1㎜内外の砂粒含む。 (焼成) 良好
甕口縁A	39	口径(15.8)	頸部内面に軽く稜を成して口縁部が外やや上方に伸び，さらに上方に低く立ち上がり，端部を外方につまむために，わずかに内傾する窪んだ端面を成す。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。 肩部内面は指でナデ上げている。外面は右下→左上にハケで調整した後，2段に5～7個1単位の右上がりの列点文を施している。	(色調) 灰褐色(外面暗い) (胎土) 1㎜内外の砂粒含む。 (焼成) 良好，一部口縁端部こげる
甕口縁C	40	口径(12.3)	あまり張らない胴部が頸部で内面に稜を残して外反するが，さらに上方に立ち上がり，そのまま端部は丸く終わる。外面の稜は甘い。小形のもので用途は不明。	口頸部内外面ともにおそらくヨコナデ調整を行なったものと思われる。 肩部内面には指圧痕が残る。外面の調整は全くわからない。	(色調) 赤褐色 (胎土) 1～3㎜大の砂粒含む。 (焼成) 不十分
甕口縁C	41	口径(10.0)	張りのない胴部を有する小形の甕で，頸部で屈曲して外反し，外面を肥厚気味にやや外上方に立ち上がる口縁部の端部は丸く終わる。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。 肩部以下には内外面ともに指圧痕以外調整法は不明である。	(色調) 赤褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) 不十分

（Ⅳ　層）

甕 口 縁 A — d	42	口径(17.6)	頸部から外上方に伸びる口縁部はやや厚味を増し外面に稜を成さずに立ち上がり，端部を外上方につまむため内傾する端面を成す。	内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面に右上がりの3個1単位の列点文を施している。	(色調) 灰白色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好
甕 口 縁 A — d	43	口径(17.0)	外反する薄手の口縁部は外面に稜を成さずに低く立ち上がり，端部を外上方につまむために，やや内傾する端面を成す。	内外面ともにヨコナデ調整を施しているが，特に外面のそれは強い。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
甕 口 縁 A — c	44	口径(13.9)	丸く屈曲する頸部が外方に伸び，外面に軽い稜を成して，外上方に立ち上がり，さらに端部を外方へつまみ出すために，内傾し，窪んだ端面を形成し，先端部は	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，外面下部にヘラ描きの沈線をめぐらすようだが，さだかでない。頸部内面には左下→右上へのハケ目を少し残し	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1㎜内外の砂粒を含む。 (焼成) やや不十分

			丸く終わる。	ている。外面とも縦及び左上がりのヨコハケ目痕が若干残る。	
高　杯	45	口径(16.0)	外上方に伸びる杯部は，外面に稜をもってやや外反気味にさらに伸び，端部は丸く終わる。稜より下の部分を欠く。	内面の調整法は全く不明である。外面は左上がりのハケ目調整の後，指ナデを行なっているらしく，特に端部は強くヨコナデする。稜の少し上に指圧痕がよこに並ぶ。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分
器　台	46	口径(17.4)	外反する受部の端部が垂下し外端面を成す。全体に厚手である。	内外面ともにヨコナデ調整を行なうようだ。垂下部外面にはヘラで沈線をめぐらして，円形浮文を貼付し，さらにそれに竹管文を付す。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒多く含む。 (焼成) 不十分
器　台	47	口径(16.3)	受部と脚部との接合部内面に稜を成して外上方にやや外反気味に伸び，端部は外傾する面を成す。	内外面ともに調整法は不明である。	(色調) 明灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分 ※　内面は朱味を呈す

(Ⅳ　層)

甕 A－c	48	口径(13.6)	最大頸径付近から内上方になだらかに縮まり，頸部で丸く屈曲して外反し，口縁部外面にわずかに稜をもたせて真直ぐに立ち上がり，端部を外につまみ出すというよりは折り返している。先端部は丸い。全体に薄手に仕上げられている。	口頸部内外面はヨコナデ調整を行なうが，口縁部外面のそれは腰の強いハケ状工具でヨコナデしている。肩部以下内面は左下→右上に指でナデ上げている，外面は右下→左下にハケで調整した後，よこに数条ずつの単位で櫛状工具で沈線をめぐらせる。頸部外面には指で押えた痕を残す。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) やや不十分 (焼成) 0.5～2㎜大の砂粒含む。 ※　口縁下部から頸部上面にかけて煤が付着する。
甕　B	49	口径(18.2)	頸部の内面に明瞭に稜を成して外反する口縁部は端部近くでさらに外反度を強め，先端部は丸く終わる。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。頸部より下，やや左上がりのハケ目調整の後よこに指ナデしている。外面，右上がりの荒い叩き目(2条／cm) を施している。	(色調) 灰褐色 (外面赤味帯びる) (胎土) 1～3㎜大の砂粒を含む。 (焼成) やや不十分
高　杯	50	口径(23.5)	内弯気味に外上方に伸びる杯部は，外面に強い稜を残して外反し，そのまま外上方に伸びて端部は外傾する丸味を帯びた端面を成す。	甚しく内外面とも調整法は不明である。	(色調) 淡赤褐色 (胎土) 精良 (焼成) 不十分

(Ⅳ層上面)

器　台	51	口径(18.7)	脚部との接合部内面に稜を成して外上方にほぼ真線的	内外面ともに細かい縦ヘラ研磨を施しているが，	(色調) 灰褐色 (胎土) 精緻

			に伸びる受部は端部で垂下し，やや外傾する外端面を形成し，断面は三角形を呈する。端部内側は少し窪む。	接合部には内外から指で押えた痕跡を残す。 垂下端面には4本の凹線文が廻り，2個1対の棒状浮文が貼付される。垂下部内面はヘラでよこに研磨している。	(色調) 灰褐色 (胎土) 精緻 (焼成) 不十分 ※ 口縁端部上面に一部黒斑あり。
器　台	52	口径(15.4)	ほぼ真直ぐに外上方に伸びる受部は端部で垂下し，丸味のある外端面を成し，断面は三角形を呈する。	内外面ともに細かい縦ヘラ研磨を施す。端部付近は研磨の痕跡が消えているので後でヨコナデしているかも知れない。 垂下部外端面はヨコナデ調整を行なった後，3個1対の棒状浮文を貼付し，その上3ヶ所に刻み目を入れる。内端面はヨコナデ調整を行なっている。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 0.5~1mmの大の砂粒を含むも精良 (焼成) 良好
器　台	53	口径(16.8)	厚手の受部が外反して外上方に開き，端部で上下に肥厚してやや丸味を帯びた外端面を成す。	内面は調整法不明であるが，外面は左上がりにハケで調整した後ヨコナデ調整を行なう。外端面の調整法は不明であるが，竹管文が付されている。端部内側はヨコナデを行なう。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1~2mm大の砂粒少し含む。 (焼成) 不十分

(Ⅲ　層)

突口縁A－a	54	口径(13.6)	頸部で外方に屈折して伸びる口縁部は，さらにやや内弯気味に立ち上がり，端部を外上方につまみ上げるため内傾し窪む端面を成す。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，外面中央部と下端部に各々10個1単位，2個1単位の右上がりの列点文を施す。 頸部以下内面は右上がりに指でナデ上げている。頸部外面はヨコナデ調整を行なっている。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1~2mm大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好
突口縁A－a	55	口径(15.2)	頸部で屈曲して外方に伸びた口縁部はさらに内弯気味に立ち上がり，さらにひねるように外方につまむために先端部は外方に少し尖り，丸味を帯びた内傾する端面を成す。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面に右上がりに4個1単位の列点文を施す。 肩部内面は指ナデを行なっている。外面は左上がりにハケ調整を行なった上から右上がりの7個1単位の列点文を施している。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1mm大の砂粒多く含む。 (焼成) 良好
突口縁A－b	56	口径(12.8)	頸部から外方に伸びる口縁部は外面にほぼ垂直に稜を成して立ち上がり，さらに端部で外やや上方につまみ	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面に2~3条のヘラ描き沈線を廻らせる。	(色調) 灰褐色 (胎土) 0.5~1mm大の砂粒を含む。 (焼成) 良好

			出すため，内傾する端面を有する。		
甕口縁A－b	57	口径(14.4)	丸く屈曲する頸部から口縁部が外上方に外反し，一旦外面に稜を成して上方に外反気味に立ち上がり，さらに端部を外方につまみ出すため，少し窪んだ端面を成す。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，外面には3条のヘラ描き沈線を廻らせ，2個1対の貼付学文を行なう。	(色調)暗褐色（内面黒灰色) (胎土)1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) 不十分
甕口縁A－c	58	口径(17.2)	丸く屈曲する頸部から外やや上方に肥厚しつつ伸び，外面に軽く稜を成して立ち上がり，端部を外上方につまみ出すために内傾する端面を有するが，先端部は厚い。	口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，外面にヘラ描き沈線を2条廻らせる。 頸部内面は荒いヨコハケ調整の後ヨコナデを行ない，外面，左上がりのハケ目調整の後ヨコナデを行なう。 肩部以下内面，右上がりに指でナデ上げているが，その前段階としてのヘラ削り痕跡が伺える。外面はやや左上がりの荒いハケ調整の後，ヘラで斜格子状に施文する。	(色調)淡灰褐色 (胎土)1～2㎜大の砂粒を含む。 ※器体断面内部は黒色を呈し，それが外面にも口縁一部から肩部にかけて一部露出，黒斑状を呈する。
甕口縁A－b	59	口径(6.5)	丸く屈曲する頸部から外方に口縁部が伸び，外面に軽く稜を成して，やや外上方に立ち上がり，さらに端部を外方につまむために外傾する端面を有する。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。	(色調)灰白色 (胎土)1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好
甕口縁B	60	口径(18.6)	張りの少ない胴部が肩部にかけてゆるやかに縮まり，頸部で外反して，外上方に伸び，端部は外傾する少し窪んだ端面を有する。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。 肩部，内外面に対応する指おさえ痕を残す。 肩部より下内面右上がりに指でなで上げている。外面は指おさえの痕跡が横に廻る。	(色調)淡灰褐色 (胎土)精良（若干1～4㎜大の砂粒を含む) (焼成) 良好 ※ 肩部以下外面に煤付着 ※ 11－Aトレンチ内出土
無頸壺	61	口径(10.3)	張りのない胴部から内上方に伸びる口縁端部は外上方に少しつままれるため内傾する端面を成す。	口縁部内面に右上がりに指でなで上げた痕跡が残る。 外面はヨコナデ調整を行なっている。 口縁部より下，内面にはヘラで右上がりに削った痕跡と，指圧痕が残る。外面の調整法は不明である。	(色調)灰褐色 (胎土)1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分
高杯	62	―――	杯部と脚部との接合部付近から脚部上半のみの残存であるが，杯部は接合部から外上方に伸び，脚部は円孔付近からやや外開きの傾向	杯部内面は杯中央部のはがれたものと思われる。外面は細かい縦ヘラ研磨を行なっている。	(色調)淡灰褐色 (胎土)精良 (焼成) やや不十分

			を強めている		
小形器台	63	口径(8.3)	外上方に内寄しながら伸びる受部口縁部は端部を丸くおさめる。端部付近では厚味を減じている。	内外面ともに指圧痕以外に調整痕をとどめず。	(色調) 灰白色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分
小形器台	64		小形器台の受部と脚部との接合部以下上半部の残存と思われる。接合部は細くよく締まり，外下方へ脚部が開く。	内外面ともに指圧痕以外に調整痕をとどめず。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～4㎜大の砂粒を含む。 (焼成) 不十分
器台	65	口径(19.8)	器台口縁端部のみの残存であるが，内寄する受部の端部は垂下し，ややふくらむ外端面を成し，断面三角形を呈する。	受部端部内外面ヨコナデ調整を行なう。外端面には，板状工具による半行線文を施し，その上に棒状浮文を貼付したと思われる。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 良好 (焼成) やや不十分

(Ⅱ　層)

壺A－a	66	口径(16.6)	外方に外反する口縁部が外面に軽い稜を成して少し内寄気味に立ち上がり，端部をつまむために，内傾する端面を有する。	内外面ともにヨコナデ調整を行なっている。	(色調) 明灰褐色 (胎土) 0.1㎜～3㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分
壺A－a	67	口径(16.8)	外上方に外反する口縁部が，外面に軽い稜を成して真直ぐに立ち上がり，端部をつまむために，やや内傾気味の少し内外がふくらむ端面を有する。	内外面ともにヨコナデ調整を行なっている。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) 不十分
壺A－a	68	口径(16.3)	丸く屈曲する頸部から外方に伸びる口縁部が外面に稜を成して真直ぐに立ち上がり，端部を外方につまむためにほぼ水平の端面を有する。 頸部より下の器壁をうすく仕上げている。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面下端部に連点文を施す。肩部内面は指でナデ上げており，外面は右上がりの6･7個1単位の列点文を密に施す。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
壺A－b	69	口径(16.3)	丸く屈曲する頸部から外反する口縁部は，強い稜を成して上方に向きを変えて外反し，端部を外やや上方につまみ出すために，内傾する端面を有する。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面下半部に右上がりの4個1単位の列点文を施している。	(色調) 淡灰褐色(内面黒ずむ) (胎土) 0.5～1㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
壺A－d	70	口径(17.0)	張りのない胴部から肩部にかけてゆるやかに締まり，頸部で内面に軽い稜を成して外反し，さらに低く上方に立ち上がり，端部を外上方につまむために，内傾する端面を有する。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，頸部外面に右上がりに5～7個1対の列点文を施している。肩部以下内面はおそらく指ナデ，外面には左上がりの荒いハケ目を残している。	(色調) 灰褐色 (胎土) 0.1㎜大の微砂含む。 (焼成) 不十分

甕 A － d	71	――――	頸部から肩部にかけての破片である。頸部と肩部との接合部で外面が屈折する。肩部以下の器壁が薄い。	内面頸部あたりをよこにハケ調整しているが，肩部以下は指でナデている。しかし何ヶ所か石が動いており，その前にヘラか何かで削ったと思われる。 外面，よこハケの次に左上がりにハケで調整しておいて，頸部から肩部にかけて幾条かのハケ（櫛状工具）で右上から左下へかき下している。肩部には櫛描き連弧文をめぐらせている。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
甕 A － d	72	――――	頸部から肩部にかけての破片である。 すんなりと内上方に伸びた肩部が頸部で丸く屈曲する。	内面指ナデを行なう。 外面，右上がりのハケ調整の残頸部はヨコナデ調整を行なう。 肩部には4条の櫛描き連弧文をめぐらせ，その下に右上がりの6個1単位の列点文を廻らせる。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好
甕 A － d	73	――――	胴最大径より少し下付近から下半部のみの破片である。器壁は薄くつくられている。	内面指でなでている。 外面縦にハケで調整した後，胴最大径より少し下あたりに貼付突帯を廻らせ，その上をヘラ状工具でよこにナデる。突帯の上にはヘラ状工具による深く鋭い沈線が右上から左下に走る。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) 良好 ※全外面に煤が付着するが，突帯より上は少なくなっている。
甕 A － d	74	底部径 (3.1)	薄く仕上げられた平底の底部でわずかに上げ底を呈す。	内面やや左上がりに荒いハケ目でかき上げている。外面調整法はとんどわからないが，わずかに縦にハケ目あるいは細かいヘラ研磨痕が残る。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) やや不十分
	75	底部径 (6.9)	台付甕の脚部台と思われるが煤は付着しない。外下方にまっすぐ伸びる短かいもので，端部に向って厚味が減じ，先端部は丸く終わる。	内外面ともに指圧痕を残し，外面一部にうっすらとやや左に傾くハケ目痕を残す。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1～3㎜大の砂粒を含む。 (焼成) 不十分
壺	76	底部径 (3.4)	小さな上げ底気味の平底を呈する底部から胴最大径に向って大きく外方に胴が張る壺の底部のみの破片である。	内面左上がりにハケでかき上げて調整している。外面はたてに荒くヘラで研磨している。底部の縁の上のところに指圧痕がめぐる。	(色調) 淡赤褐色 内面は黒灰色を呈す (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分
高杯	77	口径 (21.0)	いわゆる「深くて大きい杯部を有する高杯」の杯部上半の破片と思われる。内弯気味に外上方に開く杯端部は外傾する端面を有する。	内外面ともにやや左傾きに細かい縦ヘラ研磨を行なっている。外端面はヨコヘラで研磨している。	(色調) 明灰褐色 (胎土) 0.5～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) 不十分

高　杯	78	———	ゆるやかに外反度を増して拡がる脚部で，脚中央あたりに外から内へ3円孔を穿っている。	内面縦に絞り目が走り，それを指ナデによって消そうとしている。外面は縦ヘラ研磨を行なっているが，杯部との接合部に指圧痕が廻り，一部右上がりのハケ目を残す。	(色調) 淡赤褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分
	79	———	ほぼまっすぐ外下方に伸びる脚部は，円孔の付近から外開きの度合いを強めている。円孔は一部を残すのみで，数，穿った方向は不明である。	内面若干縦に絞り目が残るだけで調整法不明である。外面上部に板状工具による半行線文がめぐり，その下に三日月型の小さな刺突文が不整いに施され，それ以下の調整法は不明である。	(色調) 赤味を帯びた灰褐色 (胎土) 精良 (焼成) 不十分
高　杯	80	———	杯部と脚部の接合部から円孔あたりまでほぼまっすぐに外下方伸びる中空の脚部上半の破片である。 外から内へ4円孔を穿っている。	内面は縦に絞り目が走り，指圧痕を残す。外面は接合部に指圧痕が残り，それより下に指ナデをしたらしき後が縦に走る。その後と後との間にわずかに細かい縦ヘラ研磨の痕跡が残る。	(色調) 淡褐色 (胎土) 精良 (焼成) 不十分

(I　層)

深　鉢	81	口径(15.7)	内弯する体部の口縁端部は内傾する端面を有するが，内外から押圧されるために端面に溝が走る。	口縁部の内外面はヨコナデ調整を行なうと思われるが，一部にヘラか何かによる痕跡をとどめる。体部下半内外面ともに指圧痕を残す。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 精良 (焼成) おおむね良好
皿	82	口径(14.6) 高さ(3.4)	扁平な底部から被を成さずに内弯して立ち上がる体部は，端部で一旦外反させられ最後に上方へつまみ上げられるので，内面には溝，外面には窪んだ端面を成し，先端部は丸く終わる。	内面はヨコナデ調整の後，体部には放射状，底部にはラセン状に暗文状ヘラ研磨を行なう。 外面はヨコナデ調整を行なう。	(色調) 赤味を帯びた灰褐色 (胎土) 精良 (焼成) おおむね良好
小形壺	83	口径 6.7 最大腹径 8.0 高さ 7.2	胴部最大径からほぼ真直ぐに内上方に伸び頸部でやや外上方に外反する口縁端部は丸く終わる。胴部と底部との境に甘い被が走り，不安定な弯曲した底部である。	口頸部内面に指圧痕を残す。体部内面はヨコに指ナデし，底部内面は中央から上へ指ナデしている。 外面は指圧痕を残すのみ。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1～3㎜大の砂粒少し含む。 (焼成) やや不十分

(7　層)

小形壺	84	— ———	胴部のみの破片であるが，頸部内面に稜が残る。胴部はやや扁平な形を呈し，下部に行くほど器壁は薄い。	内面稜の下のみヨコにヘラ削りし，それより下は指ナデによる調整。 外面頸部をヨコにヘラ削りしている。胴上半部に一部左上がりのハケ目を残す。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～3㎜大の砂粒含む。 (焼成) 不十分

高　杯	85	脚部径(16.7)	大きく開く高杯脚部下半のみの破片である。端部で強くヨコナデされて薄くなり，先端部は丸く終わる。	内面は左上がりの斜行ハケ目の上からヨコに荒いハケで調整しているらしい。外面には長い指圧痕が右上がりに残り，左上がりの荒いハケ目が一部に残る。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 良好 (焼成) やや不十分

(6　層)

皿	86	口径(9.6) 高さ(2.0)	底部と体部との境にわずかに稜を成して内湾して立ち上がる体部の端面は丸く終っている。	内面上半部はヨコハケ調整をし，それ以外は中央付近から右上がりにハケ調整をする。 外面はヨコにヘラ削りを行なっている。	(色調) 灰白色 (胎土) 2～3㎜大の砂粒含む。 (焼成) 良好
皿	87	口径(11.0)	底部を欠くがおそらく明瞭な底部は付かないと思われる。内湾して外上方に伸びる。体部は端部できらに外反し先端部は丸く終わる。	内外面ともにヨコナデ調整を行なっている。	(色調) 灰白色 (胎土) 2～5㎜大の砂粒を少し含む。 (焼成) 良好
杯　身	201	口径(11.2)	不安定な弯曲した底部から，稜を成さずに外上方に体部が立ち上がり，端部付近で少し外反して先端部は外上方に尖る。	底部はヘラ削りのみで，巻き上げ痕跡を残す。体部はヨコナデしている。 ロクロ回転は右（時計）まわりである。	(色調) 淡青灰色 (胎土) 2㎜内外の砂粒少し含む。 (焼成) 良好 ※11－B，12－A特設トレンチⅠ，M－5出土

12—A　トレンチM－3出土

埦	202	高台径(7.2)	ぶ厚い器体を呈する体部は高台から外上方に立ち上がる。高台は外下方に付き，内端部に溝が走る。	内外面ともにヨコナデ調整を行ない，ロクロ回転は右（時計）回わりである。	(色調) 淡褐色 (胎土) 良好 (焼成) 生焼けである。
甕　B	88	口径(17.2)	頸部内面に稜を成して「く」字状に屈折した口縁は内湾気味に外上方に伸び，端部を内面に肥厚させて，内端面を成し，先端部は丸く終わる。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なっている。肩部以下内面はヨコヘラ削りを行ない，外面はヨコナデ調整を行なう。	(色調) 灰褐色（口縁部外面に一部黒斑有り (胎土) 1㎜内の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好
甕　B	89	口径(14.0)	内弯気味に外上方に伸びる口縁端部は内面を肥厚させて内端面を成し，先端部は外上方に少し尖る。	内外面ともにヨコナデ調整を行なう。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒少し含む。 (焼成) やや不十分
器　台	90	(18.7)口径	内弯気味に外上方に伸びる受部は端部に至って内外に肥圧し，窪んだ外端面を成す。	端部内面はヨコナデ調整を行なう。外面は縦にヘラ研磨しているもよう。外端面はヨコナデ調整の後，2個1対の棒状浮文を貼付し押圧している。口縁下端に右上がりの4個1単位の列点文を密にめぐらせている。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分

12－Bトレンチ内出土

甕 A － a	91	口径(14.0)	頸部内面に甘い稜を残して，外反する口縁部は，さらに外面に2段に稜を成して真直ぐに立ち上がり，端部で外上方につままれるために内傾する端面を成す。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，口縁部外面下端部横の上にヨコ方向に5個単位の列点文をめぐらせている。 頸部外面に右上がりの列点文の痕跡を残す。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) 良好 ※口縁部外面に煤が付着する。 ※Ⅲ′層出土
甕 B	92	口径(17.4)	「く」字状に屈折する頸部から口縁部が外反気味に外上方に伸び，端部を外方へつまむために，外傾する端面を成す。	口頸部内面は，ヨコハケ調整の後，ヨコナデ調整を行なっている。外面はヨコナデ調整を行なう。 肩部以下内面はヘラ削りを行なっているが指ナデの痕跡のとどめる。外面は左上→右下へハケで調整している。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 0.5～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) 良好 ※全外面に煤が付着する。 ※Ⅲ′層出土
甕 B	93	口径(9.8)	張りのない胴部を有し，頸部の屈曲も少なく，口縁部は内湾気味に立ち上がり，端部は丸くおわる。	口頸部内外面はヨコナデ調整を行なうが，頸部内面には一部にヨコハケ目を残す。 肩部以下内面は，接合痕を消すように縦に指ナデし，外面は左上→右下にハケで調整している。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒を少し含む。 (焼成) 良好 ※全外面に煤が付着する。 ※Ⅲ′層出土
高 杯	94	口径(18.7)	外上方に伸びる杯部は，外面に甘い稜を成し，上半部で外反気味に外に開き，端部は薄くなって先端部で丸く終わる。脚部は残存しない。	杯部内面上半部はヨコハケ目の上からヨコナデ調整を行ない下底部は指でナデ廻わして調整する。 杯部外面上半部は縦ハケ目の上からヨコナデ調整を行なう。下半部は縦ハケ目の上からヘラで下→上へナデ上げる。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～3㎜大の砂粒を含む。 (焼成) 良好 ※Ⅲ′層内上
高 杯	95	口径(16.0)	外上方に伸びる杯部は，外面に稜を成し，上半部で外反気味に外に開き端部は丸く終わる。	杯部上半部内外面ともにヨコナデ調整を行なう。 下半部内面は指でナデ回して調整し，外面は縦に指でナデ上げる。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 精良（雲母含む） (焼成) 良好 ※Ⅲ′層出土
高 杯	96	脚部径(10.1)	背の低い脚部が裾部で急速に外に開き，端部で薄くなり，丸く終わる。	内面に絞り目が左上→右下に走る，外面は荒い縦ヘラ研磨を行なう。端部は内外面ともにヨコナデを行なうが，内面に一部細かい縦ハケ目を残す。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 0.5～2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) やや不十分 ※Ⅲ′層出土 ※脚端部～部黒斑を有す。
器 台	97	脚部径(14.0)	やや外反気味に外下方に開く脚部の端部は外傾する丸味を帯びた端面をなす。	内面左上→右下の斜行ハケ目の上からヨコナデ調整を行なう。 外面やや左傾きのハケ目の後，上部にはヨコハケ目，	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 精良 (焼成) 良好 ※Ⅲ′層出土 ※内面少しこげる。

				下端部はヨコナデ調整している。	
杯　蓋	203	口径(14.4)	稜は成さないがふくらみのある天井部を有し，口縁端部を下方につまみ出すために外傾する端面を成し，先端部は丸くおわる。 天井部には扁平な宝珠つまみが付される。	内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，内面口縁部だけさらに指ナデしている。ロクロ回転は右（時計）まわりである。	(色調) 黒灰色 (胎土) 2～4㎜大の砂粒含む。 (焼成) 良好 ※Ⅰ層出土

10—Bトレンチ内出土

器　台	98	口径(13.6)	ぶ厚い外反気味の受部が端部で垂下し，外傾する端面を成し，断面三角形を呈するが，下端部は丸く終わる。(壺口縁部の可能性もある。)	内外面ともにヨコナデ調整を行なう。 外端面には板状工具による平行線文が廻された後，貼付沈文がなされる。	(色調) 灰褐色 (胎土) 2㎜内外の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好 ※6層出土

13—Aトレンチ出土

高　杯	99	———	脚部上半部は外開きの度合が緩漫で下半部に至って急速に外方に伸びる。中実の高杯脚部である。	内面は絞り目が左上→右下に走り，指ナデにより調整している。外面は指ナデの痕跡が右上→左下に顕著に残るが，若干のハケ目も残している。	(色調) 明灰褐色 (胎土) 0.5～1㎜大の砂粒含む。 (焼成) 不十分 ※6－3層出土

11—B．12—A特設トレンチ1内出土

小形壺	100	最大頸径(8.0)	胴部はやや扁球形を呈し，最大径が少し中央上位にくる。底部は丸底である。頸部で内面に甘い稜を成して口縁がやや外反気味に伸びる。	内外面ともにヨコに指ナデ調整を行なっているが，頸部外面にヨコにヘラ研磨を行なっている。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好 ※　7層出土
高　杯	101	———	浮いつくりの高杯脚部である。脚部はスムーズに外下方に開き，裾部でやや外反度を強めている。	内面は上半部をヨコにヘラ削りし，下半部を縦に指ナデ調整している。外面は杯部との接合部を縦にヘラで削り上げ，下半部は下方に向ってヘラ研磨する。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 0.5～1㎜大の砂粒含むも良好 (焼成) 不十分 ※　7層出土
壺	301	口径(14.7)	内弯しながら外上方に伸びる体部は，口縁端部に至って少しふくらみ外上方に尖り気味に終わる。 内端部には溝が数条走る。	内面ヨコナデ調整の後，暗文状にヘラ研磨を行なっている。外面，端部をヨコナデしているが，それより下は指圧痕を残すのみで，調整法は不明である。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 0.5～1㎜大の砂粒少し含むも良好 (焼成) 良好 ※　5層出土 ※内面および外端部がいぶされている黒色土器である。

17—B．12—A特設トレンチ2内出土

壺	302	口径(15.1)	内弯して外上方に伸びる体部の口縁端部は丸く終わる。	内面右下→左上にハケで調整している。一部にヘラの	(色調) 灰褐色 (胎土) 精良

				痕跡をとどめる。外面端部はヨコナデ調整を行なうが，一部に縦及びヨコの荒いハケ目を残す。下半部には指圧痕が顕り，一部に細かいハケ目が残る。	(焼成) やや不十分 ※　7層出土 ※内面いぶされる黒色土器である。
杯　蓋	204	口径(13.6)	天井部中央を欠くが，やや扁平な天井部がゆるやかに伸び，端部で外方へ開いて，さらに下方につまむため端面を成す。	内外面ともにヨコナデ調整を行なう。ロクロ回転は右まわりであるが，外面はさらに左まわりにナデている。	(色調) 淡黒灰色 (胎土) 精良 (焼成) 良好 ※　7層出土
杯　身	205	口径(12.8)	やや丸味を帯びた扁平な底部が，甘い稜を成して内弯気味に体部が立ち上がり，端部は丸く終わる。	内外面ともにヨコナデ調整を行なうが，底部外面はヘラ切りを行なった後，指でナデている。巻き上げ痕が底部に残る。 ロクロ回転は右まわりである。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～3㎜大の砂粒含む。 (焼成) 生焼けである。 ※　7層出土 ※底部外面に煤付着
杯　身	206	————	弯曲した丸味のある杯底部で，体部への移行部は甘い稜を成す。	体部は内外面ともにヨコナデ調整を行なうが，底部外面はヘラ切りの後軽くナデた程度で済ませている。	(色調) 淡灰色 (胎土) 2～3㎜大の砂粒少し含む。 (焼成) 良好 ※　7層出土 ※全外面及び体部内面に煤が付着する。

特設13トレンチ内出土

高　杯	102	————	ほぼ直線的に下やや外方に伸びる脚部が裾部で急に外反度を増して外方に開く。中空の高杯脚部である。	内面上半部はヨコにヘラ削りし，下半は指ナデをヨコに行なう。外面は荒い縦ヘラ研磨を行なっている。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好 ※最下層粘土ブロック出土

出土地，層位不明土器

甕 A － c	103	口径(15.4)	薄く仕上げている頸部から外方に伸びた口縁部は，外面に稜を成して立ち上がるが，すぐに外上方につまみ出されるため，端部は内傾して丸味をもつ端面を有する。先端部は丸く終わる。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なった後，外面に右傾きに2個1単位の列点文を密に廻らせる。 頸部内面はヨコハケ目の後ヨコナデ，外面はヨコナデ調整を行なっている。	(色調) 淡灰褐色 (胎上) 2㎜大の砂粒を含む。 (焼成) おおむね良好 ※12－A　トレンチ内
甕 A － a	104	口径(12.8)	丸く屈曲する頸部から外上方に伸びる口縁部は，外面に稜を成して垂直に立ち上がりそのまま端部は丸く終わる。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行なうが，内面のそれは指圧痕が顕著である。 頸部内面はヨコハケ目の上からヨコナデ，外面は左上→右下の細かいハケ目の上からヨコナデ調整を行なう。	(色調) 淡褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分 ※12－A　トレンチ内
甕　B	105	口径(14.0)	単純に外反する口縁端部は	口縁部内外面ともにヨコナ	(色調) 淡灰褐色

			わずかに垂下の傾向を見せ，丸い外端面を成す。	デ調整を行なう。 頸部内面には指圧痕を残している。	(胎土) 2～5㎜大の砂粒含む。 (焼成) ややボ十分 ※11－Aトレンチ　出土 ※外端部に煤が付着する。
甕	106	底部径 (4.8)	平底を呈する底部から体部が外上方に伸びる。	内外面ともに左上がりの細かいハケ目と指圧痕を残している。 底部下面は丁寧に指ナデしている。	(色調) 灰褐色 (胎土) 0.5～1㎜大の砂粒少し含む。 (焼成) ややボ十分
甕	107	底部径 (5.0)	わずかに上げ底気味の底部から，段を成して体部が外上方に伸びる。	内面右下→左上のハケ目と指圧痕を残し，底面はヨコハケ目を残す。 外面は指圧痕をとどめるのみである。底部下面を丁寧に指ナデしている。	(色調) 黒灰褐色 (胎土) 2～4㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分 ※外面に煤が付着する。
器台	108	口径 (18.8)	薄いつくりの受部が外上方に伸び，端部で垂下して，外端面を成す。	内面細かい縦ヘラ研磨を行なっている。外面板状工具で平行線文を巡らせ，その後さらにヨコナデ調整を行なっている。 垂下端部内面もヨコナデしているる。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1㎜内外の砂粒含む。 (焼成) ややボ十分 ※12－Aトレンチ出土
器台	109	口径 (20.0)	ほぼ直線文に外上方に伸びる受部は端部で外下方につまみ出され，外傾する端面を成す。	内外面ともに磨滅甚しく調整法は不明である。 外端面に竹管文を付す。	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好 ※12－Aトレンチ出土
高杯	110	―――	内弯する杯部とまっすぐに下方に伸びる脚部とを有する奇妙な形態を有する高杯と思われる。	杯部内面をヨコナデ調整している。外面はヨコにヘラ削りを行ない，接合部のみ上から下へ削っている。 脚部内面は縦に走る絞り目をヨコにヘラを削っている。 外面は縦ヘラ研磨を行なっている。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 1～3㎜大の砂粒含む。 (焼成) おおむね良好 ※13－Aトレンチ出土
高杯	111	脚部径 (10.6)	中空の脚部は一旦ふくらんだ後細まり，急速に裾部が外方へ開き，端部は丸く終わる。	脚部内面縦に走る絞り目をヘラか何かでヨコに消しているようだが不詳。 外面左上→右下の細かいハケ目の上から指ナデをしたらしく指圧痕が残る。 裾部，内面ヨコハケ目の後端部付近をヨコナデしている。外面左上→右下に細かいヨコハケ目を施し，端部をヨコナデ調整している。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 1㎜内の砂粒含むも精良 ※11－B，12－A特設トレンチ2出土
埦	112	高台径 (4.2)	丸い底部に断面三角形の高台が貼付されるが不十分なものである。	内面ハケ目の上から縦ヘラ研磨を行なう。外面高台貼付後のヨコナデが顕著であ	(色調) 灰褐色 (胎土) 良好 (焼成) 不十分

				る。	※11－Aトレンチ出土
皿	113	口径(8.8)	底部中央を欠くが，おそらく彎曲した不安定なものであろう。体部は内彎気味に外上方に伸び，端部を少し外方につまむため内傾する端面を成し，先端部は尖り気味に終わる。	内外面ともにヨコに指ナデ調整を行なっている。	(色調) 淡灰褐色 (胎土) 2㎜大の砂粒少し含むも良好 (焼成) おおむね良好 ※12－Aトレンチ出土

土　錘

土師質	303	長さ4.8 厚さ3.6 孔径1.4	長方形のものである。	外面に指圧痕顕著に残す。 (軸に平行)	(色調) 灰褐色 (胎土) 1～2㎜大の砂粒含む。 (焼成) やや不十分 ※14－B，15－A特設トレンチ2　M－1出土
土師質	304	長さ4.7 厚さ — 孔径1.4	中央がややふくらむものである。	外面をヘラで軸に平行にナデている。	(色調) 暗灰褐色 (胎土) 良好 (焼成) やや不十分 ※14－B，15－Aトレンチ出土
須恵質	305	長さ4.7 厚さ3.0 孔径1.2	中央がかなりふくらみ，長円形を呈す。	外面には指圧痕を残す。	(色調) 淡青灰色 (胎土) 良好 (焼成) 良好 ※　出土地不明

(注) 甕形土器の分類に関して

甕A類……近江地方独自の特徴を示す甕を一括して甕Aとし，その口縁形態の若干の差異により厳密な形態分類は未だ為されていないので不十分なものではあるが，さらにa，b，c，dと細分してみた。

A－a，近江地方の弥生V様式甕の特徴であるところの「受口」状口縁甕の名残りをより多く残していると思われほぼ真直ぐに立ち上がる口縁端部で少し外方に尖る程度である。

A－b，古式土師器の時期に湖東，湖南地区を中心に分布する甕形土器に口縁形態が近似している。(あるいはそのもの)

A－c，A－bとほとんど変わらないが，L縁端部が少し肥大する傾向をみせるもの。

A－d，口縁部が低く立ち上がるもので，A類の中でもa，b，c類とは少し趣きを異にする。

高杯は，大きく，東海，伊勢湾地方の影響を受けたものをA類，畿内弥生V様式から発達したもの(杯部上半部が外反する)をB類とし，C類は少し変わっている。　(石原道洋)

表2　片岡（観音堂）遺跡出土瓦観察表

平　瓦　　空欄は不明、不明瞭

瓦No.	規模 cm	厚 cm	※内面（布目数/cm）	※外面（叩目規模cm）（布目数/cm）	短辺	面取	長辺	面取	焼成・色調（質）	瓦系	叩板	備考
1	13×13	1.8	布目	格子目叩〈0.6×0.6〉					軟 赤味黄褐色	赤瓦系		
2	13×9	2.5	布目	格子目叩〈0.55×0.55〉刷毛目(10/cm)			篦削（左→右）	2	軟 赤味黄褐色	赤瓦系		
3	12×4	3.0	布目	格子目叩〈0.6×0.6〉			篦削（左→右）	2	軟 赤味黄褐色	赤瓦系		
5	5.5×5.5	2.0	布目	格子目叩〈0.6×0.6〉					軟 赤味黄褐色	赤瓦系		
15	6.0×5.5	2.1	布目	格子目叩〈0.4×0.4〉					軟 赤黄褐色	赤瓦系		
23	10×4	1.7	布目	格子目叩〈0.45×0.45〉			篦削（斜）		軟 赤黄色	赤瓦系		
24	12×7	2.0	布目	格子目叩痕跡					軟 赤黄色	赤瓦系		
25	7.5×6.5	2.1	布目	指調整＋格子目叩					わずかに硬 赤黄色	赤瓦系		
31	8×8	2.3	布目	格子目叩〈0.5×0.5〉			篦削(直)（右→左）	1	わずかに硬 赤橙色	赤瓦系		
32	10×8	2.3	布目	格子目叩	篦削(直)	1			わずかに硬 赤橙色	赤瓦系		
33	13×9	2.5	布目	格子目叩〈0.5×0.5〉			篦削(直)	1+2	硬 濃赤橙色	赤瓦系		
35	5×5	2.8	布目	格子目叩	篦削(直)		篦削(直)	1	やや硬 赤橙色	赤瓦系		
42	13×12	2.1	布目	格子目叩〈0.5×0.5〉	篦削(直)（左→右）	1			やや硬 赤灰色	赤瓦系		
44	14.5×12	2.8	布目	略斜格子目叩〈0.8×0.8〉			篦削（左→右）	3	やや硬 赤橙色	赤瓦系		
45	14.5×11	2.3	布目(10×10)	格子目叩〈0.9×0.6, 0.7×0.7〉			篦削	1	硬 橙灰色	赤瓦系?	叩板巾約6cm B類	
46	17×10	2.2	布目	格子目叩〈0.6×0.6〉	篦削（左→右）	1			やや硬 赤橙色	赤瓦系		
48	12.5×8.5	2.2	布目	略格子目叩〈0.8×0.8〉			篦削	3	やや軟 赤橙色	赤瓦系		
57	11×9	2.2	布目＋ナデ	格子目叩〈0.5×0.5〉	篦削（左→右）	1			硬 赤橙色	赤瓦系		
59	12×11	2.3	布目(11×10)	格子目叩〈0.6×0.6〉		1			硬 暗赤橙色	赤瓦系	叩板巾約6cm A類	
53	9×8	1.5	布目	長方形格子目叩〈1.0×0.6〉			篦削（左→右）	1	やや硬 暗灰橙色	赤瓦系?		
56	10.5×55	2.5	布目＋篦削	略長方形格子目叩〈0.8×0.6〉					やや硬 暗赤橙色	赤瓦系?		
18	11×9	2.2	布目	叩なし？	篦削	1			かなり硬	赤瓦		

										赤黄色	系		
4	4.5×3.3	2.7	布目	刷毛目						軟	赤瓦		
				(10/cm)＋ナデ						赤味黄褐	系		
6	8.5×4.0	2.5	布目	刷毛目						軟 赤茶色	赤瓦		
				＋指調整							系		
7	5.5×4.5	2.5								軟 赤茶色	赤瓦		
											系		
21	7×5.5	2.1	布目	格子目叩			篦削(斜)	1	やや硬				
				〈0.4×0.4〉					灰白色				
26	6×5	1.9	布目	格子目叩			篦削(直)	1	硬				
				(0.45×0.45)					黒味灰色				
34	8×5.5	1.8	布目	格子目叩					やや硬				
				〈0.6×0.6〉					灰褐色				
				＋指調整									
37	11×9	2.2	布目	格子目叩					かなり硬			叩板巾	
				(11×8)＋	〈0.5×0.5〉				灰白色			約4.5cm	
				糸切痕								斜へ4cm	
												ずらし	
												て叩く	
43	15.5×10	2.5	篦削	格子目叩	篦削(直)	1	篦削	3	硬				
			(右→左)＋	〈0.5×0.5〉	(右→左)		(左→右)		青灰黒色				
			刷毛目	＋ナデ調整									
46-1	18×15	1.7	布目	格子目叩			篦削	3	硬 黒灰色			叩板巾	
			(13×9)	〈0.6×0.6〉			(左→右)					約6cm	
												※A類	
47	12×7	2.6	布目	格子目叩		1	篦削	3	硬 青灰色			A 類	
			(14×11)	〈0.6×0.6〉			(左→右)						
				＋篦削									
49	10×8	2.1	布目＋篦削	格子目叩									
				〈0.6×0.6〉					やや硬				
									灰白色				
51	10×9.5	2.1	布目	格子目叩					やや軟				
				〈0.7×0.7〉					黒灰色				
				＋ナデ調整									
55	9.5×6	2.1	布目	格子目叩					やや硬				
				〈0.4×0.4〉					白灰色				
58	11.5×8.5	2.2	布目	格子目叩			篦削	2	やや硬				
				〈0.5×0.5〉			(左→右)		暗灰白色				
60	8×7	2.4	布目	格子目叩	篦削	1	篦削	2	やや硬				
				〈0.5×0.5〉			(左→右)		暗白灰色				
				＋調整									
61	13×8.5	2.3	布目	格子目叩					やや硬				
				〈0.5×0.5〉					黄灰色				
				＋調整									
65	14×11	2.5	布目＋篦削	格子目叩	篦削	1			硬				
			(右→左)＋	〈0.4×0.4〉	(右→左)				淡青灰色				
			糸切痕										
66	27×14.5	2.3	布目	格子目叩＋	篦削	1	篦削	3	硬				
			(6×9)	縄目叩？＋	(右→左)		(左→右)		灰白色				
				ヨコナデ調整									
67	10.5×9	1.5	布目	5角形・六角形	篦削	1	篦削	1	硬 青灰色			叩板巾	
			(11×10)	格子目叩＋調整	(左→右)		(右→左)					約4.5cm	

											B 類	
9	7×4.5	1.8		格子目叩〈0.6×0.6〉					軟 茶灰色			
27	12.5×10	2.1	布目	格子目叩〈0.5×0.5〉	篦削(直)	1	篦削(斜)	2	軟 赤灰色			
28	6×5.5	2.0	布目	ナデ調整+格子目叩〈0.5×0.5〉痕跡					軟 黒味赤灰色			
16	11×7	2.3	布目	格子目叩〈0.6×0.6〉					軟 赤味黄灰色			
64	10.5×7.5	2.3	布目	格子目叩〈0.6×0.6〉	篦削	1	篦削(左→右)	3	やや軟 暗黄灰色			
29	9×6	2.2	布目+ナデ?	格子目叩〈0.6×0.6〉			篦削(斜)	2	わずかに硬 黒味赤灰色			
30	8×5	1.8	布目	格子目叩〈1.2×0.8〉					わずかに硬 赤味黄灰色			
17	12.5×11.5	2.6	布目+篦削	指調整+格子目叩〈0.6×0.6〉痕跡	篦削	1	篦削	2	わずかに硬 赤味黄灰色			
13	11.5×7.5	2.5	布目+篦削	格子目叩〈0.4×0.4〉+指調整	篦削(左→右)	1	篦削(右→左)	2	やや硬 褐色帯黄灰色			
36	20×16	2.5	布目+布目はがし痕	縄目叩+タテ・ヨコナデ(による磨滅)	篦削(直)(左→右)	1	篦削(左→右)	3	硬 灰白色			
38	10×8	2.2	布目+糸切痕	縄目叩+タテナデ調整					やや硬 白橙色			
41	8×7	2.1	布目	縄目叩	篦削(左→右)	1			硬 青灰黒色			
54	10×7.5	1.7	布目	縄目叩					やや硬 白灰色			
68	9.5×9	1.5	布目(8×6)	縄目叩			篦削	2-3	やや硬 黒灰色			
11	7.5×3	1.9	布目	ナデ					かなり硬 灰白色			
40	15×8	2.5	布目+糸切痕	タテ・ヨコナデ調整					硬 黒灰色			
52	13×55	2.2	布目	ナデ調整	篦削(左→右)	1			硬 白灰色			
62	14×9	2.4	布目+糸切痕	ヨコナデ調整			篦削	2	硬 青灰色			
39	10.5×9	2.0	布目	原の弱い刷毛目?			篦削 上(左→右) 下	2	硬 赤灰黒色			焼けひずみ大
63	13×11	1.9	布目	調整			篦削(左→右)	1	やや軟 暗黄灰色			
50	12×11	2.1	布目	ナデ調整					やや軟 黒灰色			
12	11×10	2.5	布目なし	叩なし?					やや硬 灰白色			

10	6×4.5	2.5	布目なし	叩なし?					やや硬			
									灰白色			
14	5.5×5	2.0	布目	叩なし			篦削	1	やや硬			
									灰黄色			
20	9×6.5	1.7	布目+篦削	叩なし?					やや硬			
			(左→右)						灰白色			
22	11×9	1.8		叩なし?			篦削(疎)	1	やや硬			
									黒味灰色			
19	14×8	2.7							やや硬			
									灰黄色			
8	6×5	1.8							軟 茶灰色			

丸　瓦

1	10×8.5	2.0	布目	ナデ調整			篦削	2	やや硬			
			(10×10)						灰色			
2	8.5×7.5	1.7	布目	縁の弱いタテ	篦削	1			やや硬			
				刷毛目調整	(左→右)				灰色			
3	8×5.5	1.1	布目	ヨコナデ調整		1	篦削	1	やや硬			
			(7×8)				(左→右)		暗灰色			
4	7×5.5	1.5	布目		篦削	1	篦削	1	やや硬			
			(7×8)						灰白黄色			
5	9×9	1.9	布目				篦削?	1	軟			
									淡黄灰色			
6	6×5	1.5	布目	調整			篦削	1	硬 青灰色			
7	8.5×5.5	1.7	布目	タテ篦削	調整		篦削	1	軟			
			(7×10)	(巾約2cm)					淡黄灰白色			
				調整								
8	8×7	1.7	布目	調整	調整		篦削	1	軟 灰白色			
9	13×12	2.0	布目	刷毛目+タテ			篦削	2	軟			
				篦削(巾約4cm)			(右→左)		暗黄灰色			
10	8×5	1.6	布目	タテ刷毛目			篦削	1	軟			
				(荒い目で			(右→左)		暗黄灰色			
				カキ目状)								
11	6×5.5	1.6	布目	ナデ調整	篦削	2			やや硬			
					(左→右)				黒灰色			
12	7×6	1.3	布目+刷毛目	ナデ調整			篦削	3	硬 青灰色			
							(左→右)					
13	6×5	1.6	布目	タテナデ調整			篦削	1	やや軟			
							(左→右)		黄灰色			
14	7.5×7.5	1.2	布目	(ナデ調整)			篦削	2	やや軟			
									黄灰色			
15	13.5×6.3	1.4	布目	(タテナデ調整)			篦削	1	軟 青灰色			
16	13×8.5	1.7	布目	縄目+ナデ調整	篦削	1			軟			
									暗橙灰色			
17	10×8	1.3	布目	(ナデ調整)					軟			
									黄帯灰色			
18	16×8	1.6	(布目)	(ナデ調整)			篦削	1	軟			
									黄帯灰色			
19	5×5	1.5	布目	ナデ調整					やや硬			
									暗灰色			
20	11×5	1.5	布目	ナデ調整					やや硬			
									黄灰白色			

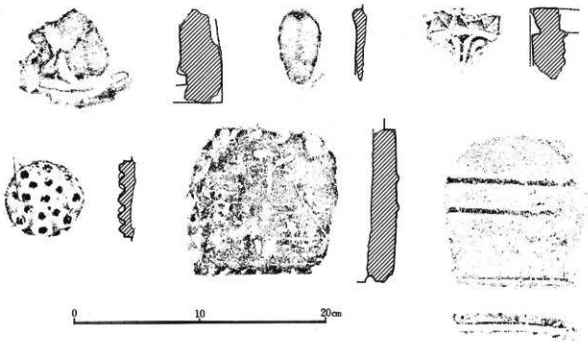
(丸山竜平)

表3　片岡（観音堂）遺跡出土木質遺物観察表

出土地点	種類	遺物No.	形態の特徴	備考	図版番号 図面番号
特設13	ハンドスコップ	1	全長32.4cm、柄長さ14.4cm、柄の太さ断面略方形を呈し約3cm×3cm、器体の先端から柄にとりつく立ち上り部までの、やや凹んだ平端部端まで12cmを測る。なお器体の幅は欠損して規模、形状とも不明。 先端に鈍い刃を有し、刳り残された立ち上りから同じ材で作られた棒状柄が斜め上方へ伸びている木製品。器体は長方形の容器を中央部で横に切断し、刃を設けた様な箱形を呈するか、容器状を呈さず扁平であったか欠損して不明である。用途から考え前者の形状をとっていたと想定する。	溝内 （褐色スクモ層内）	29 34
12—A	櫃底板	2	組合式木製容器の底板の残欠であり、長さ28.5cm、幅6.6cmを測るが、容器の規模を推し測ることは困難である。 底板の厚みは1.6cm程あり、残欠材の長側辺にそってL字形に側板を受ける切り込みが観察される。その幅0.5cm、深さ0.7cmである。なお一端がもえ焦げている。	7—2層中	29 34
	鉢	3	直径30cm、深さ10数cmと推定される鉢である。口縁上端は1.5cmの平端部をなしやや円弧を呈しながら下方底部へと傾斜する。器壁の厚みは1.3cm～1.0cm下方へ向う程薄くなる。器面は轆轤による成形とは思われず刀子状刃物のあたりが観察される。	7—3層中	29 34
12—A	槽	4	長さ10cm、幅15cmを残す槽（舟形容器）の残部である、残存部の槽の深さ1.8cmを測る。なお舟底となる縁線は長軸に沿って一直線とならず、中央部に至るにしたがい舟底の形も鈍角となって丸味を呈し、したがい縁線も不明瞭となりつつ他方へ寄っている。容器となる内部刳り抜きは、短辺が通有な矩形とならず、花弁のような鋭角となり、きわめて舟形に近い姿をとっていたことがうかがえる。しかし、外形は短辺幅の狭ばまる長方形を呈し舟形を示さなかった。この短辺から約4cmのところ長辺左右に直径3cm以上の半円形刳り込みが施されている。		29 34
12—B	栓	5	長さ約8cm、幅4.3cm、厚み2.8cmを測る木製品である。 短辺両端とも仕上げは未成形である。また、短辺のうち一方のみ、ここで厚みとした面を二面とも斜めに削り取り面取りを行なっている。 ほぞ穴形式の結合部のうちで、そう入部材に穿たれた穴にとめの栓（鼻栓）として用いられた部材であったと推定している。	砂層	29 34
12—B	楔	6	全長14cm、頭部の規模約2.4cm×2.8cm、先端部規模1.8cm×0.9cmを測る楔状の木製品であ	砂層	

			る。長辺四面とも、原材から割り取った器面を示すが、うち三面は中ばから先端部まで荒い成形の刃跡が残っている。		
11-B、12-A 特設試掘拡2	弧状木器	7	長さ46.4cm、径 1.6cm～ 1.0cmで弧状をなす木枝であるが先端部が欠損し、基部はV字形となって、二方から鎌で刻み込まれ切断されたことを物語っている。	7層	29 34
11-B、12-A 特設試掘拡3	弧状木器	8	長さ27.3cm、径2cm～ 1.7cm弧状をなす木枝であるが、先端は欠損し、基部は鎌で斜めに切断されている。が、ちようどこの部分の片方が欠損しているため、二方から刃物が入れられたか、片方から切断したものか定かではない。		29 34
	曲　物	9			29 34
12-A	格子枠状木器	12	長さ97.5cm巾16.5cmの板状木器で方形孔が三個所認められる。		35

(丸山竜平)



調査参加者一欄

丸山竜平、中西常雄、本田修平、勢田広行、石原道洋、奥野宗寛、中川通士、須崎雪博、岡本隆子、酒井和子、長瀬栄子、長瀬悦子、井上町子、西條茂子、醍醐万喜子、牛嶋茂、(遺物写真)

第３章　　野洲町下繰子遺跡

1、はじめに

構造改善事業による大規模なほ場整備事業が地域の土地に刻まれた長く重みのある歴史的景観そしてそこに住む人々の生活を変えつつある。耕地における地割の改変は、未だ多くの未解決な問題を数多く持つ条里制地割研究の位置より、研究史上におけるただならぬ事態であることを宣言しており、また、水利の構造的変化は、古代より現代にかけての、殊に近世、近代の水利をめぐる諸問題の研究への大いなる警鐘である。このような問題の研究上よりの指摘は、近年ようやく、考古学あるいは歴史地理学研究者の一部の人々より出されているが、近世史、近代史研究史上よりは問題が重大であることが十分意識化されているとは未だ受けとれず、また、全体としてこの問題が広く、各分野から検討されているとはみなしがたい。一方、この土地と水利の構造的な変化は、それと大きくかかわる再生産の構造及びその生産関係にも大きな変化を与え、更には、「近代化」あるいは「都市化」といわれる変化と関係しながら、それが本来的な意図であるか否かにかかわらず、地域社会の構造をも変えつつあるようである。ことに、京阪神のベッドタウンとして急速に変化しつつある湖南の地における野洲の変化は、多方面に急速に浸透しつつあるようである。

本報告は、右のような状況と問題意識の中でようやく具体化されてきた、滋賀県下でのほ場整備についての考古学的な取り組みの一端である。なお、小さい音ながら、地域の近世、近代史研究への警鐘として、また、地域の先祖と歴史にかかわる大地の下にある遺跡と、ほ場整備の中でのその取り扱いについてのむつかしさについて疑問詞の形で呈示としておきたい。

ところで、本下繰子遺跡の発見は、昭和49年の冬場のほ場整備施行中でのことであった。その時点で同年度ほ場整備計画における排水路敷90m余にわたり平面的確認を中心とした調査が行なわれた。その結果同年度計画地端にまで遺跡が広がることが明らかとなり、更に東方山手へ遺跡が広がることが明らかとなった。このため、この東側における昭和50年度のほ場整備計画施行前に事前に行なった確認調査が今回の調査である。

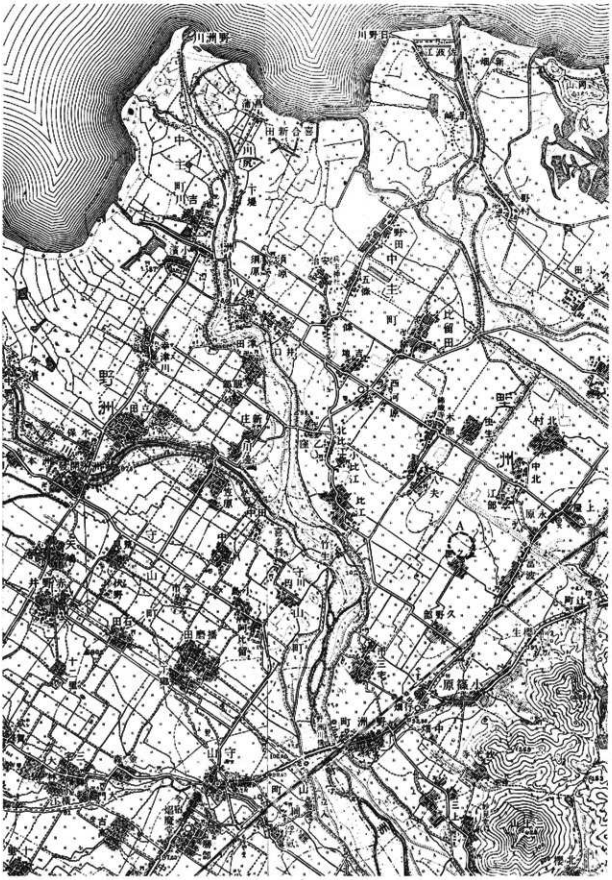
調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導の下に、野洲町教育委員会が行なった。調査経費等の運営については、財団法人滋賀県文化財保護協会が担当した。現地調査については、大谷大学考古学研究会の諸氏を調査補助員として迎え、地元区長他多数の人々の協力を得て行なった。

＜調査者の構成＞

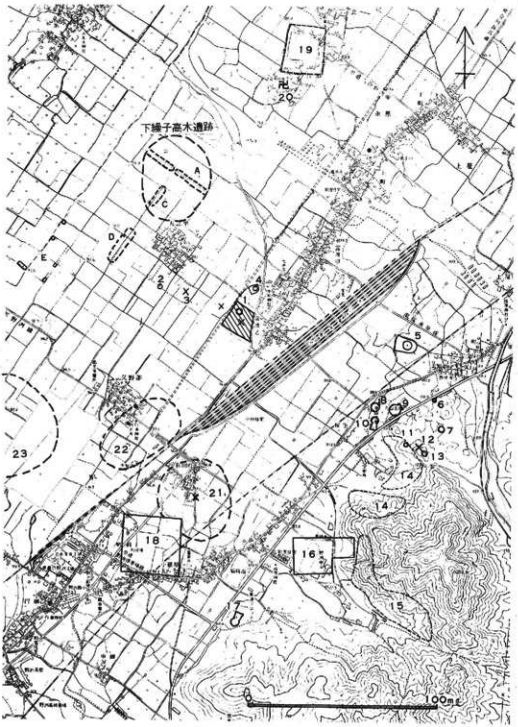
野洲町教育委員会　教育長　奥村章治
社会教育課長　藤原了義
同上　立入其之助
同係長　藤島節史
清水順一
（調査担当）　古川与志雄

大谷大学学生、木田修平、堀田宏司、成瀬法途、金丸結城、奥博美、市之瀬恭子、阿部由起子、藤懿彰了、横田美穂子、高木祐紀恵、井川英子、岡島かおる、渡辺弘子、臼井理恵、内橋昇、勢田広行、中川通士。

京都産業大学学生　木田哲、小沢徹
竜谷大学学生　白数秀樹
立命館大学学生　竹村一郎
滋賀大学学生　立入孝次、桑川藤太
近畿大学学生　井狩弘之
地元在住学生　竹内敏夫、野崎優、森田義則、築山和行、坂口建司、渡辺幸広、
高校生　岡田育男、田中俊子、田中清裕、堀和久、坂口増男、南井仁、岡田和夫、西川知男、



挿図1　野洲町宮波下繰子遺跡位置図



押図２　　下繰子付近遺跡分布図

1．古富波山古墳富波遺跡　2．五之里古墳　3．五之里遺跡　4．亀塚古墳
5．大塚山古墳　6．宮山二号墳　7．宮山一号墳　8．甲山古墳　9．円山古墳
10．茶臼山古墳　11．大岩山第二番山林古墳　12．大岩山銅鐸出土地　13．大岩山古墳
14．桜生古墳群　15．福林寺山古墳群　16．福林寺跡　17．越前塚古墳
18．野洲郡衙推定地　19．永原御殿跡　20．永原寺院跡　21．和田遺跡　22．円光寺前遺跡
23．市三宅東遺跡
A．下繰子遺跡昭和50年度調査地　B．下繰子遺跡昭和49年度調査地
C．高木遺跡昭和49年度調査地　D．五之里ヌ一地区昭和49年度調査地
E．中主町・野洲町久野部地区昭和49年度調査地

小西達也、諸頴昌彦

概報作成　成瀬、立入、白数、粂川、中川、勢田　　造物の写真撮影　牛島茂
協　力　富波甲区長　角健蔵、森三郎　富波乙区長　栗田竹治郎　五之里区長　川崎孫次ほか。

2、位　置

本調査地は、昭和49年度富波・五之里工区のほ場整備地の東側、幅 200m余（二町）の昭和50年度計画地であり、同計画の第14号支線排水路の部分を中心にした所、長さ200m余りの箇所である。昭和49年度東側の延長部を中心とした。丁度、野洲町大字富波乙字下繰子の北辺近くに相当する。調査地中央付近がやや高く、そこより西側昭和49年度調査地及び東側へわずかに傾斜する微高地の輪部である。（図版第2図、第3図参照）

3、地理的環境

はるか太古の水をたたえる琵琶湖。その東南の湖岸より広がる野洲地方の田園地帯の清新とした緑に包まれて我々の「下繰子遺跡」はある。この遺跡は、野洲川分流地点より東北東において日野川流域になだらかに下向している湿地にあり、五之里集落の北、約 200m、富波乙小字下繰子を中心とした古墳時代の集落跡である。

古来よりこの地域は野洲川と日野川の堆積によって形成された良質の水田経営に適した土壌を含み、水資源の容易な確保がもたらす〝穀倉地帯〟とも言うべき地域であった。

ちなみに、米作日本一の実積を持つ川崎権七翁はこの地、五之里の人であり、その成就の裏には氏の努力は言うまでもないが、このような穀倉地における農耕尊重の風潮や土壌等も幸したことであろう。

また琵琶湖の水利や他地方との交易に比較的に便利である交通の要所としても考察せられる。そして発掘遺物からも推察される水産物の捕獲などからでもこれらの生産力の確立がもたらす食糧の安定的な供給を基盤とした下繰子遺跡の歴史的意義は地理的環境から見ても非常に大きいと見なければならない。

その上、また、この古代集落のもと野洲の象徴とも言うべき三上山の典型的なコニーデ型の姿から古代における原始的、呪術的な信仰がもたらした意味をも想起せねばならないであろう。（金丸結城）

4、歴史的環境

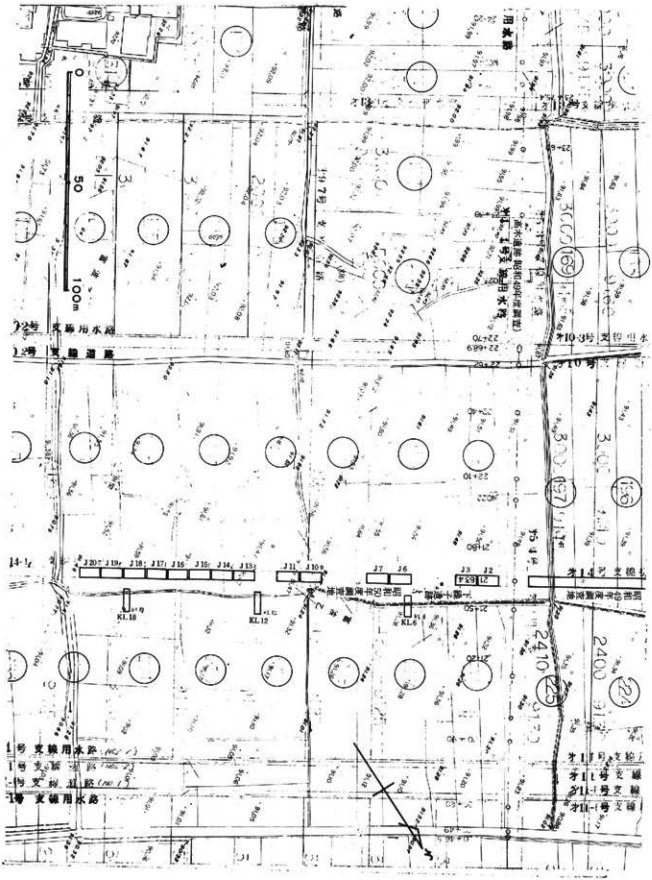
三上山の美しさだけでなく当地域は、古代から脈々と続く生活の重要な地域であり遺跡も数多く存在する。下繰子遺跡周辺の遺跡としてはまず24個の銅鐸を出土した大岩山遺跡をあげなければならないだろう。当地域に縄文時代の遺跡がないところから現在最古の遺跡と考えられる。銅鐸という遺物は、弥生時代に作られ、祭祀に使用されたらしくそれらを容した人々の生活の場が推察される。

古墳時代に入るとその遺跡の数も増し、小篠原を中心に大岩山古墳、円山古墳、甲山古墳等といったぐあいに形成され、後期には更に多くの古墳が各所にきずかれる。

この様に、この地域に古墳が多いのはこの地が安国造の本拠地であり、それとの関係からもとらえていかなければならないだろう。

次いで白鳳期に入ると福林寺遺跡がある。ここには石仏も数多く残っており、当時の状況がしのばれる。（その他図版第2図参照）

これらの遺跡のつみかさねが現在のこの地域を形成するのであり、どれ一つをとってみても重要なものである。（堀内宏司）



挿図3　下総子遺跡調査地地形図

5、調査の目的

昭和49年度調査地では、ほ場整備計画における排水路底の深さを最小限度に止め、遺跡の保存を計っている。このため、今回の調査においても、平面的確認を原則とし、遺跡の深さの確認、遺跡の東側への広がりの確認、できる限り遺跡の時期や性格の確認を行なうこと等を目的として行なった。

＜調査方法及び経過＞

調査は7月13日より開始し、まず第一に調査予定地周辺を10×10m単位に地割に足して割り付け、南よりA・B・C……西より1・2・3……の記号をもって地点名を示すこととし、予定水路敷をJ－□と呼ぶこととした。そこで、排水路予定地全長 200m余りに5m×10mのトレンチを設定し、そのトレンチ単位に確認をすることとした。このためトレンチ位置に杭を設けていくのであるが、当初より雨につきまとわれ、前途多難なることを物語ってくれた。トレンチは、J－2・3、J－6・7、次いでJ－10・11、J－14・15、J－18・19そしてJ－13~21という具合に設定し、層序に従って掘削、調整を行ない遺構の検出に務めた。遺物は大半が後述の黒色粘土層中に包含され、この黒色土の下面で、あるいはこの土の落込みとして遺構が検出されてきた。J－6t（tはトレンチの略）では、三個の竪穴住居跡が切り合いを見せながら出現し、また、J－14t、J－19・20tでは溝状の遺構が検出され、それらの広がり及び性格について検討をすることが必要となった。一方、排水路予定地の北側の旧の水路あるいは畦畔（条里制地割における坪境に相当する）を境としてかなり土地の段差があり、遺物の包含層や遺構の伸び及び遺存状況について検討を加えておく必要があるため、2.5×10mのKL－6・12・18tの各トレンチを設定した。

8月に入ると連日天候にめぐまれ、かえって太陽がうらめしくなるくらいの猛暑の中での作業であった。沼状遺溝や溝状遺構等より多数の遺物が出現するのは、ややこまり気味であった。ともかくも現地では、遺構の図を作成し、9月以降もその残務処理を継続した。

6、層　　序

本調査地の基本的な層位関係は、大まかにとらえれば、図版第4図の下縁子遺跡断面図の如く表層土、黒色の遺物包含層、そして青灰色あるいは黄灰色の無遺物層の三層の関係になっている。表層土は遺物包含層の上に堆積したもので場所により厚さも現実の層位ともに異なる。遺物包含層は、厚い所、薄い所、まったく存在しない所がある。しかし、かっては、無遺物層の上に広く堆積していたものが、後世の掘削あるいは耕作により掘り返されたことによりなくなったものと思われる。このためか、表層土には土師器・須恵器片から近現代に及ぶような陶・磁器片までが含まれる。

細かく見れば、図版第41図上段に示した地層図の例の如くであり、地表面より、Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は床土であり、黄褐色粘質土でやや砂質気味の$Ⅱ_1$・$Ⅱ_2$と黄灰色粘質土で同じく砂質気味の$Ⅱ_3$に微妙に分かれる。Ⅲ層灰褐色粘質土もやや砂質気味であり、床土の一部であると見なすこともできる。Ⅳ層は次の黒色粘土層へ至る漸移層のようなものであり、やや遺物を含むようである。J－2tの沼状遺構の上面より8C後半頃の高台付坏が出土しており、このⅣ層に相当するものと思われる。Ⅴ層は黒色で須恵器片を含まない上師器の出る遺物包含層である。Ⅵ層は青灰色あるいは黄灰色の有機物をあまり含まない沖積層である。以上の堆積は地点によりかなり異なることは図のとおりである。

7、検出遺構の概略

＜J－2・3ｔ＞　まず、J－2ｔよりJ－3ｔの西側にかけ、黒色粘土の落込みが確認される。巾は12m余に及ぶものと思われ深さについても1ｍをこえるものと思われる。底近くは常に水が湧出し十分確認が行なえなかった。この有機物の多く入った沼状遺構の上層よりは、多数の木製品、自然木と思われるもの、そして多数の土師器を出土する。殊に、J－2ｔよりは手ずくねのミニチュアの甕(11)や田下駄等が出土し、実に木製品の遺存状況が良好であることが注目される。また、梅の種子状のものもかなり出土するJ－3ｔ東側の沼の肩の深さ70cm斗りの部分には、大小のピット状あるいは土壙状の落込みが確認される。小面積であるため現状にては建物等としては復元できない。これらの遺構は、その上面の遺物包含層出土遺物とともに布留式土器並行期と思われる。

＜J－6・7ｔ＞　J－6ｔではわずかに遺物包含層を止めるが、J－7ｔにおいては存在せず、遺構面はJ－6ｔは沼の東30cm内外の位置に相当するが、一種の住居地域となっていたようである。本トレンチで明瞭に確認できる住居は、少なくとも二回に亙って建変えを行なったと思われる住居である。平面的に確認される切り合関係よりすれば、住居2→住居3→住居1の順であると思われる。共に、やや隅丸をなす方形の竪穴住居であり、住居1は一辺5.1m、住居2では一辺3.8m内外を測る。辺の方位は北に対し17°内外西へふれている。住居外辺沿い及び周辺には大小のピット状の落込みがあり、竪穴住居屋根より斜に下りてくる柱やその他住居に関係するものと思われる。

住居の東側には2条の溝状遺構を確認する。幅は20～40cmあるいはそれ以上と一定せず、溝状遺構2は二つに分かれJ－7ｔの角で丸くおわっており、溝とは言い難い。溝状遺構1はやや弯曲するがN45°E内外を示すと思われ、一方溝状遺構2はN8°E内外を指し、前者は後者に切り込まれており、更に両者とも住居3により切断されている。溝状遺構1・2は住居2と相前後する時期のものと思われる。

J－7ｔでは、純然たる黒色土の落込みがかなり検出されると共に、黒色土と無遺物層が入り交った落込みやⅡあるいはⅢ層の不整形な落込み等が確認されるがどのような遺構であるか判然としない。竪穴住居等が掘返し削られた可能性もあろう。

＜KL－6ｔ＞　トレンチの中央を東西に条里坪境に相当する溝及び畦畔が走り、それを境として段があり大きく変わる。南半部黒色の遺物包含層を削除すると、そのⅤ層あるいはⅤ層とⅥ層との交り合った落込みが検出される。包含層出土遺物は布留式土器並行期頃で、遺構についてもその頃と見なし得るであろう。北半部では西壁沿いに花崗岩の風化してバラバラになった山砂の堆積した砂溜りが在所し、東北側にはⅣ層状の落込みがあり、前者が後者を切断しているようである。性格については明らかではない。

＜J－10・11ｔ＞　Ⅲ～Ⅴ層は存在せず、平均35cm内外と浅い位置に遺構面が確認される。ピット状あるいは土壙状の落込みを確認することができる。直径30cm程のピットは明瞭で、柱穴である可能性も強い。J－10ｔでは溝で二分された形でⅤとⅥ層との混入する巾40～60cmの一辺4ｍ前後の方形周溝状の落込みとも見られるものも存在する。

＜KL-12ｔ＞　遺物包含層上面近くまで、一部Ⅵ層まで掘込んでいるが、十分遺構の検出は行なっていない。東壁にて後述の溝状遺構3の東側の肩を確認している。坪境の畦畔の部分を境にして左右はKL-6ほど差は認められない。溝状の黒色粘土の落込の続きは一部北東側に伸びる可能性がある。

＜J－13ｔ＞　包含層上面までしか掘削していない。

＜J-14ｔ＞ 地表面より50～70cmにて溝状遺構3、楕円形の落込み他ピット数個を確認する。溝状遺構3は、幅2.4m深さ30cm斗りであり、方位は凡そN17°Wを指す。溝底部近くには、砂利あるいは砂の堆積があり現実に水が流れた時期があったと思われる。溝肩は西岸がやや東岸に比して高くなっている。溝内よりは、多数の土師器・木製品等が出土している。土器の中には、ミニチュアの器台（器台 15）や精良な小型高坏（14）が存在し、ミニチュアの土器は先記、沼状遺構上層出土遺物と共に、水と関係するような遺構に伴うことは注目すべきであろう。一般に祭祀に関係するものと考えられるが、本例も水に関する祭祀に関係があるのではなかろうか。また、梅状の種子がかなり含まれている。なお、南壁ぞい溝の中央付近に径50cm斗りの柱穴状の黒色粘土層の落込みが認められる。更に、溝西岸には巾0.8m長さ1.0mばかりの袋状の出張りが存在する。

一方、北壁沿いに存在する楕円形の落込みは短径1.9mを測るもので長径の端部は更にふくれている。周辺のピットは25cm前後のもの6個存在する。

＜J-15ｔ＞ 一辺40cm斗りの方形あるいは円形に近いピットと15cm程のピットの二種類が存在する。前者は凡そN73°Eの方向を持って北側より3個・2個・2個づつ3列に並ぶものと思われ、両端の列が幅 3.5mで対応し、列内のピットの間隔は凡そ1.94m前後である。これを基準として掘立柱建物あるいは何らかの構造物が成立していたものと思われる。後者については判然としない。

＜J-16ｔ＞ 調査途中で遺物包含層にも至っていない。

＜J-17ｔ＞ 西南隅より北東方向に長く舌状に伸びるⅣ層の落込みが確認される。性格は明らかではない。

＜J-18ｔ＞ J-18・19ｔにかけては、J-10ｔの辺よりJ-14ｔの溝状遺構3に向けて下っていった遺構が、再度上昇する頂点で、遺構面もかなり掘削を受けているものと思われる。一辺40cm程のピット及び浅いL字の土壙状の落込みを検出する。

＜KL-18ｔ＞ 東西に走る坪境の畦畔を境に南北でやや異なる。南側では、後述溝状遺構4の延長部及び40×50mのピットが顕著に認められる。北半部には、不整形のⅣ層の落込みが認められる。溝状遺構は掘削されわずかにその痕跡を止めている。

＜J-19・20ｔ＞ 遺構面は西辺より1.3m付近で段をなして東に向って徐々に下降してゆき、J-20ｔの畦畔の位置で更に落ちる。J-19ｔの段の位置を両方に又ぎ、隅の丸い方形ピットが存在する。凡そ1.1×0.9mを測り、深さ0.2m前後をなす。中央付近を東西に土師器の小型丸底壺（3・4）及び高坏（5～9）が集中して出土する。どんぐりの実も一個出土している。殊に高坏が多いことは特徴的であろう。ピット底部近くは黒灰色状を呈しやや砂質気味であり、この面より上位に遺物は位置する。（図版45）

一方、J-19より20ｔにかけ、巾30cm前後で弧状をなす周溝状遺構及び巾1.0～1.6mを測りN19°Eを指す溝状遺構4が存在する。前者は、深さはわずかに数cmしか遺存せず、相当に削平を受けているものと思われるが、後者により切断されており、先行するものと思われる。周溝となるか否かは分明ではないが周るものであれば直径11.2m近くに及ぶものと思われる。径10～20cm前後のピットも存在する。J-20ｔの段以東は遺構自体も削平され、Ⅳ層以上が水田の耕土として使用されて来ったものと思われ、その水田の遺構が存在するものと思われる。

＜J-21ｔ＞ これは、J-20ｔの結果により顕著な遺構は予想されないと共に力量の制約により遺構面までの発掘は行なっていない。以上が不十分ではあるが、各トレンチの状況である。

＜小　　結＞

今回の調査は、その中が限定されているため、十分その性格を明らかとすることができない遺構も多いが、次のようなことが注目される。

1．古墳時代前半の集落址が一帯に存在すると考えられ、その住居群は、微高地に立地している。

2．集落内を流れる溝状遺構が検出されているが、現在の地割等とは方位が符合しない。溝状遺構3・4はかなり方角を近くし、一定の地割あるいは方向が定まっていたとも考え得るが、他の遺構とはあまり符合せず、むしろ地形の微妙な変化による所が大きいのではなかろうか。条里制地割については、古墳時代以降に成立したと見られる。

3．竪穴住居やピット等の遺構は微妙な切り合い関係にあり、古墳時代前半の一定時期に互り居住地として継続していたと思われる。ことに、昭和49年度調査地では、古墳代初期の庄内式土器並行期及び古墳時代中期（比較的吉手の須恵器を伴出する。）の遺物と住居址が確認されており、高木遺跡とも関係して、弥生末期あるいは、古墳時代初頭より古墳時代の中期にかけての間の集落として認められる。しかし、時期によりやや位置等に変化がある。

4．古墳時代以降については、若干の遺物の出土は認められるが、遺構自体は確認できず、後世の耕作により削除されたものかあるいは集落が移動して、この地には存在しなかった可能性も強くある。

5．田下駄の出土もあり、生産の中心には水稲耕作が考えられる。硬質であるためよく遺存したためか梅状の実も数多く出土し、同じような実が高木遺跡の大形円形ピットよりも出土しており注目される。

8、出土遺物

＜土器＞　その大半がV層遺物包含層あるいは遺構内より採集したものであり、その数はかなり多数に及ぶ。その内J－2・3ｔ沼状遺構、J－14ｔ溝状遺構3に伴う遺物および、J－19ｔ方形ピット内出土遺物を紹介する。別表及び図版47・48のとおり、古墳時代前半のいわゆる布留式土器並行期の単一に近いものである。なお、Ⅳ層以上の表層中にもそれ以降の遺物を含むが、大半は磨滅しており小さくなっている。（出土土器観察表及び実測図参照）

＜木　製　品＞

今回出土の木製品は、J－2・3ｔの沼状の遺構の上面及び一部掘込み部分より検出した遺物と、J－14ｔ溝状遺構の一部より検出したもの少数である。共に遺構の性格により、かなりの多数の自然木と思われる木片や小枝がその中心を占める。その内より加工痕が認められる木片について紹介しておきたいと思う。（図版46の写真番号に従って紹介する。）

1－1　断面三角形（あるいは菱形）に近い、柱状の加工木片である。一辺の角がかなり燃焼して炭化し、欠損するとともに、柱状の両端も完全に遺存しないが、現況の長さ39.5cm、断面の三角形の長辺9.0 cm以上、それに対する高さ4.2cmの厚さをなす。木片は、木目の中心に向って楔状に切り取っており、木目は縦方向に走る。木片の一端（下端　以下写真における上、下等を示すこととする）には、この木目に70°余りの角度をもって巾30㎝程の枘穴が穿たれ、それも木片の中心に穿たれているのではなく、やや一方（写真左側）に偏している。ほぞ穴の開折はノミ状の刃物によると思われる。

（出土地）J－2ｔ沼状遺構上面。

1－2　直径5.5cmの丸杭状の木片である。木片は小木をそのまま使用したものであり、現況の長さ19.5cmを測る。木片の一端（写真下端）は燃焼し、欠損するが、他の一端は、20°内外の角度を持って切断されている。切断の方法は鉈状の刃物で数回に亙って切り込むことによる。(出土地) J－2 t 沼状遺構上面。

1－3　断面が薄い半月状の棒材であり、巾1.5cm、高さ0.5cm、長さ14.6cmを測る。上端はわずかに斜に切断されており、一方下端は途中で折れているようであるが、端部弧側の面が面取りがなされている。木目は縦方向に走るが、小枝材を利用したものではない。(出土地) J－2 t 沼状遺構上面。

1－4　断面四角形で一方がやや太く、やや弯曲した千木のような木片である。写真上端は、巾2.5cm厚さ1.8cm、下端では巾3.7cm厚さ3.0cmをなし、徐々に太くなる。下先端は、裏より表へ、そして左より右へと共に55°～60°程度の角度を持って切断されている。木目は側面に縦方向に走る。(出土地) J－3 t 沼状遺構上面。

1－5　巾4.0cm厚さ1.7～0.9cm長さ44.5cmの板材である。木目は側面に縦方向に走り、表面は原木の外皮近くに相当していると思われる。表面の所々は黒く黒化した漆状のもので覆われている。あるいは木の外皮に相当するものか。（出土地) J－3 t 同前。

1－6　くさび形に近い板材である。巾4.5cm最大の厚さ2.0cm長さ38.5cmを測り、木目は左側面に縦方向に走り、裏面が原木の外皮近くに相当する。表面は、手斧ではつったように削られている。(出土地) J－3 t 同前。

1－7　巾2.8cm最大の高さ2.6cm長さ16cmのみ遺存する角材である。木目は、表面左より裏面右へ斜めに走る。左側面はきれいに削られ、表面も面取りが行なわれている。（出土地) J－3 t 同前。

1－8　両端のあまり尖らないレンズ状の断面を持つ板材である。巾3.6cm最大の厚さ1.2cm現状の長さ23.0cmを測り、木目は板材の表面及び裏面に縦方向に走り、一部木の節も平に仕上げ、また原木の中心は右の方である。木片の上端には巾1.1cmの枘が設けられているが先端は欠損し、表面はやや削り、枘の厚さを薄くしている。また、枘の位置も板材のやや左側に寄している。(出土地) J－3 t 同前。

1－9　巾3.0～3.5cm厚さ最大1.2cmの板材である。現状の長さ42.5cmを測り、上端より下端に向って徐々に薄くなる。上端は45°前後の角度をなし、やや丸味を持つ。下端もやや丸く切れている。あるいは楯の底板状のものである可能性もあるが、両端の傾むきは等しくない。木目は両側面を縦に走る。(出土地) J－3 t 沼状遺構埋土中。

1－10　巾2.2cm厚さ1.4cmの断面六角形に面取りをした棒材である。現状の長さ27.5cmを測り、上端は巾6cm程の枘が設けられた痕跡がある。木目は表面右上より裏面左下に向け斜のものが縦方向に走る。(出土地) J－3 t 沼状遺構上面。

1－11　田下駄後尾の断片である。上端が後尾に相当し角は斜に面が切り落されており、中心側の厚さ1.2cmに対し、側面の厚さは7.0cmにしか及ばない。鼻緒穴は巾1.3cmを測り、鑿状のもので穿たれている。木目は表面及び裏面に、縦方に細かく走っている。このため、縦方向に折れ易くなっている。遺存する木片

長さは17.5cm、巾4.7cmのみである。表面は裏面に比しかなり痛んでいる。(出土地) J－3 t 沼状遺構上面。

1－12 田下駄の一部である。現状の巾 4.5～6.7cm、厚さ13cm内外、長さは34.2cmを測る。下端はやや崩れているが、凡そ旧状に近いものと思われる。上端は、裏にむけてわずかに斜（鋭角）に切断され、また、表裏とも鋭利な刃物で切り込みあるいは殴打した痕跡あり、鼻緒穴は二個、長さ0.8cm程のものと長さ2.0cm、巾1.5cm程のものが存在し、鑿状工具により両面より穿っているが、刃先の巾1.0cm程のものである。木目は、前者と同じく、表裏両面に細く縦方向に走る。表面は裏面に比し破損が少ない。(出土地) 同前。

2－1～3 共に断面楔形の板材である。巾は10.5～9.5cm内外で、厚さ3.4cm程度である。どれも破片で旧の長さは明らかでないが、現存する長さは大きいもの（2－3）で35.5cmを測る。木目は、2－1・3では右側面に、2・2では左側面に縦方向に走る。片面の破損が大きいもの（2－1・2）も存在する。(出土地) J 3 t 沼状遺構埋土中。

2－4 巾9.3～10.5cmで一方がやや狭くなる厚さ0.7cmの板材である。上端は45°(左) と50°とやや角度を異にするが、角を4回程切り込み切り落している。上端も2回切り込んで切り落している。表面の所々にはかなりよく削ってややつやのある所があり、旧状はかなりなめらかな板材であったと思われる。木目は側面に縦方向に走り、縦方向には割れ易く、板の厚さも薄いため、横方向にもかなり弱い。(出土地) 同前（斜面近く）

2－5 長径3.0cm、短径2.6cmの断面楕円形の棒材である。現況の長さ18.8cmを測り、上端4.0cm斗りは、黒く焼けて炭化しており、かつ徐々に薄くなり、あまり鋭くはないが巾1.5cm程の刃をなして突んがる。木目は側面に縦方向に走りており、木の小枝を利用したものではない。(出土地) J－14 t 溝状遺構。

2－6 右辺38.5cm、左辺23.0cm巾18.5cmを測り、断面△形で最大の厚さ6.0cm余りと太い板材である。上端は70°下端は65°とやや扁した台形であり、下端は2.0cm程切り込み巾6.0cmほどの枘状に出張った付根付近を紐でしばったような痕跡を認めることができる。表面下半は削っており、上半は、横方向に切り込んでおり、かなり凹凸がある。一方裏面はかなりなめらかな面を持っていたと思われる。木目は左側面に縦方向に走る。(出土地) 同前。

＜小　　結＞

さて、以上の木製品は、共に沼状遺構及び溝状遺構より伴出する土器に示されるごとく古墳前期後半の時期のものと思われる。しかし、その用途の判明するものは1－11・12の田下駄を除いてほかになく、この地のこの頃の人々の生活の中における位置とその内容を知るにははなはだもの足りないものでしかない。けれども次のような点が注目される。

1. 木製品は、沼あるいは溝状落込みの黒化した有機物層の中で、腐敗することなくきわめて良好な状況で残っている。
2. 沼状遺構出土の木片のなかにはかなり燃焼して炭化したものが含まれ（前掲遺物の他にも多数ある）、かつ、I－1の如く建築用材の一部と思われるものの中にもそのようなものがあり、建築用材がそう安易に

たき火等の木になされないのであれば、付近の建物が火災に遭遇するような事態のあったことが察知される。

3．木の材質については十分検討を行なっていないので判然としないが、三種認められる。1－1・2・4～10の如く年輪の木目が明瞭である杉材のようなもの、1－3・11・12の如く極て細い年輪の木材、そして、2－1～6の如く、かし材のように年輪があまり顕著でない広葉樹のものの3種がある。第一番目の材材のようなものが多いが、共にかなり大きな原木を伐採して利用している。たとえば、Ⅰ－5にあっても、少なくとも直径25cm余に及ぶ原木を利用している。

4．鋸のような木工具の顕著な痕跡は認められないが鑿、手斧、斧あるいは鉈といった工具類の如き痕跡は認めることができる。

以上の外に自然遺物として梅の実あるいはどんぐりの実といったものの出土が知られる。

9、むすびにかえて

本調査により、去る昭和49年度発見し、調査が行なわれた所より、更に東側 200m足らずにわたり遺跡が広がることが明らかとなった。しかし、一方ほ場整備計画の実施に伴ない各所に遺物の出土を見た。図版第3図×印の位置がそうである。これにより下線子遺跡は、高木遺跡と一体として把へることが幅ましいと考えられ、凡そ東西・南北共に 300m余りに亙り広がっていると考えられる。しかし、今回の住宅地の如く一定の密度で均等に広がるものではない。以下昭和49年度の調査の一部を紹介しておきたい。

工事途中での緊急調査であるため、十分な調査体制もなくやむを得ず昭和49年11月7日より同年12月16日に亙り実施された調査である。調査地は、巾3m足らずで長さ90m斗りに亙り調査を行なっている。昭和49年度と50年度との調査地を境する幹線道路側より順に見れば、西へ20～40m程にかけ柱根や礎板等を止める柱穴及び掘立柱建物が多数検出されており、40～80mにかけては、10本足らずの溝状の遺構が存在し、微妙な時期差を持つ。更に、80～ 100mにかけて小型の竪穴住居状遺構や多数の柱穴状ピットを検出している。これらの遺跡の大半は、古手の須恵器を伴う溝状遺構や円形ピット等と、伴なわないものが存在するが、5C末あるいは6C初頭頃前後の時期と考えられる。また、更に 160m程度の所には、竪穴住居状の遺構が検出され、掘削上中より採集された遺物の中には、二重口縁でやや外反気味の立上り外面には6条の回線文を施す北陸系の影響があると考えられる壺の口縁、いわゆるS字状口縁をなし肩部に篦描き直線文を施し、口縁外面に弱い篦描き沈線を持つものもある甕口縁、あるいは叩き目を施しやや上げ底風の平底の甕底部等が出土しており、古墳時代初期のいわゆる庄内式土器並行期の遺物と見られる。遺跡（住居等と直接関すると思われる遺構）の広がりは凡そ、160～180m近くにまで広がっていると考えられる。遺跡西端近くに古墳時代前期初頭の住居が立地し、その東側には同前期後半より中期にかけての住居が広がっていることとなる。遺構面の標高は、きわめて徐々にではあるが西側に向って下向して行く。

以上集落についての資料としては、水路敷という限られた所のきわめて断片的な資料にすぎない。一方近時、24個にも及ぶ銅鐸を出土し、多数の古墳及び古墳群を容する野洲の平野部にも、ようやく各地で集落址の発見がなされるようになってきた。それには次のようなものがある。

1　**和田遺跡**　古墳時代後期を中心とする集落址と思われる。一部には弥生時代末の方形周溝状遺構が確認されている。字西今には壁沿いに竈を持つ竪穴住居他が発見されている。北方はかなり低湿化して行き水田跡となっていたものであろう。宅地造成及び道路建設に伴い発見された。

2　**円光寺前遺跡**　古墳時代前期より平安時代にまで及ぶような集落と思われる竪穴住居及び掘立柱建物がかなり検出されている。道路建設に伴う発見である。南側および北東側が低くなっている。

3　**市三宅東遺跡**　弥生後期の遺物を多数出土する。東側よりは古墳時代後期の遺物も出土している。

4　**下々堀遺跡**　弥生後期、古墳時代後期～奈良時代頃にかけての遺物が出土している。倉庫状掘立柱建物が確認されている。宅地造成に伴う発見である。

これらの遺跡は、「開発」に伴う発見であり、その絶対的数は少ないが、本来的には山麓部に比して平野部に遺跡は多く存在したはずであり、今後更に多くの発見がなされるものであろう。右の遺跡は共に周辺に比して微高地となっており、周辺のやや低くなる部分は水田として当初より利用されて来たものと思われる。しかし、少なくとも建物が建てられていた所は耕作が行なわれていたはずはなく、現在の水田面積に比しかなり少なかったことが察知される。下綿子、高木遺跡近辺にあっても同じようなことが言えよう。（古川与志継）

J－2・3ｔ　沼状遺構出土土器観察表

土器番号	器種	法量（単位cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴（胎土、焼成、色調、出土地、他）
1	甕	口　径16.6 頸　部　径14.0	口頸部のみ遺残する。 体部より屈曲して上方に伸び、更に屈曲してやや外反気味に外上方に伸びる口縁部がつく。口縁端部は、やや外方につまみ出され、外側に傾斜する面を持つ。	内外とも横撫により調整されているようである。 しかし、頸部外面には斜行し（左上～右下）内面はほぼ横位の刷毛目状の痕跡が認められる。	（胎土）良好であるが、やや小砂粒を含む。 （焼成）比較的堅緻 （色調）内外面とも黒褐色。 （出土地）J－2ｔ　沼状遺構上層
2	甕	口　径14.6 頸　部　径11.0	体部下半を欠失する。 球形に近い体部と思われるが、それよりく字状に屈曲して外上方に伸びる口縁部は、やや外反気味であり、徐々に薄くなる端部は丸くおさめられているが、やや外方につまみ出されている。	口縁部内外は横撫調整がなされている。 肩部には、縦方向の刷毛目が施され、下半は斜行する（左上～右下）ヘラ削状の調整がなされている。内面は、縦に近く撫上げられている。	（胎土）かなり小砂粒を含む。 （焼成）良好 （色調）内外面とも暗褐色 外面の所々黒化している。 （出土地）J－2ｔ　同前
3	甕	口　径14.0 頸　部　径 6.2	体部下半を欠失する。 球形に近いと思われる体部より、く字状に屈曲して外上方に短く伸びる口縁部が付く。 厚い口縁は徐々に薄くなり、端部は比較的丸くおさめられている。	口頸部外面は、縦あるいはやや斜行する（左上～右下）刷毛目が付され、その後横撫により調整された模様である。 肩部には、かなり斜行する叩き目状の荒い刷毛目が付されている。 口縁部内面は、横撫による調整がなされているが、横位の刷毛目状の痕跡が認められる。 肩部内面には、巻上げ（あるいは輪積か）の痕跡が認められる。横位の撫の後、斜に撫上げて調整している。	（胎土）良好、若干石英粒を含む。 （焼成）比較的堅緻 （色調）外面は褐色 内面は淡褐色 （出土地）J－2ｔ　同前
4	壺	体部最大径14.8	口頸部を欠失する。 高さの低い偏球形の体部である。 底部は丸底ではあるが、かなり平な面を持ち安定している。	底部より体部にかけて、徐々に器を回転しながら下方より順に荒い刷目を付している。この時の器の回転方向は、逆位の状態で時計と同方向である。 肩部はやや荒く横あるいは斜行する刷毛目を付している。 内面には、粘土紐の巻上の痕跡が明瞭に残っており、粘土紐を指圧しながら接合し、その後器を少しづつ回転しながら撫上げている。	（胎土）精良 （焼成）堅緻 （色調）黄褐色 内面はやや赤褐色気味を帯びる。 （出土地）J－3ｔ　沼状遺構上層
5	鉢	口　径13.0 器　高 7.9	底部はかなり安定した丸底を持ち、それより上方に伸び、一度内弯してやや狭く	内縁部は横撫により調整され、体部外面の上半は横撫の後やや斜行する（左上～	（胎土）かなり小砂粒を含む。 （色調）比較的良好

			なり直様屈曲して短かく外上方に広がる口縁を持つ。口縁部は、徐々に薄くなり、先端は丸くおさめられている。	右下）撫、中位はかなり斜行する撫、そして、底部はヘラにより削られている。内面の下半は削り取りがなされ、上半部は、斜行する撫による調整がなされている。	（色調）淡褐色 内面は赤味を帯びる。 底部より体部にかけての外面の一部が黒化している。 （出土地）J－3 t　同前
6	碗　口　径15.5		半球形に近い体部を持ち、底部は丸底をなすと思われる。 口縁部は、やや内弯するが横撫により上方に立つ。	口縁部内外は横撫。 体部上半は、巾の広いやや斜行する刷毛目が2段に付され、下半は撫により調整されているものと思われる。内面は、撫上げした後、上半部のみ横撫により調整されている。	（胎土）精良 （焼成）比較的堅緻か （色調）褐色あるいは暗褐色 （出土地）J－2 t　同前
7	高　坏　脚　高 7.5 脚付根径 3.8		坏部上端及び脚端部を欠失する。 坏部は、内面の平な底部よりなめらかな稜をなして屈曲して外上方に伸びる。 脚支柱部は、ややふくらみを持ってかなり広がりながら下方に伸び、更に屈曲して外方に開く裾部が付く。裾部は、坏部口径に比しその広がりは少いと思われる。	脚支柱部内面を徐き全体にかなり磨滅して不明瞭な所が多い。 脚支柱部と裾部の境の外面には顕著な横撫が認められる。 脚支柱部・裾部とも撫によると思われる。 脚支柱部内面には、巻上げ痕が明瞭に認められ、粘土紐を指圧しその後、ヘラ削りがなされている。	（胎土）精良 （焼成）やや不十分 （色調）黄褐色 脚部の一部やや黒味を帯びる。 （出土地）J－2 t　沼状遺構上層
8	高　坏　底　径14.0 脚付根径 4.0		坏部を欠失する。 脚支柱部は凡そ下方に真直に伸び、一度屈曲して外下方に真直に伸びる。端部には外側に面を持つ。	外面はかなり磨滅して判然としないが、支柱部は縦方向の指撫がなされたものか。裾部は横撫調整と思われる。支柱部内面には巻上げ痕、絞り目が残り、その上より撫ている。裾部内面には斜行する（左上～右下）刷毛目が付され、先端近くは横撫がなされたものと思われる。	（胎土）やや石英粒を含む （焼成）比較的良好か （色調）内外面とも淡褐色 断面は黒色をなす。 （出土地）J－2 t　同前
9	高　坏　底　径15.0 脚　高 8.0 脚付根径 3.7		坏部を欠失する。 坏部より屈曲してふくらみながら下方に伸び、更に屈曲して外方に伸びる裾部が付く。裾部先端は比較的丸くおさめられており、裾部と支柱部との屈曲は内面において明瞭な稜をなす。	脚裾部の内外は横撫により調整されている。 支柱部の内面は、ヘラ削りがなされているが、巻上げ痕を止める。	（胎土）比較的精良 （焼成）比較的堅緻か （色調）赤褐色あるいは黒褐色 （出土地）J－2 t　同前
10	器　台　頸　部　径 3.4		受部及び脚裾部は欠失する。 脚部支柱は、やや外方に開きながら下方に伸び、屈曲して外下方に広がる裾部がつく。屈曲はあまり顕著で	支柱部内面はヘラを二回に分けて回転して横に削り、頸部もヘラを少しずつ回転しながら削っている。 外面はあまり分明ではない	（胎土）かなり精良 （焼成）やや甘いか （色調）内外面とも褐色 （出土地）J－2 t　同前

			はないが、内面には稜をなす。 脚部と受部は別々に作り接続している。	が、縦方向のヘラ研磨がなされその後下半は撫られたものか。 脚部は内外とも、横撫によると思われる。	
11	小型壺	体部最大径 5.3 頸　部　径 2.5	手ずくねのミニュチアの土器である。 底部は、平底状をなし、胴の張る箱形様をなす。 口縁は欠失して明らかではないが、小さく薄い。	体部内外には、手ずくねによる指圧をとどめる。 頸部は撫でいる。	(胎土) やや小砂粒を含むが、比較的精良か。 (焼成) やや甘い (色調) 表面は暗褐色　一部やや黒化している所あり。 (出土地) J－2　同前

J－14 t　溝状遺構３出土土器観察表

土器番号	器種	法量(単位 cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴(胎土・焼成・色調・出土地・他)
1	甕	口　径11.4 頸　部　径 9.8	体部以下は欠失する。いわゆるS字状口縁をなす。 球形に近い胴部よりなめらかにく字状に屈曲し斜上方へ伸び、次いで屈曲して上方に立上がり、更に斜上方へつまみ出されている。 端部には内側に面をなす。 器壁はかなり薄く仕上げられている。	口縁部は内外をも横撫により調整されている。頸部より肩部にかけ外面はヘラ描き直線文に近い、腰の強い刷毛状具による施文がある。 体部内面はヘラ等により削取が行なわれている。	(胎土) やや小砂粒を含む (焼成) 比較的堅緻 (色調) 黒褐色あるいは黒灰色 口縁の一部は焼成時あるいはそれ以前に他の物に触れ変形している。 外面の一部には炭化物（すすか）が付着する。
2	甕	口　径11.2 頸　部　径 9.4	体部以下は欠失する。 前者に類似したS字口縁をなすが、やや頸部から体部への屈曲が深く、口縁先端には水平な面をもつ。 口縁立上がり部分の外面に２条の弱い沈線を付す。	肩部外面に、やや腰の強いハケ状具による施文が付されている。頸部内面にヘラ磨に近い横位の削りが行なわれている。	(胎土) やや小砂粒を含む (焼成) 比較的堅緻か (色調) 黄褐色、外面一部暗褐色
3	甕	口　径13.8	小さく屈曲するS字状口縁の小片である。 口縁端の外方へのつまみ出しの下端に弱い沈線１条をめぐらす。	内外ともなでによる。	(胎土) やや小砂粒を含む (焼成) ややもろいか (色調) 淡黄灰色
4	甕	口　径14.6 頸　部　径12.4	口縁部は、体部よりく字状に屈曲して外上方にまっすぐに伸びる。端部は内面に折り返しがあり、内側に厚肥するとともに、外方にもやや厚肥し、先端は丸くおさめられている。	口縁部内面及び外面は、横撫による調整が顕著である。肩部外面には、縦方向の刷毛目が認められ、内面は、撫上げが行なわれている。	(胎土) やや小砂粒を含む (焼成) 良好か (色調) 黒褐色、内面は黄褐色
5	甕	口　径14.5 頸　部　径10.8	口頸部のみ遺存する。 体部よりく字状に屈曲し、やや外反しながら外上方に伸びる。端部は徐々に薄くなりやや尖りぎみである。	口縁内外は縦あるいは斜方向の刷毛目が付され、上端はその後横撫が行なわれている。 肩部内面は、ヘラ状具によ	(胎土) やや小砂粒を含む (焼成) 堅緻 (色調) 茶褐色

				り削り取りがなされ、外面には、縦方向の刷毛目を施す。	
6	甕	口　径14.8 頸　部　径11.3	口頸部のみ遺存する。 体部より屈曲して上方に伸び、更に屈曲して外方に伸びる口縁である。先端は、比較的丸く、やや外方につまみ出された所もある。	口縁部外面は横撫によるが、粘土紐張り付け及びその指圧痕が認められる。 肩部外面はやや細い刷毛目が認められる。内面は、やや不明瞭であるが、口縁部には横位の刷毛目が認められる。他は撫によるものか。	(胎土)　かなり小砂粒を含む (焼成)　堅緻 (色調)　外面は黒色あるいは黒褐色 内面は黒褐色あるいは暗褐色
7	壺	口　径15.0 頸　部　径12.4	球形に近いと思われる体部より屈曲して上方にやや外反気味に伸びる口縁部が付く。 口縁端部は内側に厚肥する。	口縁部外面及び内面は掻き目に近い横撫が行なわれ、外面の一部には縦方向の細かい刷毛目が認められる。 肩部外面には斜行する細かい刷毛目が付されその上半一部は撫により消されている。その下は横方向の掻き目が付されている。内面は、ヘラ削りがなされ、また撫上げの痕も認められるが、全体に器壁は厚い。	(胎土)　やや小砂粒を含む (焼成)　やや甘いか (色調)　外面は、暗褐色あるいは黒褐色をなすが、一部褐色状をなし、焼後の使用時あるいは埋没時何物かが付着していたものと思われる。 内面は褐色を呈す。
8	小形壺	口　径 8.0 頸　部　径 6.4 最大腹径 7.4	いわゆる小型丸底壺の一種であろう。 球形に近い体部の最大腹径は、中位より上半にあり、口径より小さい。口縁部は、体部よりく字状に屈曲し、内弯気味で短かく、中位で厚肥する。	口縁端部は横撫により仕上げられ、他はヘラ削りによると思われる。 外面は、手で持つことにより撫たと同じようになっている。	(胎土)　良好 (焼成)　比較的良好か (色調)　内外とも黄褐色
9	小型壺		いわゆる小型丸底壺と思われる。口縁部を欠失する。 やや尖り気味の底部を持ち、最大腹径は中位上半にあり、口径の方がより大きいと思われる。 体部と肩部との境は比較的明瞭な破をなし、口縁部はく字状に屈曲して上方に伸びる。 器壁は比較的厚い。	全体に撫による調整が行なわれている。 口縁部及び肩部外面は横撫による。 体部肩部以下の一部には、横方向のヘラ削り状の痕跡も認められるが、磨滅して明らかではない。内面は底部より撫上げ、上半は横方向への撫取りがなされている。	(胎土)　良好 (焼成)　やや甘いか (色調)　淡褐色
10	高　坏	坏部付根径 1.8 底　径11.4	坏部を欠失する。 脚支柱部は、ややふくらみながら下方に伸び、更になめらかに屈曲して外方に伸び、先端は丸くおさめられている。後者に対しかなり細そりしてスマートである。	脚支柱部はヘラ削り後横位のヘラ研磨が行なわれており、裾部内外は横撫調整が行なわれているが、内面には指圧痕が認められる。支柱部内面には、絞り目状の痕跡が認められ、その後撫が行なわれている模様である。 支柱部内面には巻上げ状の痕跡も認めることができる。	(胎土)　精良 (焼成)　やや甘いか (色調)　黄褐色 脚裾部一部は黒化している。

11	高　坏	坏部付根径 2.9 底　径12.5	坏部を欠失する。 太くふくらみを持つ支柱部が下方に伸び、屈曲して外方に伸びる裾部が付く。先端は丸くおさめられている。 坏部と脚部の接続は、坏部中央に支柱部を指込むようにして接続している。	全体に撫による。支柱部付根付近外面にはヘラ削りの痕跡が認められ、また、支柱部内面には明瞭な巻上げ痕をとどめ、粘土紐を巻上げていく時に指圧した痕跡が残っている。	(胎土) 精良 (焼成) やや甘いか (色調) 赤味をおびる茶褐色
12	高　坏	底　径13.0	脚部下半のみ遺存する。 支柱部より屈曲して外方へ伸びる裾部が付き、先端は丸くおさめられている。	支柱部より裾部にかけてヘラ削りがなされ、裾部先端近くは、横撫がなされている。 裾部内面は、横撫により、支柱部では撫取りがなされている。	(胎土) 精良 (焼成) 比較的良好か (色調) 暗褐色
13	高　坏		脚部中位のみ遺存。 八字状に開く脚部と思われる。円形の透しが三方に付されていると思われる。あまり大型ではない。	外面は縦方向のヘラ磨きがなされ、内面は横撫による。	(胎土) やや小砂粒を含む (焼成) やや甘いか (色調) 淡黄褐色
14	高　坏	口　径 8.0	いわゆる小盤高坏に相当する。脚部を欠失する。 内面の平らな坏底部より、外反気味に短かく外上方へつまみ出されている。	坏部底部外面は縦方向にヘラ削りを器を少しづつ回転しながらなし、口縁及び内面は撫調整を行なっている。	(胎土) 精良 (焼成) 良好か (色調) 淡黄褐色
15	器　台	底　径 4.8 口　径 3.8 器　高 5.5	ミニチュアの器台である。 中実の支柱部にややくびんだ受部が引き出されたように付き、裾部は、やや内弯気味で外下方へふんばる。 この位置では全体に脚部の方がていねいにつくられており、上下が逆である可能性がある。	手ずくねにより作られているが、裾部及び同内面はナデが行なわれ、支柱部及び受部内面には刷毛目が認められる。	(胎土) 精良 (焼成) やや甘い (色調) 黄褐色 裾部及び受部の一部 (同位置) が黒化している。

J－19 t　方形ピット一括出土土器観察表

土器番号	器種	法量 (単位 cm)	形態上の特徴	調整上の特徴	その他の特徴
1	甕	口　径15.0	小片であり、口縁部のみ遺存する。 いわゆるS字状口縁の一種であり、小さくこじんまりしている。 体部より屈曲して外方に伸びる口縁は直様屈曲して外反気味に外上方に短く伸びる。端部は外上方につまみ出され、先端はやや尖り気味であり、内側に面を持つ。	内外とも横撫により調整されている。	(胎土) 1㎜内外の小砂粒をかなり含む。 (焼成) 比較的良好か (色調) 暗褐色 (出土地) ピット内北側
2	甕	底　径 4.0	底部のみ遺存する。やや上げ底気味の平底をなす。	内外とも磨滅しており分明ではないが、体部はヘラ研	(胎土) 若干の小砂粒を含むが精良

				磨様のつやのある部分あり。	(焼成) やや甘い (色調) 暗褐色 底部外面の一部黒化している。
3	小型壺	口　径 9.0	いわゆる小型丸底壺の口縁部である。 4のような体部よりく字状に屈曲して、外上方に真直に伸びる口縁である。一度薄くなった口縁は再度肥厚し、先端へ徐々に薄くなり先端は丸くおさめている。	内外は横撫により調整し、その後外面の頸部は縦方向に幅の広いヘラ研磨がなされる。	(胎土) 精良 (焼成) やや甘いか (色調) 外面の一部は黒化し、他は黄褐色をなす。
4	小型壺	体部最大径 9.0 頸　部　径 6.6 器　　高 8.5	いわゆる小型丸底壺の体部であり、3のような口縁が付くものと思われる。 底部はやや尖り気味の丸底である。球形に近い体部の最大径は中心よりやや上位気味で口径に凡そ等しいと思われ、器壁は底部に比して薄くなっている。	内面下半は、工具により削り取りがなされ、上半には巻上げ痕をとどめ、その上に撫がなされている。 外面はかなり磨滅して判然としない。刷毛目様の痕跡も認められるが、撫あるいは一部ヘラ削りがなされたとも思われる。	(胎土) やや小砂粒を含む (焼成) かなり甘い (色調) 黄褐色
5	高　坏	口　　径15.1 脚付根径 3.0	脚部を欠失する。 坏底部よりかなり明瞭な稜をなして屈曲する口縁は、外反しながら外上方に伸び、端部は丸くおさめている。器壁はかなり厚い。	坏部内外面は、横撫により調整するが、坏部外面には縦方向の指撫状の痕跡を止める。	(胎土) 比較的精良か (焼成) やや甘いか (色調) 黒褐色あるいは暗褐色一部やや黒化している。
6	高　坏	口　　径15.0 脚付根径 3.4	脚部及び坏部口縁の先端を欠失する。 坏底部より比較的明瞭な稜をなして屈曲し、外上方に伸びる口縁部は、端部で外反し、先端は丸くおさめていると思われる。	坏部外面は縦方向の叩き目様の幅の広い刷目が付されており、その上に横撫による調整を行なっている。内面は横撫によるが底面には、刷毛目状の痕跡が若干認められる。	(胎土) 若干細砂粒を含む (焼成) 比較的良好か (色調) 暗褐色、内面は褐色
7	高　坏	底　　径12.5 脚付根径 3.0	脚部のみ遺存する。 脚支柱部は下方にふくらみながら伸び、屈曲して外下方になめらかに伸びる。端部は丸くおさめられている。脚部と坏部の接合は、脚支柱部を坏底部に突き指すように接合している。	外面はかなり磨滅し不明な所が多いが、屈曲部以下は横撫により調整される。 支柱部内面には巻上げ痕を止めるが、その上にヘラにより横に削っている。	(胎土) 比較的精良 (焼成) やや甘いか (色調) 暗褐色
8	高　坏	底　　径12.2 脚付根径 2.7	前者の特徴に類似 裾部先端がやや上寄気味である。	上に類似	(胎土) 比較的精良か (焼成) やや甘いか (色調) 褐色
9	高　坏	脚付根径 3.8	やや太い目の脚支柱部の一部である。 前2者に類似する。	前2者に類似。	(胎土) 精良 (焼成) 甘い (色調) 黄褐色

第4章　湖北町小倉遺跡

図1　遺跡位置図
(1.大海道遺跡，2.円通寺遺跡，3.小倉遺跡，4.大安寺遺跡，5.雛波遺跡)

1　位置と環境（図1）

小倉遺跡は行政上、東浅井郡湖北町小倉に所在する。高時川の西方約 600 m の地点にあって、標高およそ93 m で南西方向へ微傾斜する平地に立地する。

周辺に遺跡は少ないが、高時川に沿って南方に大安寺・鍋織・雛波遺跡と弥生～奈良時代の遺物を出土する遺跡があり、小倉遺跡同様高時川とのかかわりの深いものであろう。概して、附近遺跡の性格等については明瞭でない。

2　調査の経過

小倉遺跡は、当初、物言寺、光明寺、寺西等の字名を根拠に寺院跡として周知されていたものであった。ところが、昭和49年度に、今回調査対象地域の南端で、ほ場整備工事により小倉第4号線排水路が敷設され、その際、多量の土師器を中心とする土器片が出土したとの通報があり、現地調査の結果、寺院跡以前の集落跡の存在をも推定されるに至ったのである。現地調査の時点では、すでに排水路の掘穿は完了し、土堤の築成が終了した段階であったが、掘り出された遺物の散布状況により、現小倉集落の南側にある小倉神社を中心に東西幅およそ 300 m の範囲にわたって広がることが知れた。また、この排水路より南側について表面観察を実施したが、遺物を検出し得ず、北側が一段高くなっているところから、むしろ北側への広がりが考えられた。昭和50年度には、この北側部分の水田もほ場整備事業の対象となり、事前に発掘調査を実施して遺構、遺物包含層の有無等を確認する必要が生じた。調査は、ほ場整備により、現出面が20cm程下る北側半分を中心にグリットを設定し、遺跡に対する影響の有無を確認することにした。

3　調査の結果（図2・3）

GA～C

厚さ30cm程の耕作土及び青緑色粘質土の床土以下に、厚さ30cm程の青灰色粘土がほぼ水平に堆積していた。以下は青灰色の砂粒層に移行するが、いずれにも遺物の包蔵はなく、また、ピット等の掘り込みも認められなかった。

GD～F・G・H

GA～Cでみられた青灰色砂粒層がこの部分では南側に向って傾斜している。以上の堆積はGA～Cと同様であった。

GK～R

現田面はGA～Fの部分に対して20cm程下る。耕作土下に青灰色粘土が見られ、GA～Fでみた青緑色粘質土の堆積はなかった。青灰色粘土層は厚さ20cm程で、以下には暗青灰色の粘質土の堆積があった。GMではこの暗青灰色粘質土層中より須恵器片1点を出土している。

GI・J

桑畑で、周囲水田より30～60cm高くなっている。上方60cm程の厚さは黄褐色を呈する後世の盛土であった。下方は厚さ20～35cmの茶灰色粘土、20～40cmの茶褐色粘質土と続き、以下GA～Hでみられた青灰色粘質土と

なる。茶褐色粘質土の下方部に土器の包含がみられた。

以上より、調査対象地域において、南端と北端約100mの間で、青灰色粘土及び砂粒層の自然地山面が約60cmの落差をもって傾斜し、その上方に、北半部では青灰色粘質土、南半分には茶灰色～茶褐色粘質土が厚さ20～60cmにわたって堆積していたことが知れた。そして遺物の包蔵は特に南半部で茶褐色粘質土層中に見られた。従って、当遺跡は南に下る微傾斜地にあって、その低所側に遺物の包含層が形成されていることが知れる。遺構については、北半部が削平されている可能性も考えられるが、設定したグリット内では検出し得なかった。

図2　小倉遺跡グリット配置図

4　遺物（第5章 図5）

土師器及び須恵器で2がGMの暗青灰色粘質土層より、5・6は表採したもので、他はGIの茶褐色粘質土中よりの出土遺物である。

1は土師器の甕形土器で、口縁部は短かく、外方へ開く。端部は外方へ突出し、水平に面取りしている。

7は土師器の甑形土器に付く把手。横断面はおよそダ円形で、端部は斜上方に向く。

3は須恵器の杯蓋。天井部と口縁部との境界に明瞭な稜を取り、口縁端部は水平に面を取っている。

4は須恵器の杯身で、口縁部の立ち上りは内弯して大きく内傾し、受部は水平に外方へのびる。低部は丸く、

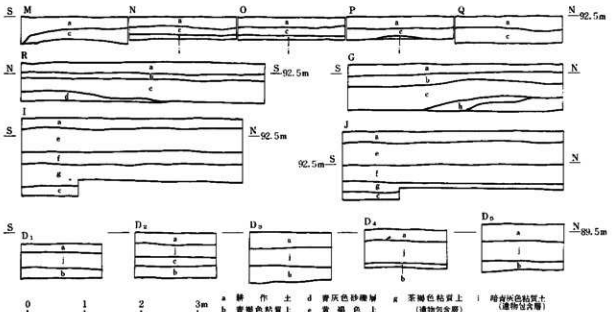


図3　小倉・大安寺遺跡グリット断面土層図

外面3分の2程を篦削りしている。

2は須恵器の高台付きの碗でGMの出土である。内側にカーブしながら開く口縁部と外側に張った高台を持つ。口縁端部をのぞいて篦削りにより調整している。外低面に墨書がみられる。

5は横断面三角形状の高台を持つ須恵器の碗形品。

6は壺形土器の低部と思われる。高台はやや外方に張り横断面五角形を呈す。体部内面に櫛状工具による調整痕がみられ、また、底面に櫛状の工具による押え痕を見る。

5　結　　語

以上、出土遺物としては、須恵器3が6世紀初当、4が後葉で、GIの包含層はおよそ古墳時代後期のものであり、GM出土の2及び5・6は平安時代のものと考える。古墳時代後期の遺物は集落跡の存在を推察させるものであり、平安時代のものは、その後、あるいは寺院との関連を持つものであるかもしれない。およそ、小倉遺跡は2時期の複合した遺跡であることが知れた。しかし、これに係る遺構については、ほ場整備事業の遺跡に対する影響がないものと考え、今後の精査を待つことにした。

第5章　湖北町大安寺遺跡

1　位　　置（第4章 図1）

小倉遺跡の南西約50mのところに位置する。行政上、湖北町大安寺とびわ町稚葉にまたがる。小倉・錦織・雛波遺跡等とともに高畤川東岸に並ぶ一連の遺跡の一つである。

2　調査の経過

当遺跡の南北中央部を湖北町とびわ町との境界線が走るが、びわ町内は場整備に伴うこの部分の排水路工事の際、土器片の出土を見た。今回の事前の踏査では、土器片等遺物の散布は認められなかったが、一部排水のため深掘された部分があり、この部分の観察では表土下1m程の砂礫層より若干の土器片が出土していることが知れた。

ほ場整備では現田面レベルの低下はなく、遺物包含層等への影響はないと判断されたが、深掘される排水路部分での確認は必要であった。調査はこの部分に約40mごとにグリットを設定し、掘り下げを行なった。

3　調査の結果（図4・第4章 図3）

耕作土下に20~40cmにわたる青茶灰色粘質土の堆積があり、以下青褐色粘質土の厚い堆積がある。グリットD2では両層の間に青灰色の砂礫層がみられたが、D2附近に部分的に堆積したものと思われる。

遺物はほとんど出土せず、D1の青褐色粘質土より数点の細片を出土したのにとどまった。いずれも図示できないが、土師質のものであった。なお、図5－7は附近で表採したもので、口縁部に刻み目と頸部に二条の粗雑な篦状工具による凹線を施した甕形土器である。

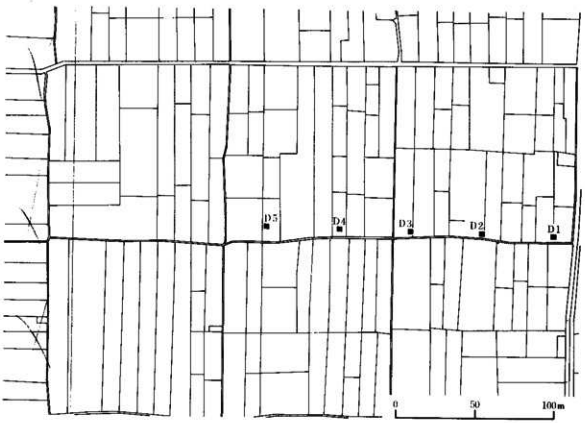


図4　大安寺遺跡グリット配置図

4 結　　語

ほ場整備排水路部分の調査では、遺構、遺物の包蔵は認められなかった。ただ、D1で細片で数点ながら土師質の土器片を出土したこと、昭和49年度ほ場整備で、D1の南側、びわ町との境界部の排水路工事で遺物が出土したこと、D1の東側での排水のための掘穿坑からも遺物が出土していること等を考えると、遺跡はD1以南に広がる可能性が強い。

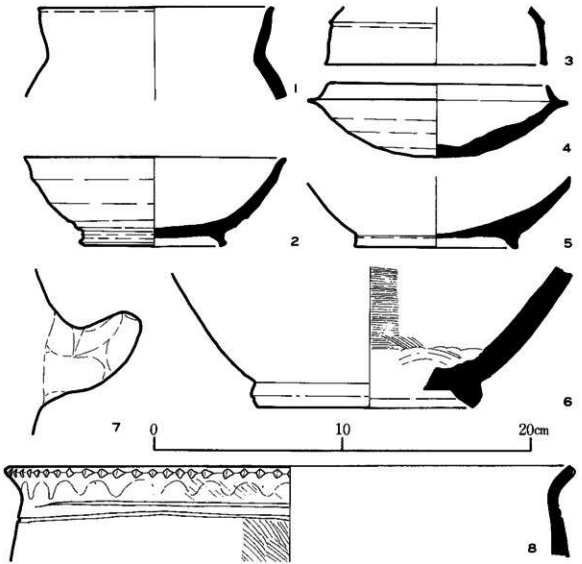


図5　小倉・大安寺遺跡出土遺物実測図（1～7．小倉遺跡出土，8．大安寺遺跡出土）

第６章　　高月町円通寺遺跡

はじめに

円通寺遺跡は、従来寺院跡として周知され、以前に礎石、須恵器片を出土したと伝えられていた。今回、ほ場整備工事に先立って、伝承地域の試掘調査を実施し、遺構の追求を計った。その結果、当該地においては遺構の存在は認められず、ただ、耕土中より須恵器の小片が数点出土したにすぎなかった。しかし、このことと周辺の地形よりして、遺跡が伝承地域より東及至南東方向へ広がることが予想され、地元の協力を得て調査対象地域を拡大するに至った。結果的には、古墳時代初頭の遺物を多量に包含する沼状地と溝を検出したのであるが、寺院跡あるいは須恵器の示す年代に対応する遺構は認められず、これらの確認は今後の課題として残された。

1　位置と環境（第4章図1）

当遺跡は行政上、寺院跡伝承地域が伊香郡西阿閉小字円通寺にあり、古墳時代初頭の遺構部分は小字戸棚町北石田にまたがる。北東に東阿閉、南西に西阿閉の現集落があり、この両集落にはさまれた一帯の水田が当遺跡である。西方1km程のところで賤ケ岳から南方にのびる地累状の山丘で琵琶湖と界されているが、東方は湖北平野が大きく開けている。地累状山丘裾部に余呉川が南流し、東方の高時川までは2.5kmの隔りがある。微地形をながめると、東阿閉と西阿閉の両集落を結ぶ地域、すなわち当遺跡部分で南方へ張り出した舌状のわずかな微高地となっている。また、当遺跡に隣接して北側には、旧河道と思われる帯状の低地があり、現在も小河川が西流していて、遺跡の北限をなしている。

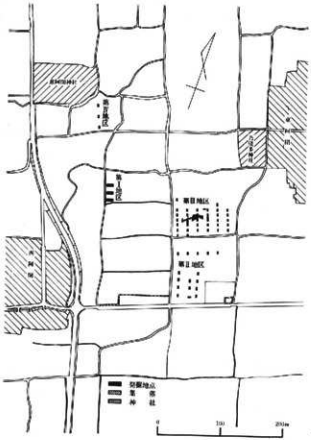


図2　円通寺遺跡地区配置図

周辺の遺跡としては、西方の地累状の山丘尾根上に100基を越す古墳時代前～中期の古墳からなる古保利古墳群があり、以降、北方の平地部に姫塚をはじめ甕塚・兵主神社境内古墳等前方後円墳である可能性の強い中期の大型の古墳が出現し、後期には北方涌出山、古保利古墳群の北方で、松尾や西野に属する山丘裾部等に横穴式石室を持つ後期古墳群が構築されており、古墳の分布、変遷については北較的良く知られている。しかし、これらに対応すべき集落跡については、余呉川河口附近で湖北町余呉川河口・今西・延勝寺の琵琶湖々底遺跡から弥生時代から古墳時代（一部奈良・平安時代に及ぶ）にかけての遺物が出土し、また、陸上地上の今西遺跡から古式土師器を伴う遺構が検出されている程度で、概して明瞭でない。ただ西

阿閉集落内、涌出山南側の唐川附近から土器片の出土が伝えられ、また、最近調査された大海道遺跡からも古墳時代の遺物を若干ではあるが出土している等、今後の精査いかんによってはこれら諸古墳とのかかわりでとらえられる遺跡は増加していくであろう。なお、最近、当遺跡の西北方井口集落を中心として南北3km（東西は明瞭でない）にわたる平安時代を中心とした遺物の散布地が認められたことを付記しておく。

2　調査結果（図2）

調査は、寺院跡として伝承されていた地域から、さらに、東及至南東方に対象地域を拡大したが、この部分はスイカ畑として使用されており、調査は休耕田の多い南半部から、スイカの出荷時期に合せて若干時期をおいて、北半分について実施し、遺構の有無、範囲、性格等を追求した。また、試掘とともに、周辺の分布調査を実施し、遺跡の広がり、発見につとめた。なお便宜上、試掘順序に従って、寺院跡伝承地を第Ⅰ地区（小字円通寺）拡大部の南半部を第Ⅱ地区（小字北石田）北半部を第Ⅲ地区（小字戸棚町）とし、さらに、第Ⅰ地区北方、意波閉神社附近（小字宮前）を第Ⅳ地区として地区設定した。

＜Ⅰ　第Ⅰ地区＞

耕作土直下に黄褐色土の自然地山面が見られた。ここでは後世の攪乱坑が見られた以外、ピット等の遺作は認められなかった。ただ、東方部との間に段落があり、これが人工的な削平によるものであって、本来遺構が存在していたとしても、すでに消滅しているものと思われる。

耕土中であるが、須恵器の小片が出土した。

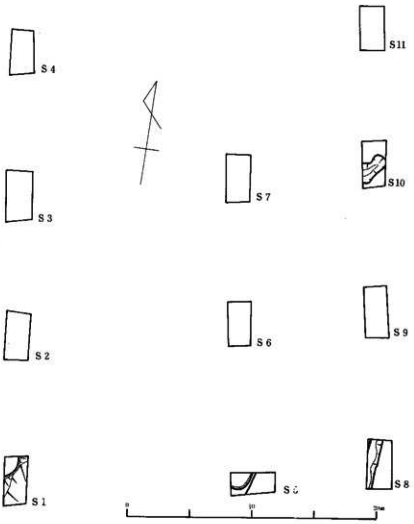


図3　円通寺遺跡第Ⅱ地区グリット配置図及び遺構平面図

＜Ⅱ　第Ⅱ地区＞（図3・7）

第Ⅱ地区のグリットS１、S５、S８とその北側（グリットS２～４、S６、S７）との間で20～40cmの落差があり、第Ⅱ地区南端部で自然地山面の大きな落ち込みが見られた。また、この落ち込みは、S１とS８との間で約20cmの落差があって、全体に西南方に向って深かくなっていることが知れた。

当地区では、さらに、S９～11、N５がその東側に対して深かく落ち込み、北東方に向って漸次深かくなっていた。

当地区北東部の台地状部では遺構の存在は認められなかった。

イ　S１　耕作土を含め、厚さ約70cmに及ぶ３層の堆積土があり、その下面でさらに約３０cmの深さで溝状の落ち込みがあった。この落ち込み内には上層に約10cmの厚さの灰褐色土、下層に黒灰色土の２層の堆積があり、特に下層には土師器の包含が認められた。

ロ　S５　S１同様厚さ70cmの堆積土層の下面で、二段にわたる落ち込みがあった。落ち込みは、まず、５cmの深さで、ほぼ、水平に削平され、この下低面より、さらに、深さ10cm程の円形状に掘り込まれていた。円形状の掘り込み内に黄褐色土、その上面をおおって灰褐色土の堆積がみられ、遺物は特に円形状掘り込み内で出土した。

ハ　S８　耕作土を含めた約50cmの厚さの堆積土下面で地山面が約20cmの深さでくぼみ、３層の堆積土があった。遺物の包含は認められなかった。

ニ　S９～11　地山面はS９からS11に向って漸次深かくなる。S10では上方より灰褐色土、暗茶褐色粘質土、砂利の３層が厚さ約40cmにわたって堆積し、砂利層より土師器、木器の出土をみた。また、S９、S11では砂利層は認められず、S11では暗茶褐色粘質土も消滅していた。

ホ　N５　S11と同様、耕土直下に灰褐色粘質土の厚さ１mに及ぶ堆積がみられた。遺物の出土は認められなかった。

＜Ⅲ　第Ⅲ地区＞（図4～7）

第Ⅱ地区S９～11と連続すると思われる沼状の落ち込みが東側（F０～FN１、GS２～GO、HS２～HO）で認められたほか、西側の台地状部で自然溝２条（M１・M２）、人工溝１条（M３）を検出した。

イ　M１　およそ北西一南西方向にのびる深さ４～12cmの浅い溝。幅は一定ではないが、およそ60cm前後で、横断面は皿状を呈している。東西両端で約12cmの落差があり、東方に傾斜している。溝内には黒及至暗灰色の砂粒が堆積し、多量の土師器を包含していた。

ロ　M２　西半分はM１に切られて東西に走り、東半分は屈曲して北上していて、M１にほぼ並行する。幅は約２mで、屈曲部附近では 4.9mと広くなっている。深さは、両端で約18cmの落差があるが、屈曲部で最深所66cmの平面瓢形の凹所があり、従って、この部分に向って傾斜している。横断面は、溝中央部で、幅１～1.7m程にわたって10cm程深かく、凵字形を呈している。溝中央の凹所に暗灰色砂粒、その上方に黒灰色土の堆積がみられたが、遺物は皆無であった。

ハ　M３　およそM１に並行した横断面凵字形の人工的な溝。深さ約20cm、幅60cmとほぼ一定で、溝底の落差はほとんどない。溝内の堆積土は単一で、土師器の細片を少量含んでいた。

ニ　FO～FN１　北東に向って緩傾斜し、グリット内で約20cmの落差がある。11層にわたる砂及至砂粒

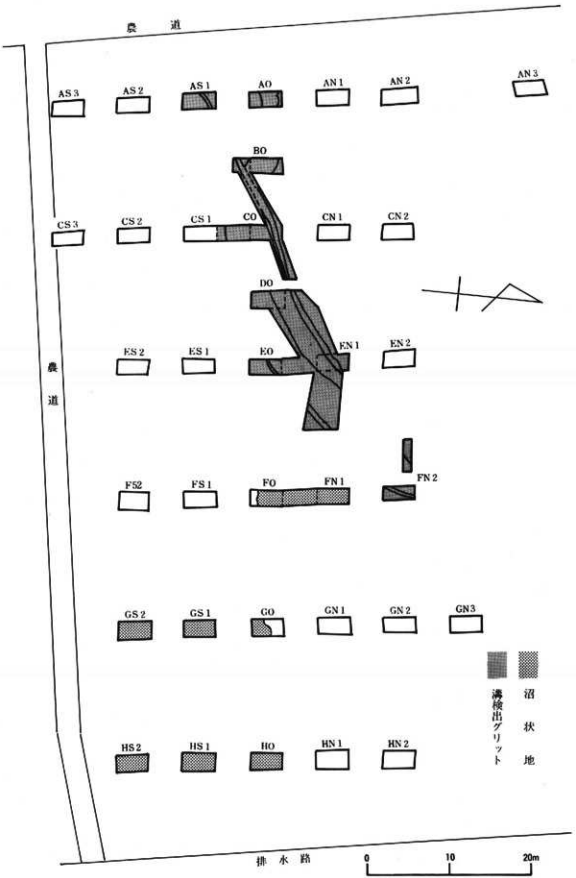


図4　円通寺遺跡第Ⅲ地区グリット配置図

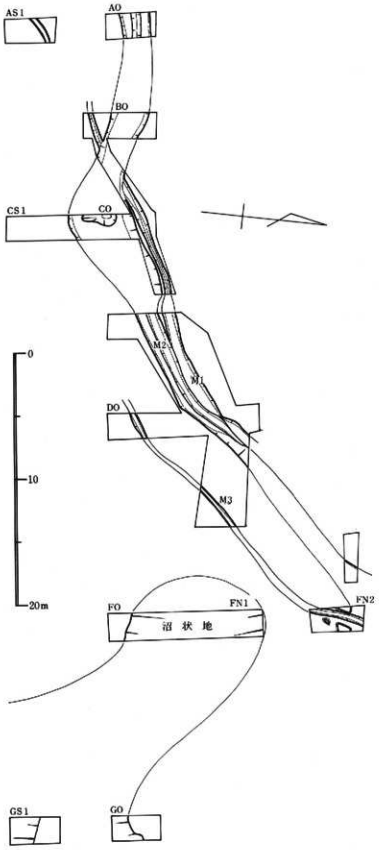


図5　円通寺遺跡第Ⅲ地区遺構平面図

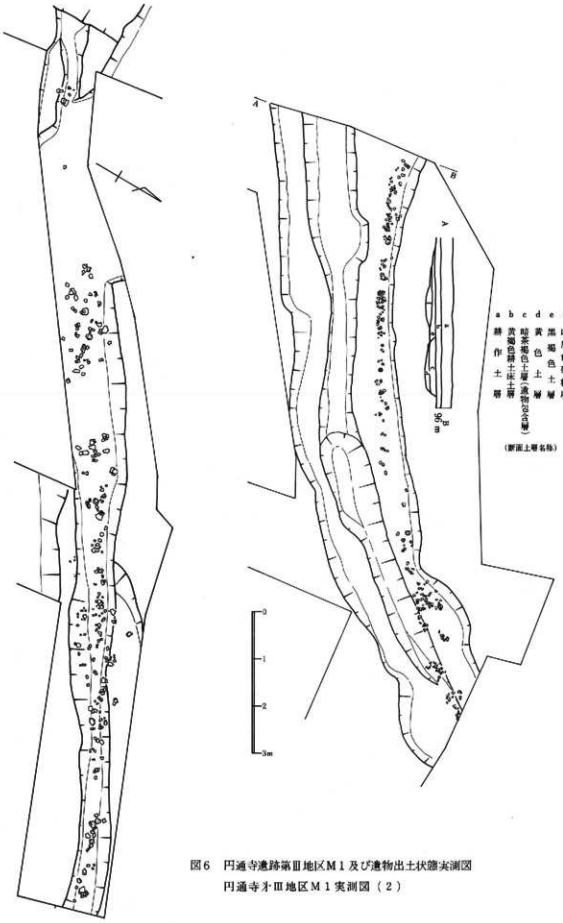


図6　円通寺遺跡第Ⅲ地区Ｍ１及び遺物出土状態実測図
円通寺オⅢ地区Ｍ１実測図（２）

の堆積があり、汀線の様相を呈していた。砂粒層部分から多量の土師器を出土した。

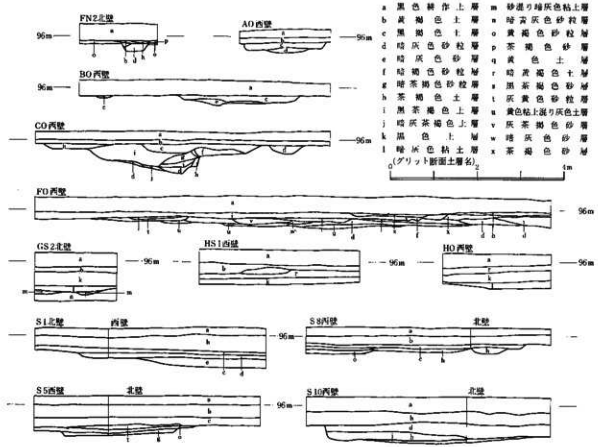


図7　円通寺遺跡第Ⅱ・Ⅲ地区グリット断面土層図

ホ　GS2～GO　GOからGS2に向って約60cmの落差がある。上層に黒色土、下層に暗灰色粘質土が堆積している。遺物はGS1の黒色土層上面で土師器壺1点を検出したのみである。

ヘ　HS2～HO　HOからHS2に向って傾斜し、やはり、黒色土と暗灰色粘質土の堆積があった。

3．遺　　物（図8～10）

遺物は、第Ⅱ地区S1、S10、第Ⅲ地区M1、M3で比較的良好な状態で出土した。その中で、M1出土のものが最も多く、その出土状態より一括遺物である可能性が強い。

＜I　第Ⅲ地区M1出土遺物＞　（図8・9）

イ　変形土器

A類（図8－1～6、11、12、）

ゆるやかにカーブする頸部から屈曲して立ち上る口縁部をもつもの。口縁端部は平坦で、やや外方に開いていて、直立あるいは内傾するものは見られない。口縁部外面に篦状工具による刺突文をめぐらすもの（11、12、）があるが、多くは無文である。このタイプの口縁部を持つ変形土器は、長浜市鴨田遺跡出土例ではハの字形に開いた　い脚台を持つ様である。類品は、口縁部形態で見る限り、東海地方の山中期の鉢形土器、さらに欠山期の変形土器に文様とともに受けつがれたものにみるが、およそ、口縁部は直立するか内傾し、口縁部から肩

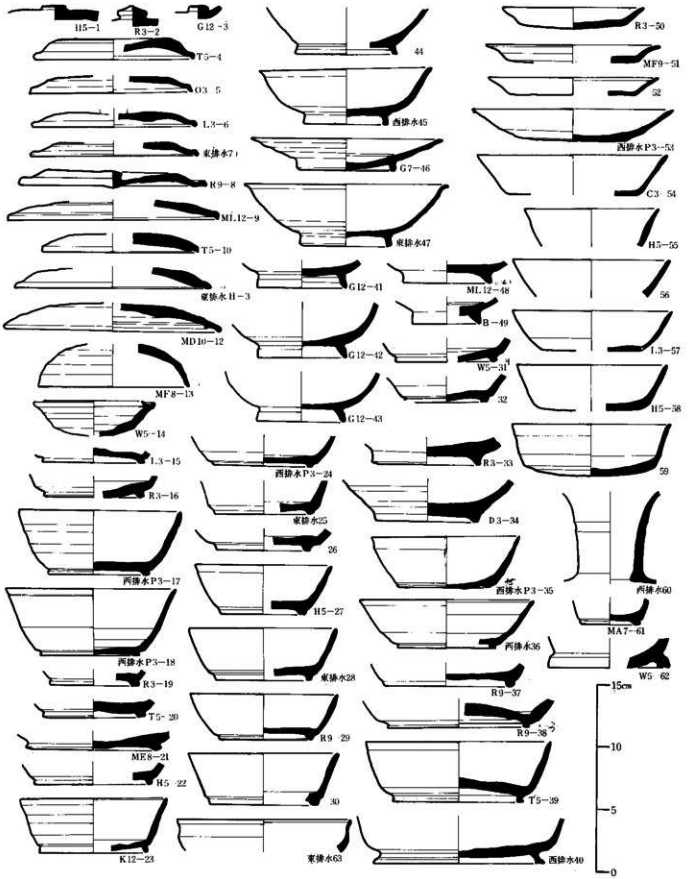


図7　大海道遺跡出土遺物実測図1)

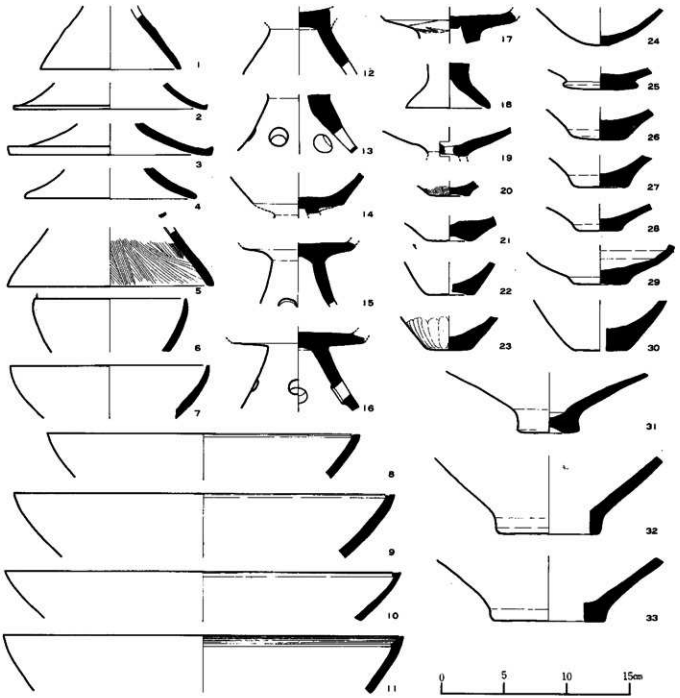


図9　円通寺遺跡第Ⅲ地区M1出土遺物実測図(2)

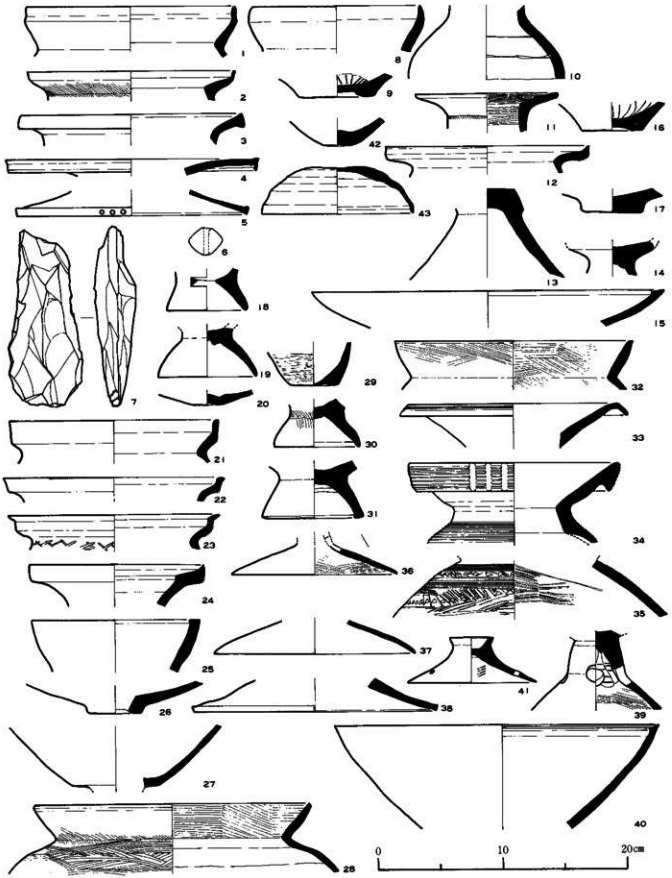


図10　円通寺遺跡第Ⅱ・第Ⅲ地区出土遺物実測図

1～7第Ⅲ地区採取，8・9第Ⅲ地区M3，
10～17第Ⅲ地区ＦＯ～ＦＮ1，　18～28
第Ⅱ地区Ｓ1，29～41第Ⅱ地区S10

部にかけて櫛描きの直線文や列点文ををめぐらせているのが一般的であるとされている。当遺跡の場合、無文のものが多く、口縁部も開き気味で、やや時期の下るものと思われる。

B類（図8－7）

いわゆるS字状口縁を持つもの。A類に近似しながら、口縁部をつまみ出すように屈曲させたもの。口縁部は直立している。肩部はなだらかで、胴部の張りは少ないようである。大参義一氏によるa類[2]、安達厚三・木下正史による[3]Ⅰ類に当ると思われるが、櫛状工具による施文をみない。

C類（図8－13～15）

口縁端部をつまみ上げて幅をとるもの。口縁部、頸部、肩部に刺突文あるいは平行沈線文を施している。

D類（図12－16～18）

有段で、幅 1.2～ 2.1cmの幅の広い口縁部を持つもので、北陸～山陰地方に特徴的な土器である。16、17は口縁屈曲部の稜は不明瞭で、16は5条、17は3条の平行沈線文が施され、18は無文であるが屈曲部の稜は比較的明瞭である。口縁部は概して開き気味である。山陰地方では、屈曲部の明瞭な稜は発生期古墳に供献されている的場式に続く鍵尾Ⅱ式までとされ[4]、当遺跡出土のものは、鍵尾Ⅱ式より後出的である。しかし一方、北陸金沢市高畠遺跡において、布留式並行とされる、北陸第Ⅲ様式土師器を出土する土壙墓群の下層より類似品が出土しており、明らかに北陸第Ⅲ様式土師器に先行するものといえる。

E類（図8－25）

「く」の字形にカーブする口縁端部を上下に肥厚させて幅広くし、その外面に3条の沈線を施したもの。肩部は張りが弱く、ナデ肩である。このタイプの口縁部は、むしろ、壺形土器に多く見る。

F類（図8－26～30）

単純に外方へ開く口縁部を持つものを一括した。28を除く他のものは「く」の字形に強く屈曲した頸部を持つ。26・27・29は口縁部が外寄気味に開く。28は口縁部が短かく開き、頸部の屈曲もゆるやかである。口縁端部内側を突帯状に肥厚させたものがみられない点、畿内布留式に先行するようであるが明瞭でない。

その他（図8－8～10）

8は「く」の字形に屈曲する頸部より口縁部上半で内傾させている。9は、口縁部の開きはさほど大きくなく、口縁端部で内側へ曲げ、つまみ出したように内寄している。10はA類に似た口縁部を持つが、頸部の屈曲はなく、内寄気味に下方へのびて体部に移行している。

口　壺形土器

A類（図8－19～24、43）

甕形土器E類に近似して、口縁端部を上下に肥厚させて幅広く面を取るもの。外面に、23は2条、24は4条の凹線、22は棒状、21は竹管文を施した円形の浮文が付く。19、20は無文であるが、19には内面に羽状の刺突文を見る。43はこれらと異なり、大形である。口縁部外面に凹線文、内面に鋸歯状の刺突文を施している。類品は、藤原宮内裏東外郭地域溝SD 527出土の庄内式土器一括品にみられ、高畠遺跡の下層からも出土している。また、羽状の刺突文を施す例は、東海地方に多く、元屋敷期に残り、以降、壺形土器への施文は消滅していく傾向にあるといわれる。

B類（図8－31、34）

別タイプのものと思われるが、外寄気味に開いた口縁部とその端部内側に突帯をめぐらす点共通している。31の口縁部内面には指押え痕、34には刷毛目調整痕が残っている。

C類（図８－32）

内弯して単純に開く口縁部。端部は平坦である。

ハ　高杯形土器

完形品の出土をみなかったので、便宜上、杯部と脚部を別にして記す。

杯部A類（図９－６、７）

小形品で、口縁部は内側にカーブしながら開く。

杯部B類（図９－８～11）

大形品で、いずれも口縁部を内側に肥厚させて面を取る。９、10は口縁端面は水平で、２条の凹線を施す。８も端面水平であるが施文はない。11は内側に内傾し、４条の凹線が施させている。

脚部A類（図９－２～４）

ゆるく外反して端部に至るもので、２、３は端部を上方へ肥厚させ、12は丸く仕上げている。

脚部B類（図９－１）

脚裾部が心持ち外弯するもの。東海地方の欠山期のものに特徴的とされるものに近似している。

その他（図９－12～17）

脚上半部あるいは杯部との接合部分の破片。14～17は杯底部が水平にのび、稜を取って立ち上るものである。15、16の脚上半部は内弯して開き、15は３孔、16は４孔が穿たれている。13は16に近似し、６孔が穿たれている。17は杯部外底面にさし込みの突起が残り、他のものと異る。18は短かく開いた脚裾部と充満した筒部を持つ。

ニ　器台形土器（図９－19）

明らかに器台形土器とし得るものは１点のみで、19は脚接合部より直線的に外上方々のびる杯部を持つ。

ホ　甕形土器（図８－40～42）

小さなハの字形に開いた脚台を付したもの（40・41）と脚台はなく、小さな円底に１孔を穿ったもの（42）とがある。

ヘ　脚台（図８－35～39）

いずれも底い脚台で、内側にカーブしながら開く。35～37は端部を内側に肥厚させ、38では、さらに折り曲げている。39は単純である。

ト　底部（図９－20～33）

外底面が平坦な円底となるもの（23、26、30、32、33）、やや突出して平坦な円底をつくるもの（27～29）、高台風に中央部をくぼませるもの（20～22、31）等がある。概して小さく、24は痕跡程度に残す。丸底のものはみられない。

Ⅲ　第Ⅲ地区Ｍ３出土遺物（図10－８、９）

図示し得たのは２点のみである。８は壺形土器の口縁部で、端辺を内側にカーブさせながら開く。９は底部で、高台風に、中央を凹ませている。

＜Ⅲ　第Ⅲ地区ＦＯ～ＦＮ１出土遺物＞（図10－10～17）

イ　甕形土器（図10－12）

第Ⅲ地区Ｍ１出土甕形土器Ｃ類に似て、屈曲して開く口縁端部を上方につまみ上げて、幅広い面を取ってい

る。M1C類の13同様口縁部は無文である。

ロ　壺形土器（図10−10、11）

10はナデ肩の肩部で、頸部はゆるやかなカーブを描く。胴部はよく張るが11は直線的に短かく開く口縁部で、頸部は細い。

ハ　高杯形土器（図10−13〜15）

15は大形品で、第Ⅲ地区M1出土高杯杯部B類17、18に類する。口縁端面には3条の凹線が施されている。

13はやや内弯気味に開く脚部で、端部を欠くが、そのまま下底に至るものと思われる。

14は杯部と脚部の接合部分で、杯部の口縁と下底部の接合部でわずかに稜を取って屈曲するようである。

＜Ⅳ　第Ⅱ地区S1出土遺物＞（図10−18〜28）

イ　甕形土器（図10−21〜23、28）

22はゆるやかにカーブする頸部より屈曲して立ち上る口縁部を持つ。口縁部は外反して心持ち開き、端部は外方へ尖る。第Ⅲ地区M1出土甕形土器B類と同類であろう。

23は22に近似するが、頸部からの屈曲は鋭くなく、丸味を帯ており、口縁端部も折れて外方へのびている。頸部に篦状工具による刻線文を施している。

21は「く」の字状の頸部より、直立する幅の広い口縁部を持つものでM1出土甕形土器D類に類する。無文である。

28は単純に開く口縁部を持つもので、口縁部内面及び体部外面を刷毛目による調整を施している。「く」の字形の頸部と直線的で、中程でやや肥厚する口縁部を持つ点M1出土甕形土器F類のものと異る。

ロ　壺形土器（図10−24、25）

24は内弯して開く頸部に肥厚させた口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみ上げて巾広く面を取り、また、内面に三角形の突帯をめぐらす。

25は外弯して開く口縁部で、端部を内側に肥厚させている。第Ⅲ地区M1出土壺形土器B類の形態に近似している。

ハ　甑形土器（図10−18）

短かく直線的に開いた脚台を持つものである。第Ⅲ地区M1出土のものに類品がある。

ニ　高杯形土器（図10−27）

杯部の破片で、端部は欠失しているが、心持ち内側にカーブしながら大きく開き、深い。底部とは稜を取って接続する。

ホ　脚台部（図10−19）

内側にカーブしながら開き、端部は丸く仕上げている。

ヘ　底部（図10−20、26）

20は中央をくぼませた小さな円底で、体部は大きく開く。

26も高台風の円底であるが、突出している。

＜Ⅴ　第Ⅱ地区S10出土遺物＞（図10−29−41）

イ　甕形土器（図10−32）

「く」の字形の頸部と直線的に開く口縁部を持つ。口縁部中程で肥厚し、端部を平坦にしており、第Ⅱ地区S1出土壺形土器と共通する。口縁部の内外面を刷毛目で調整している。

ロ　壺形土器（図10−33〜35）

33は直線的に開く口縁部の端辺を折り曲げて外下方へ垂下させ、幅広くして、3条の沈線をめぐらしている。

34は大きく開いた口縁部の端辺を下方へ肥厚させて幅広くし、8条の沈線をめぐらす。また、棒状の3条の浮文を貼り付けている。肩部には9条以上の櫛描き沈線を施している。

35は口縁部を欠く。肩部内外面を篦磨きし、2本の櫛描き沈線文と篦状工具による2列の刺突文を施している。

ハ　高杯形土器（図10−36〜40）

40は第Ⅲ地区M1出土高杯形土器杯部B類と同様大形品で、やや内側にカーブさせながら開いた口縁端部を肥厚させて面を取る。端面には一条の凹線がめぐる。

38は脚の裾部で、内弯気味に開いて端部に至る。裾端部は上下に肥厚させて面を取る。M1出土高杯形土器脚裾部B類の10、11に近似する。

36、37は内側にカーブしながら開き、端部を単純に仕上げた脚裾部で、36では屈曲して細い筒部に続く。また、屈曲部に円孔が穿たれている。

39は、やや胴ぶくれの筒部から折れまがって、外弯気味の裾部となるもの。屈曲部に4個の円孔を穿っている。

ニ　脚台部（図10−30〜31）

ともに内側にカーブしながら開くが、31ではその端部を内側に肥厚させている。第Ⅲ地区M1出土の脚台部と同形態である。

ホ　底部（図10−29）

筒状の体部を持つ。外面に篦削痕を見る。

ト　蓋（図10−41）

環状鈕のついた笠形の蓋。外反して開く笠部に2個1対の円孔が2対穿たれている。

＜Ⅵ　その他出土遺物＞（図10−1〜7）

甕形土器（1〜3）、壺形土器（4）、高杯形土器（5）の他に打製の石斧状の石器（7）と土錘（6）が出土している。

註

① 中谷雅治他「鴨田遺跡」（『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』昭和48年）

② 大参義一「弥生式土器から土師器へ——東海地方西部の場合」（『名古屋大学文学部研究論集（史学）』第47輯、昭和43年）

③ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』第60巻第2号、昭和49年）

④ 東森市良「九重式土器について——山陰における弥生式土器から土師器への移行——」（『考古学雑誌』オ57巻オ1号、昭和46年）

おわりに

当遺跡は、第Ⅱ・第Ⅲ両地区の東方及び南方が沼地状の低地となり、両地区から第Ⅰ地区にかけて自然堤防状の微高地を形成していることが知れた。第Ⅲ地区で検出した溝状の遺構はこの微高地上に刻まれたもので、沼地状の低地との関連は明らかでなかったが、ただ、沼地状の低地が埋った段階で古墳時代後期の須恵器杯身、土師器甕が出土し、また、第Ⅱ地区で、低地内堆積土中出土土器が第Ⅲ地区M１出土のものと近似した時期のものであることから、沼地状の低地が存在した段階とほぼ並行するものと思われる。

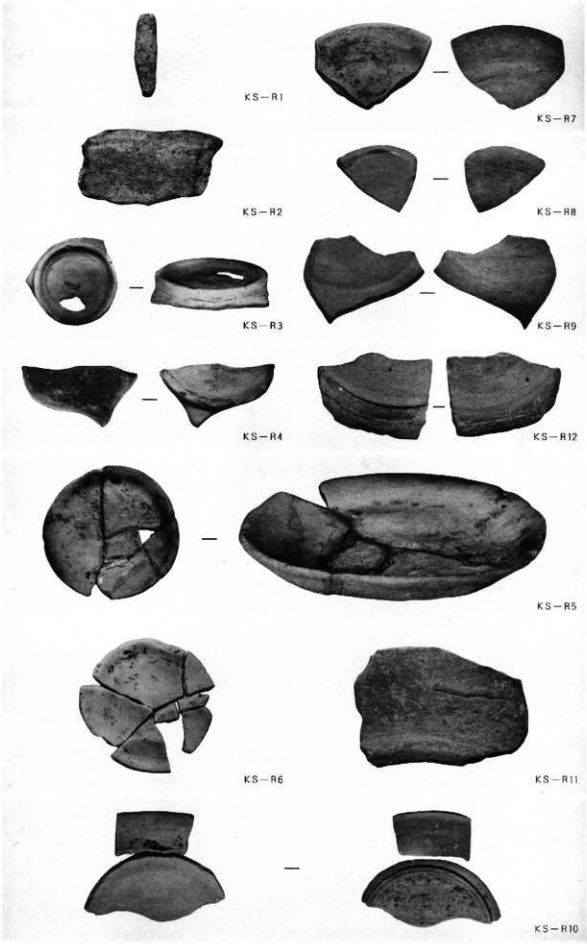
遺構としては、このように、溝、沼地状の低地等自然的なもので、住居跡等の生活遺構の検出はできなかった。しかし、出土遺物に関して、いわゆる古式土師器と思われるものの出土をみ、特に、第Ⅲ地区のM１は幅60cm前後、深さ４～12cmの浅い溝で、溝内堆積土が単純であることから、その包含遺物は一括して扱い得るものと考えられる。すでに、その形式的な特徴については触れてきたのでくりかえさないが、甕形土器について、畿内布留式にみられる口縁端部内側に突帯状の肥厚帯を持つものは皆無であり、壺形土器で、口縁部が二段に屈曲したものもみない。さらに布留式土器を特徴付ける鉢形土器や小型丸底壺も伴出していない。また、高蟹遺跡では、北陸第Ⅲ様式土師器を出土する土壙墓群の下層よりの出土品に類品が見られる。一方、高杯形土器の中に、欠山期に特徴的とされるものが少数ながらみられ、壺形土器のＡ類は弥生式土器から導びかれた形態と考えられる。

このようにみてくると、M１出土土器類は畿内布留式、北陸第Ⅲ様式、東海石塚期まで下らないものと考えられ、また、逆に、弥生時代後期まできかのぼるものはなく、従って、M１出土の土器類は、およそ、庄内、元屋敷、北陸第Ⅱ様式に近い年代を与えることができよう。

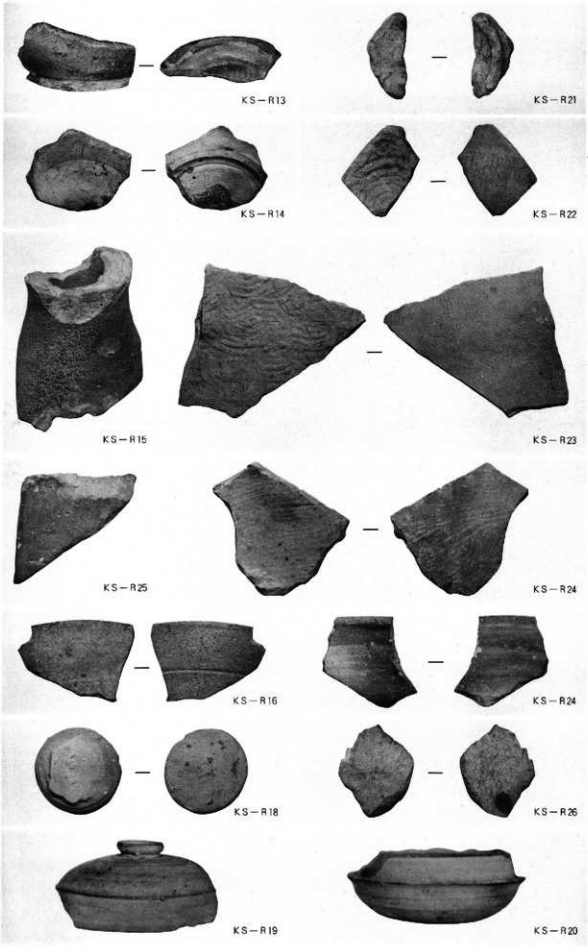
以上のように、M１出土土器類は一時期の一括と考えられたのであるが、現在のところ、湖北地方において、こうした時期の良好な出土例がなく、土器類のセット把握が非常に困難な状態にある。また、当地方は東海・北陸等の影響が非常に強いが、これら地方との交流関係についても、当地方における各時期での土器セットの把握が前提になろう。今後の精査をまちたい。

付章　　難波遺跡

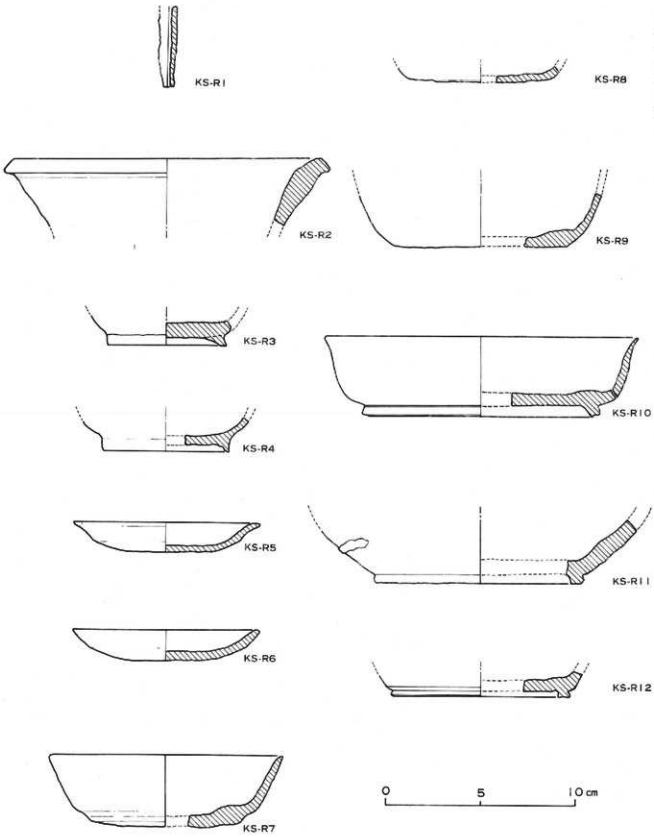
当遺跡は、昭和49年度ほ場整備事業大郷工区において、特に、びわ町新居および難波地区にかかる排水路掘穿の際、多量の土師器、須恵器等の遺物の出土をみたものである。地元町教育委員会よりその旨通知を受け、現地調査を実施した時には、すでに、排水路工事は完了に近かく、遺物の包含の仕方、遺構の有無等を掘穿部分では観察し得なかった。また、ほ場整備工事は現田面レベルを下げることなく実施されるとのことであり、耕土下への直接の影響がないものと判断され、発掘調査を実施するまでには至らなかった。しかし、排水路掘穿の折に掘り出された土中に多量の遺物が混入しており、それらの採集を行なう必要があった。遺跡の詳細については今後の精査を待たねばならないが、ここでは、とりあえず、採集した遺物の主なものについて図示しておくことにした。


KS－R1
KS－R7
KS－R2
KS－R8
KS－R3
KS－R9
KS－R4
KS－R12
KS－R5
KS－R6
KS－R11
KS－R10

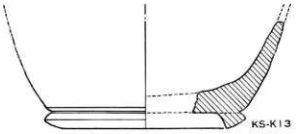
志郡中遺跡出土土器　(1)


KS－R13
KS－R21
KS－R14
KS－R22
KS－R15
KS－R23
KS－R25
KS－R24
KS－R16
KS－R24
KS－R18
KS－R26
KS－R19
KS－R20

志郷中遺跡出土土器（2）

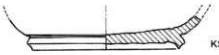

KS-R1
KS-R8
KS-R2
KS-R9
KS-R3
KS-R10
KS-R4
KS-R5
KS-R11
KS-R6
KS-R12
KS-R7
0
5
10cm

志摩中遺跡出土土器 (1)

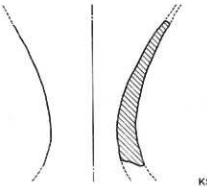

KS-K13

KS-R17

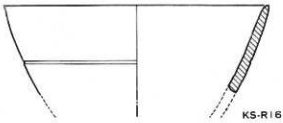
KS-R18


KS-R14

KS-R19


KS-R15

KS-R20

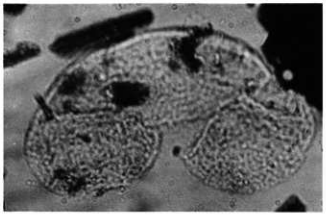

KS-R16

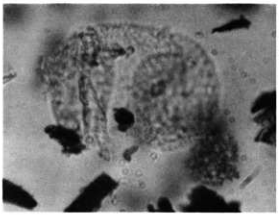
KS-R26

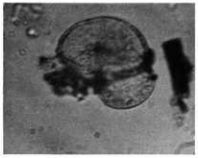
0
5
10cm

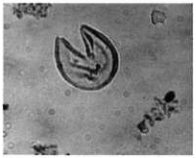
志鄙中遺跡出土土器 (2)

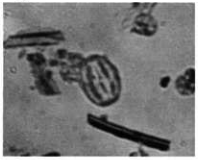
花粉写真

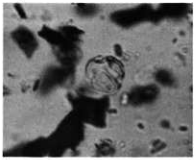


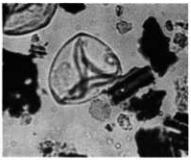


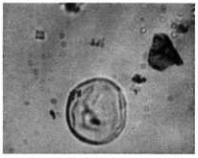


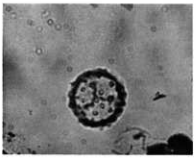


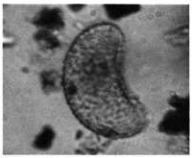






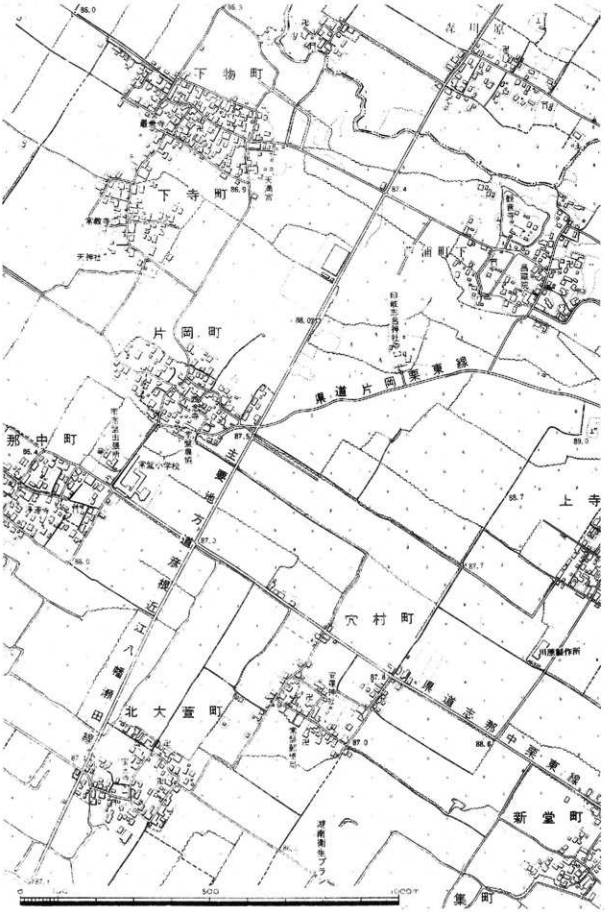






志那中遺跡花粉写真

1,2 Abies
3, Pinus
4,5 Cryptomeria
6,7 Qmercus
8,9 Gramineae
10, Chenopodiaceae
11, Polypodiaceae

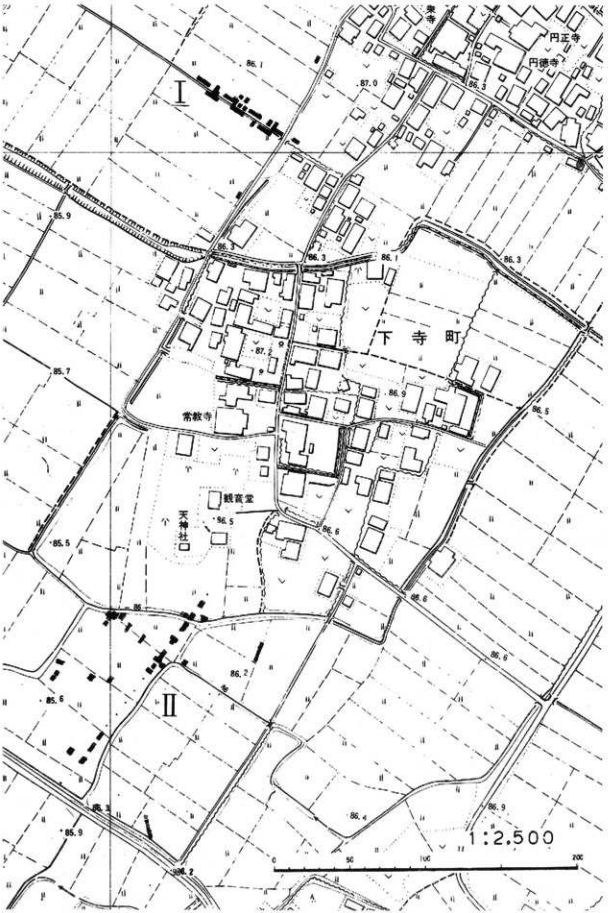

下物町
下寺町
片岡町
那中町
穴村町
北大萱町
新堂町
集町
県道片岡栗東線
県道志那中栗東線
主要地方道彦根近江八幡線
田線
天神社
天満宮
川原鉄作所
0
500
1000m

図版六　片岡遺跡位置図

図版七　片岡遺跡附近全景

航空写真

図版八　片岡遺跡地形図



Ⅰ　観音堂(下寺佐田、下物下勝島)遺跡
Ⅱ　片岡(片岡字下島田、上島田、北島田、下寺字狭出)遺跡

津田江上空から片岡・観音遺跡と近江富士を望む。(西より)

条里制の中の寺割が明瞭な観音堂遺跡。(西より)

片岡遺跡の試掘拡設定状況。(西より)

発掘調査情景と観音堂の森。(南より)

片岡遺跡から観音堂の森と下寺の集落、近江富士を望む。(西より)

特設試掘壙設定状況と比叡山を望む。(東より)

3－A特設試掘壙
シケ抜き検出状況

3－A試掘壙
南東壁、シケ抜き検出
状況

4－A試掘壙
南東壁

10－B試掘壙
南東壁

11－A特設1試掘壙
南西壁、溝(M－5)検出状況

11－A特設1試掘壙
南東壁、溝(M－5)検出状況

11－A試掘壙
溝（大溝第Ⅲ層掘り下げ）検出状況（南東より）

11－B、12－A試掘壙
南東壁、条里遺構検出状況（左下　M－3）

12－B試掘壙
南東壁土層堆積状況
（中央下　M－3）

12－A試掘壙
溝内(大溝第Ⅲ層掘り下げによる)
木材検出状況

11－B、12－A試掘壙
溝(大溝第Ⅲ層掘り下げによる)内
木材検出状況(北東より)

11－B、12－A試掘壙
溝(大溝第Ⅲ層)跡検出状況（北東
より)

12－B試掘壙
南東壁

12－B試掘壙
南西及北西壁

13－A試掘壙
南東壁

14－B、15－A試掘壙
寺域南端溝(M－1)検
出状況（北東より）

14－B、15－A試掘壙
寺域南端溝(M－1)検
出状況（南東より）

14－B、15－A試掘壙
南東壁と溝(M－1)

11－B特設試掘壙
寺域溝跡(M－2)と条
里溝(M－3？)交点
（南東より）

特設11試掘壙
南東壁

特設12試掘壙
（北西より）

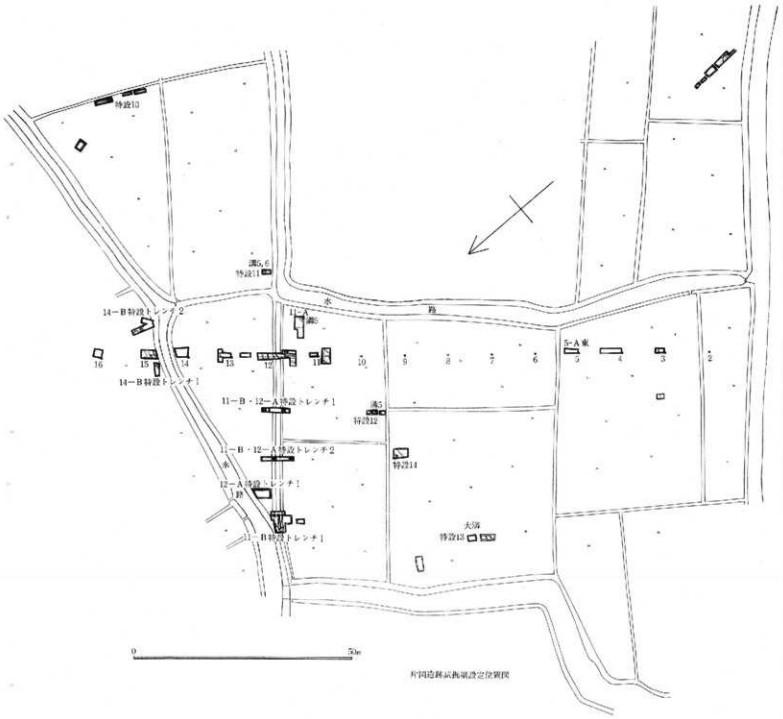
特設10試掘壙
（西南より）

特設13試掘壙
北西壁

特設15試掘壙
（東より）

寺域を限る北東隅の溝よりかって掘り出された木像群(観音堂内安置)

図版二〇　遺跡位置図

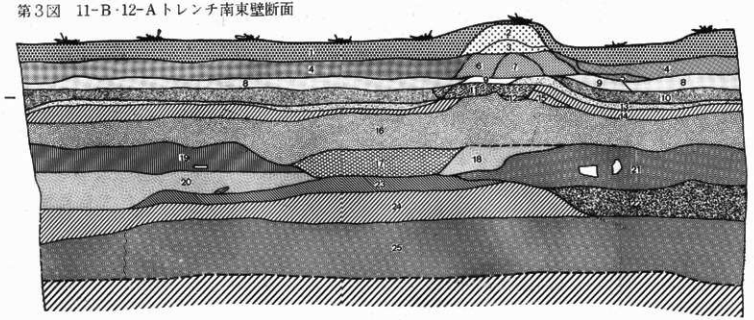


片岡遺跡試掘調査定位置図

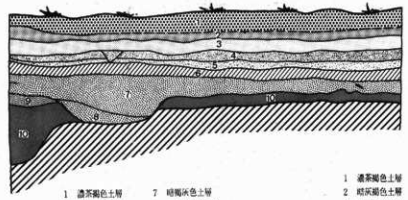
C地区

図版二一 遺溝断面図

第3図 11-B·12-Aトレンチ南東壁断面

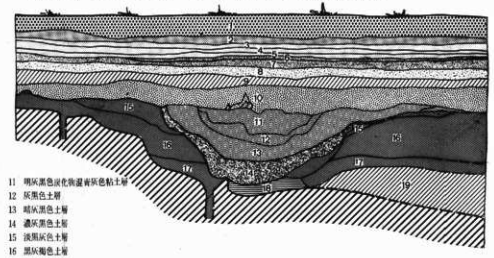


第2図 11-B·Eトレンチ南東壁断面



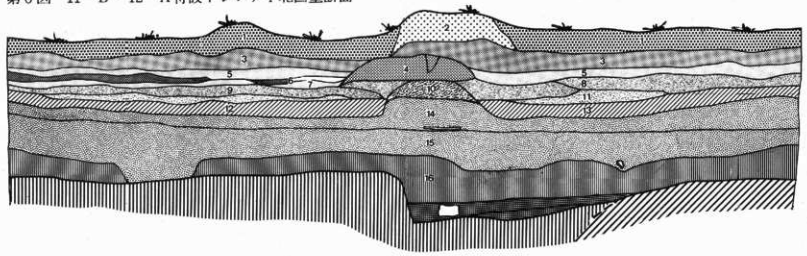
1 濃茶褐色土層
2 暗灰褐色土層
3 明黄褐色土層
4 灰褐色土層
5 明灰褐色土層
6 褐灰色土層
7 暗褐灰色土層
8 青帯灰褐色土層
9 灰黒色土層
10 黒灰褐色土層
11 黒灰褐色土層

第1図 11-B·12-A～11-B·Eトレンチ南西壁断面



1 濃茶褐色土層
2 暗灰褐色土層
3 明黄褐色土層
4 明黄褐色土層
5 明黄褐色土層
6 灰褐色土層
7 灰褐色土層(鉄分含む)
8 明灰褐色土層
9 褐灰色土層
10 暗褐灰色土層
11 明灰黒色混化物混青灰色粘土層
12 灰黒色土層
13 暗灰黒色土層
14 濃灰黒色土層
15 淡黒灰色土層
16 黒灰褐色土層
17 黒灰色土層
18 黒灰色砂質土層
19 褐灰色土層

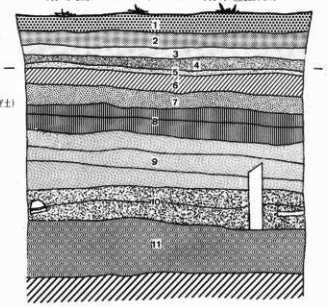
第6図 11—B・12—A特設トレンチ1北西壁断面



1 耕作土
2 耕作土
3 基灰色に黄褐色土のブロック状混入土層
4 明黄褐色土層
5 暗灰褐色に黄褐色のブロック状混入土層
6 黄褐灰色土層
7 褐灰色土層
8 褐灰色に褐黄色のブロック状混入土層
9 黄々褐灰色土層
10 褐黄色に褐灰色のブロック状混入土層
11 暗黄々褐色土層
12 褐黄灰色に褐黄色のブロック状混入土層
13 黒黄褐色土層
15 黒黄灰色土層
16 明黒灰色土層
17 暗黒灰色土層
18 明灰黒色土層
19 灰黒色土層
20 暗灰黒色土層
21 灰黒色土層
22 暗灰黒色スクモ層
23 青帯褐灰色土層
24 褐灰色スクモ層
25 黄帯灰色砂層

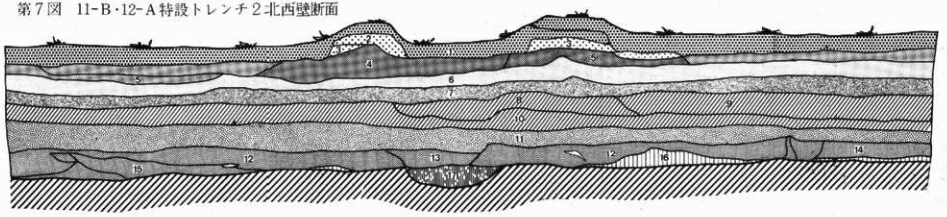
1 耕作土 暗灰褐色土層
2 茶褐色土層(あぜ土)
3 淡茶褐色土層(あぜ土)
4 明茶褐色土層
5 黄褐色土層
6 黄茶褐色土層
7 淡灰色土層
8 明黄灰褐色土層
9 明黄褐色土層
10 暗茶褐色土層(鉄分含む)
11 暗褐色土層
12 濃褐色土層
13 灰褐色土層
14 明褐灰色土層
15 淡褐色土層
16 黒灰色土層
17 暗灰色スクモ層

第4図 12-Bトレンチ南東壁断面



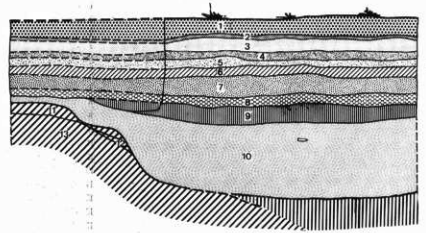
1 耕作土
2 淡茶褐色土層(あぜ土)
3 黄褐色土層
4 明黄灰褐色土層
5 暗褐色土層
6 明褐色土層
7 明黒灰色土層
8 灰黒色土層
9 暗灰黒色土層
10 灰褐色スクモ層
11 黄帯帯灰色砂層

第7図 11-B·12-A特設トレンチ2北西壁断面



1 耕作土
2 黄々褐灰色に褐黄色混入土層
3 黄々褐灰色に褐色混入土層
4 褐色に黄々褐灰色混入土層
5 黄々褐灰色に緑褐色混入土層
6 黄々褐灰色に褐色混入土層
7 黄々褐灰色に黄褐色混入土層
8 褐黒色に褐色混入土層
9 黄々褐灰色に褐色混入土層
10 黄々褐灰色土層
11 黄々褐灰色に暗黄々褐色混入土層
12 黒黄褐色土層
13 黒黄褐色土層
14 黄々褐灰色土層
15 黒黄褐色に暗灰青色混入土層
16 褐黒色土層
17 黒黄褐色に砂礫混入土層

第5図 13-Aトレンチ南東壁断面



1 耕作土
2 褐色土に黄々褐灰色混入土層
3 黄橙土に黄緑灰色混入土層
4 黄緑灰に褐色混入土層
5 褐色に黄々褐色混入土層
6 黄々褐灰色に褐色混入土層
7 黄々褐灰色に褐色混入土層
8 黄々褐灰色(灰色強)土層
9 黄々褐灰色(灰色強)土層
10 暗灰黒色土層
11 灰黒色砂層
12 灰青色粘土層
13 灰青色砂層

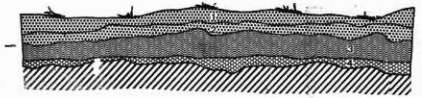
基本土層
Ⅰ層
Ⅱ層
Ⅲ層
Ⅳ層
Ⅴ層
Ⅵ層
Ⅰ′層
Ⅰ″層
Ⅱ″層
Ⅱ′層
Ⅲ′層
Ⅲ″層
Ⅳ′層
Ⅶ層
Ⅷ層
Ⅸ層
Ⅹ層
Ⅺ層
大溝Ⅰ層
大溝Ⅱ層
大溝Ⅱ′層
大溝Ⅲ層
大溝Ⅲ′層
大溝Ⅲ″層
大溝Ⅳ層
大溝Ⅴ層
大溝Ⅵ層
大溝Ⅶ層
未調査部分
地山

scale 0 5 10m

片岡観音堂トレンチ断面図1

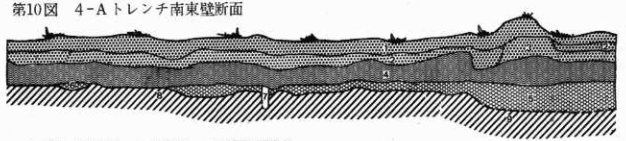
図版一二　遺溝断面図

第11図　5-Aトレンチ南東壁断面



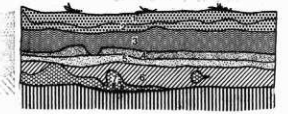
1 耕作土・濃茶褐色土層
2 黒灰褐色土層
3 灰褐色土層
4 灰黒色土層

第10図　4-Aトレンチ南東壁断面



1 耕作土・濃茶褐色土層
2 黒灰褐色土層
3 明灰褐色土層
4 灰褐色土層
5 灰黒色土層
6 黒灰褐色土層
7 暗茶褐色土層(粘穴)
8 青灰色土層
9 青灰色砂層

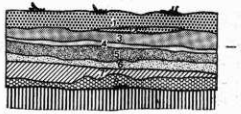
第9図　3-Aトレンチ南東壁断面



1 灰褐色土層
2 青色帯灰褐色土層
3 褐灰色土層
4 青灰色(鉄分沈着)土層
5 橙色帯青褐色(鉄分沈着)土層
6 暗灰青色(鉄分浸透)土層
7 灰黒色土層

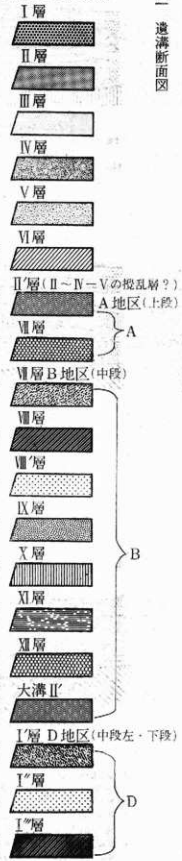
A地区

第8図　3-A特設トレンチ1南東壁断面



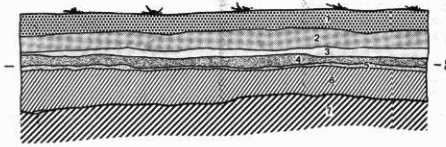
1 灰褐色土層
2 青色帯灰褐色土層
3 褐灰色土層
4 黄色混褐灰色土層
5 青灰色(鉄分沈着)土層
6 橙色帯青褐色(鉄分沈着)土層
7 暗灰青色(鉄分浸透)土層
8 灰青色土層

基本土層(各地区共通)



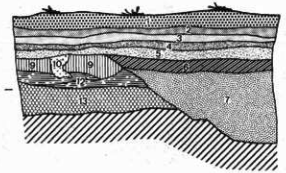
D地区

第14図　14-Aトレンチ南東壁断面

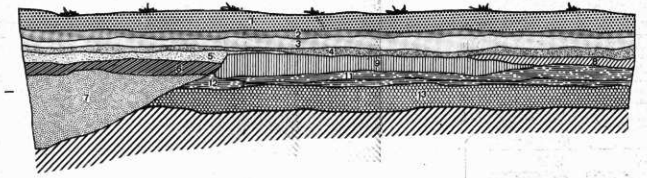


1 耕作土・濃茶褐色土層
2 明灰褐色土層
3 黄褐色土層
4 灰褐色土層
5 橙褐色土層
6 暗青灰色土層
7 灰黒色砂層

第13図　11-A特設トレンチ南東壁断面



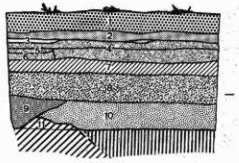
南西壁断面



1 耕作土・濃茶褐色土層
2 青褐色ブロック状混暗黄々褐色土層
3 黄褐色混黄々褐灰色土層
4 暗黄々褐色混黄褐色土層
5 暗褐色混褐色土層
6 褐色混黄褐灰色土層
7 黄褐灰色土層
8 黄褐色混黄々褐灰色土層
9 黄褐灰色土層
10 暗灰色土層
11 褐色ブロック状混黄々褐灰色土層
12 褐黄色ブロック状混黄々褐灰色土層
13 褐黒色土層

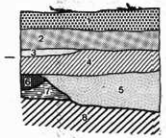
B地区

第12図　10-AE～Wトレンチ南東壁断面



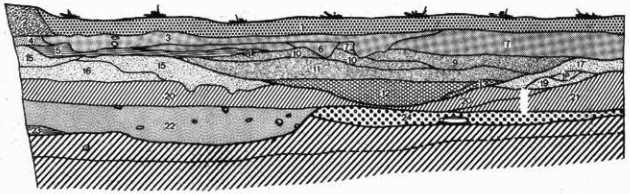
1 耕作土・青灰褐色土層
2 淡灰褐色土層(床土)
3 黄褐色土層
4 褐色帯青灰色(鉄分浸透)土層
5 黄褐色土層
6 褐色帯青灰色(鉄分沈着)土層
7 青灰色(鉄分浸透)土層
8 暗青灰色(上部鉄分浸透)土層
9 黒灰色土層
10 白色帯暗青灰色土層
11 灰青色土層

第17図　14-B特設トレンチ1南東壁断面



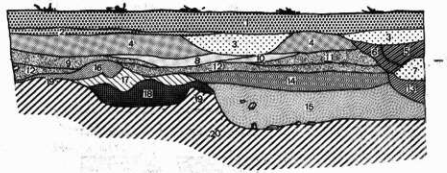
1 耕作土・青灰褐色土層
2 床土・淡灰褐色土層
3 黄褐色土層
4 暗青灰色土層
5 黒色帯青灰色土層
6 暗青灰色土層
7 明青灰色粘質土層
8 灰黒色砂層

第16図　14-B特設トレンチ2北西壁断面



1 耕作土・暗褐灰色土層
2 明褐灰色土層
3 褐色土層
4 淡褐灰色土層
5 明灰褐色土層
6 淡灰褐色土層
7 暗灰褐色土層
8 暗褐色土層
9 灰褐色粘質土層
10 暗灰褐色粘質土層
11 褐灰色粘質土層
12 暗褐灰色粘質土層
13 明青灰色砂質土層
14 乳灰褐色土層
15 明灰色粘質土層
16 灰色粘質土層
17 淡灰色粘質土層
18 暗灰色粘質土層
19 緑褐灰色粘質土層
20 淡黒灰色粘土層
21 青褐灰色粘土層
22 淡黒灰色砂質土層
23 暗青灰色砂層
24 青灰色粘土層

第15図　14-B・14-A特設トレンチ南東壁断面

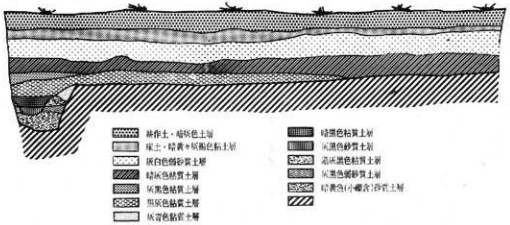


1 耕作土・暗灰褐色土層
2 黄褐色土層
3 暗灰茶褐色土層
4 灰茶褐色土層
5 暗灰褐色粘質土層
6 灰褐色粘質土層
7 淡緑灰色粘質土層
8 明灰褐色土層
9 明灰黄褐色土層
10 明褐色土層
11 暗褐灰色土層
12 淡灰褐色土層
13 暗緑灰色粘土層
14 灰褐色粘土層
15 暗灰黒色粘土層
16 明灰褐色粘質土層
17 黒灰色砂質土層(粘土混入)
18 灰色粘土層
19 黒灰色砂層
20 暗白灰色砂層

scale　0　5　10m

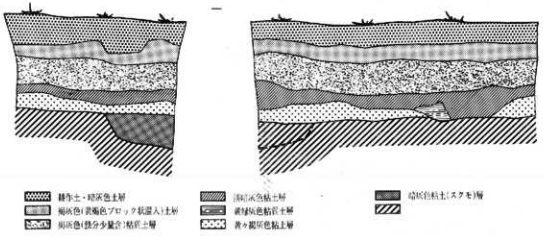
片岡観音堂トレンチ断面図2

第19図　特設10-1, 特設10-2トレンチ北西壁断面

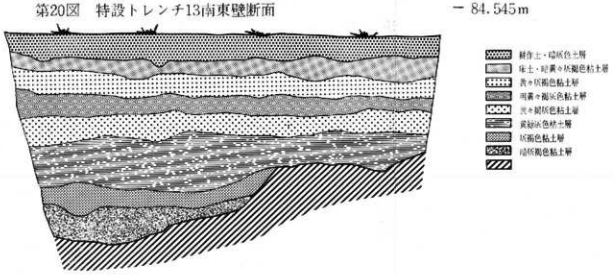


第18図　特設トレンチ11南東壁断面

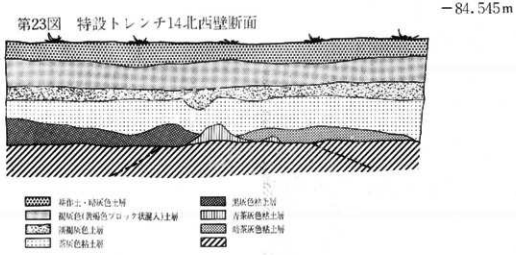
第21図　特設トレンチ12北西壁断面



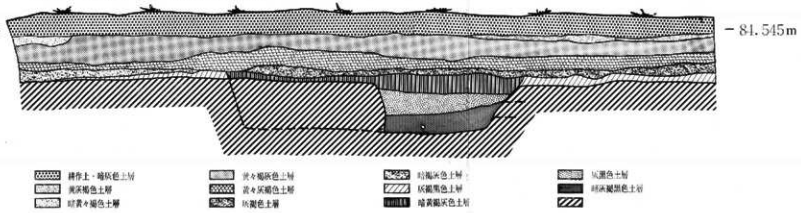
第20図　特設トレンチ13南東壁断面



第23図　特設トレンチ14北西壁断面

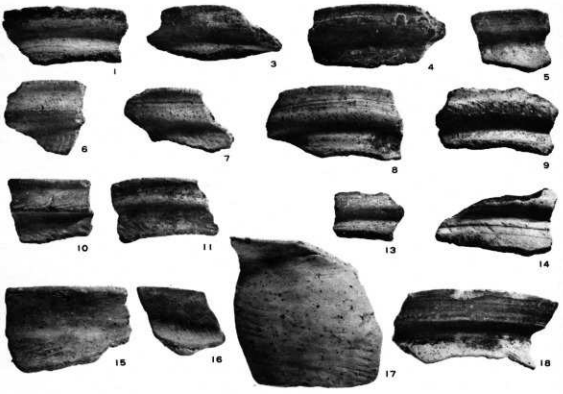


第22図　特設トレンチ15北西壁断面

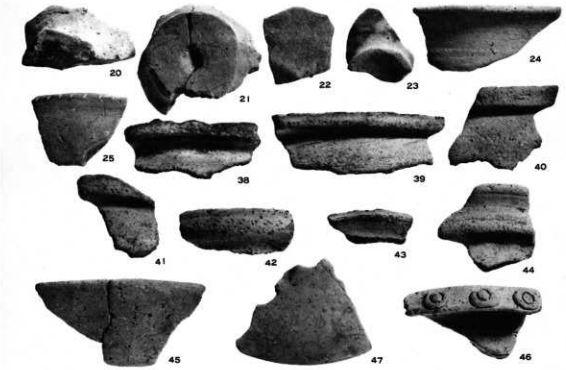


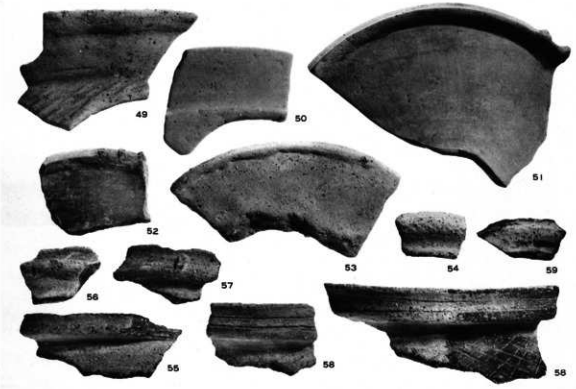
0　5　10m

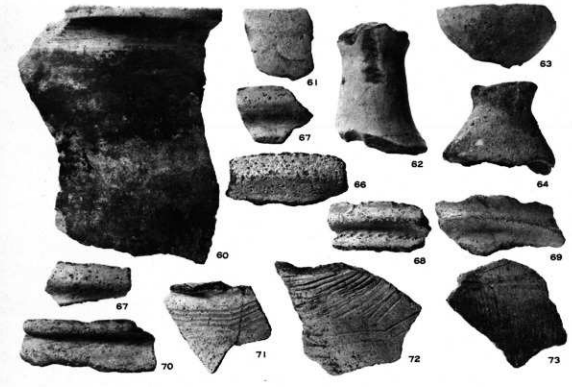
片岡観音堂特設トレンチ10～15

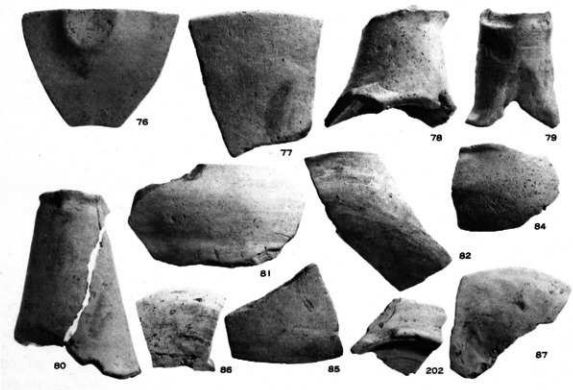

1
3
4
5
6
7
8
9
10
11
13
14
15
16
17
18

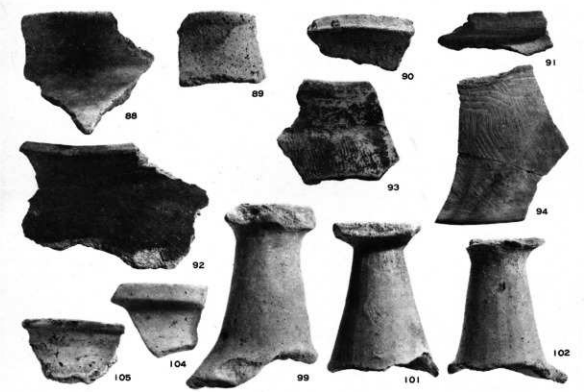
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
37

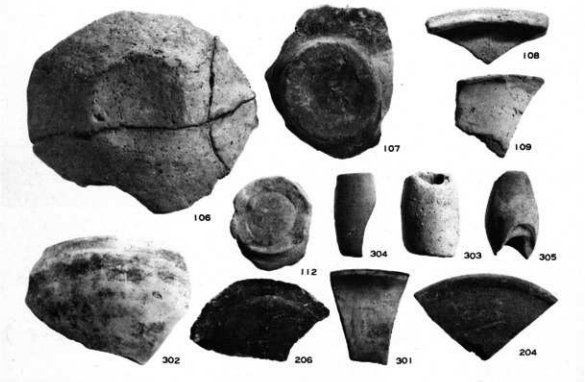

20
21
22
23
24
25
38
39
40
41
42
43
44
45
47
46


49
50
51
52
53
54
59
56
57
55
58
58


60
61
67
62
63
64
66
68
69
67
70
71
72
73


76
77
78
79
84
81
82
80
86
85
202
87


88
89
90
91
93
94
92
105
104
99
101
102


108
107
109
106
112
304
303
305
302
206
301
204

19

36

48

83

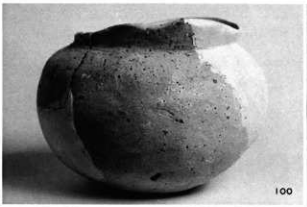
201

94

95

96

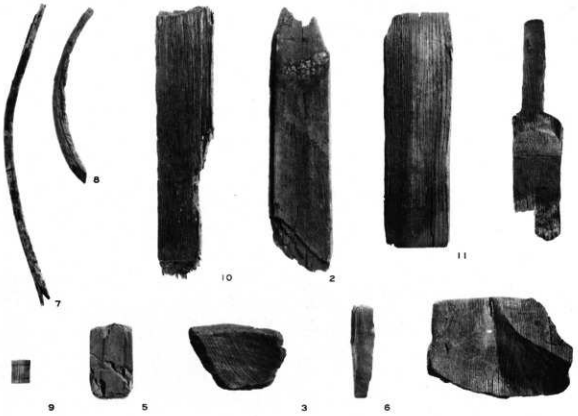
203

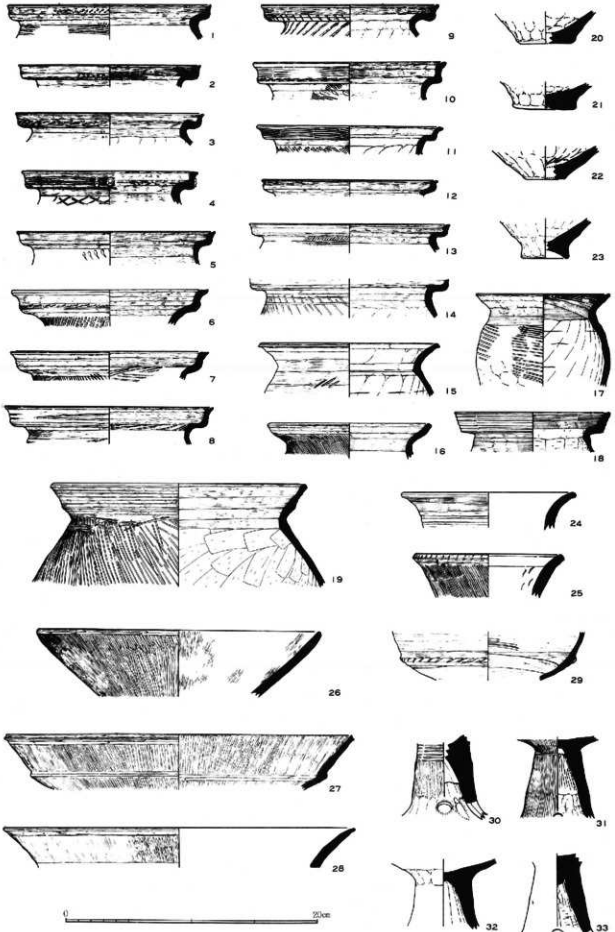

100

205

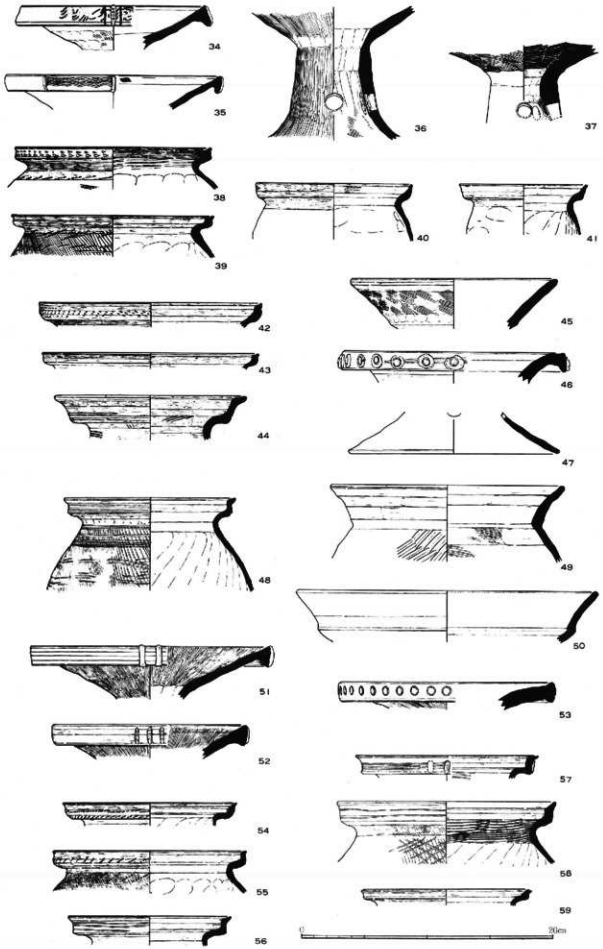
110

111

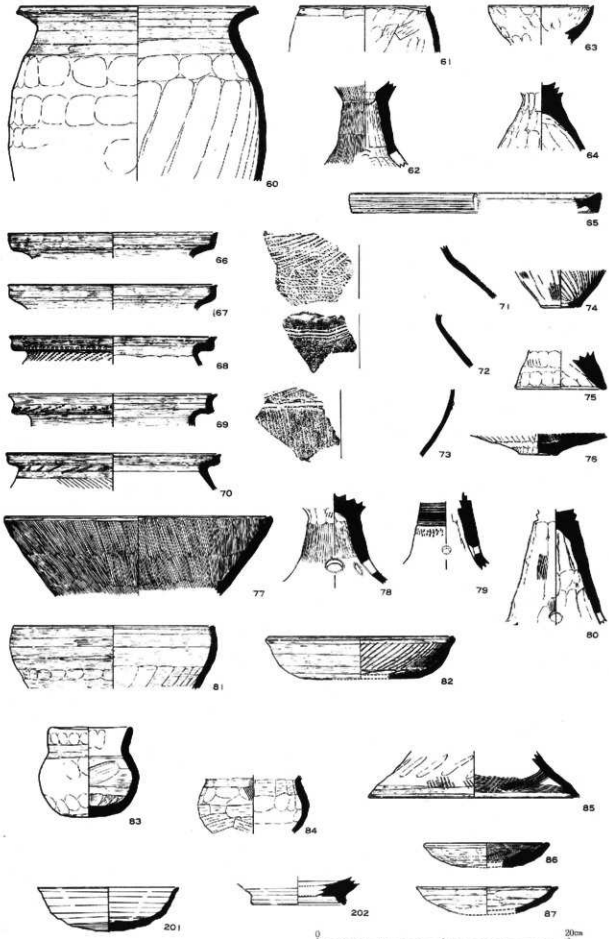

8
7
10
2
11
1
9
5
3
6
4



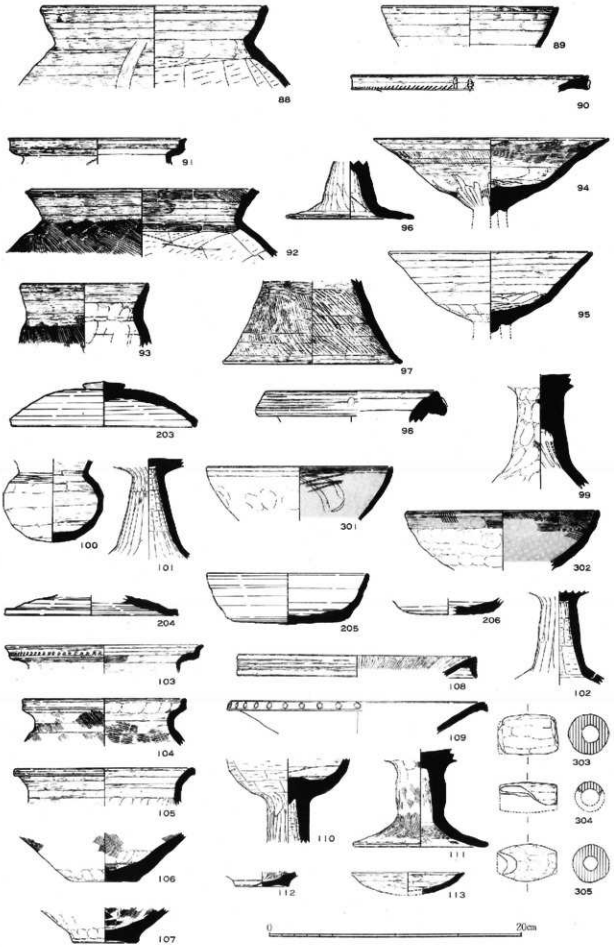
全て11－B　Ⅳ層砂層出土



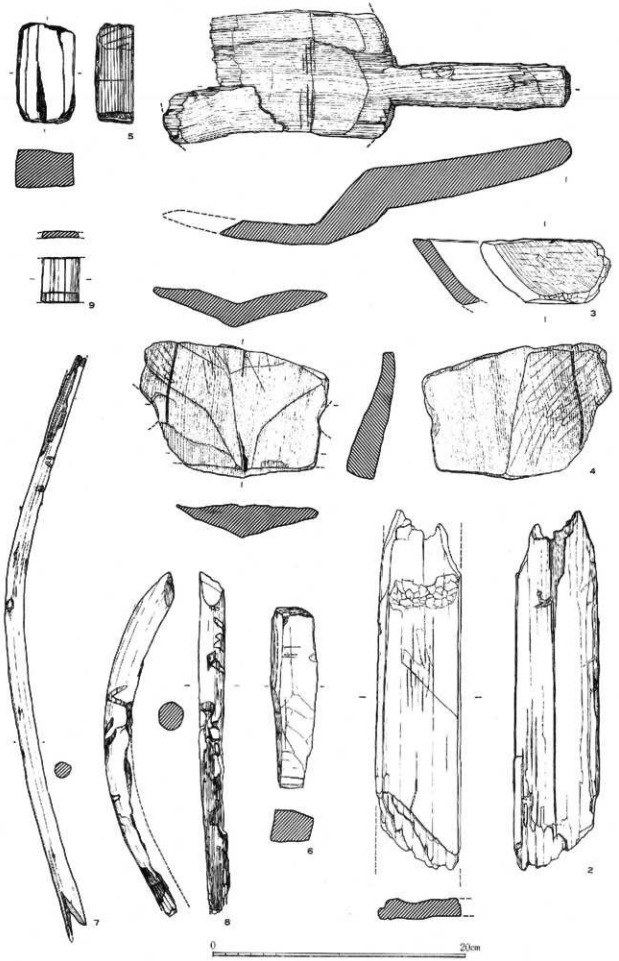
11－Bトレンチ　34～37：Ⅳ層砂層　38～41：Ⅳ層粘土層　42～47：Ⅳ層
48～50：Ⅳ層　51～53：Ⅳ層上面　54～59：Ⅲ層

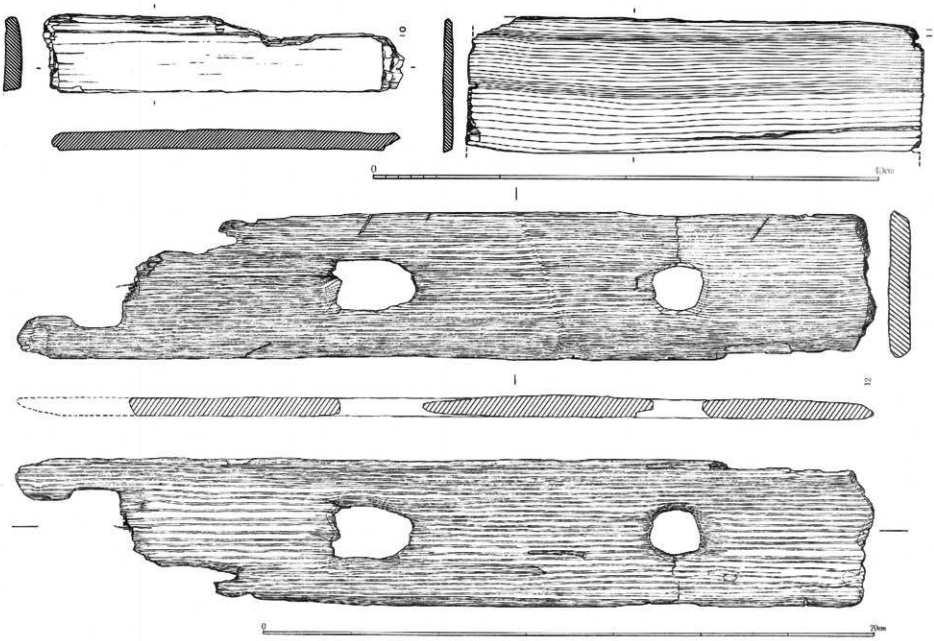


60：11－Aトレンチ Ⅲ層　61～65：11－Bトレンチ Ⅲ層　66～80：11－Bトレンチ Ⅱ′層　81～83：11－Bトレンチ Ⅰ層
84.85.202：11－Bトレンチ Ⅶ層　86.87：11－Bトレンチ Ⅵ層　201：11－B，12－A特設 Iトレンチ M－5　202：12－Aトレンチ M－3



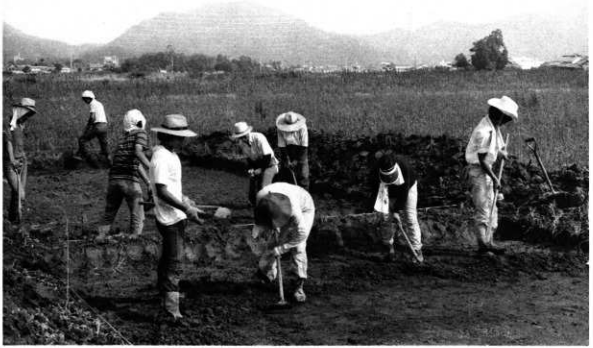
88～90：12－AトレンチM－3　91～97：12－BトレンチⅢ'層　203：12－BトレンチⅠ層　98：10－BトレンチⅥ層
99：13－AトレンチⅥ－Ⅲ層　100.101：11－B，12－A特設トレンチⅠ－Ⅵ層　301：11B，12－A特設トレンチⅠ－Ⅴ層
302.204～206：11－B，12－A特設トレンチⅡ－Ⅵ層　102：特設13トレンチ最下層粘土ブロック　303：14－B，15－A特設トレンチⅡM－1
304：14－B，15－A特設トレンチⅡ　それ以外：出土地，層位不明


5
9
3
4
7
8
6
2
0
20cm



1．下繰子遺跡遠景(南東、大岩山頂より手前より小篠原桜生、富波甲、乙、そして五之里の集落)

2．下繰子遺跡近景(北より、向こう右側大岩山)

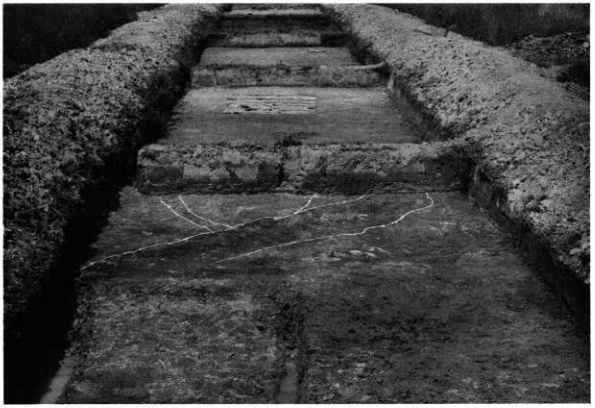


1．発掘風景

2．発掘風景(J-2・3t延長部水路敷が昭和49年度調査地)

1　竪穴住居(奥手前)

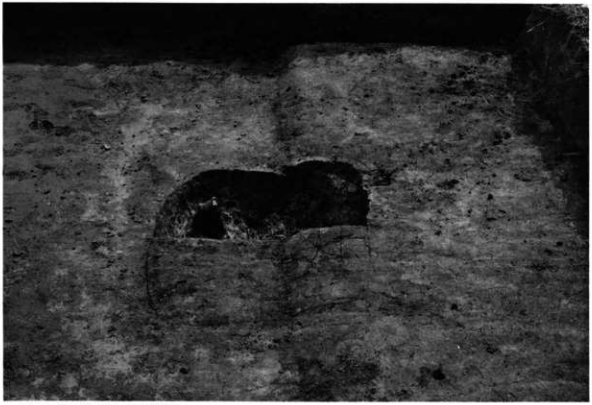
2　竪穴住居(奥手前)



1．発掘状況(東J20t)

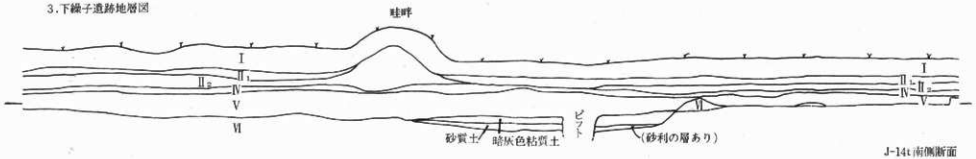
2．J-3t 沼状遺構検出状況(北より)

1．J-14t 溝状遺構検出状況

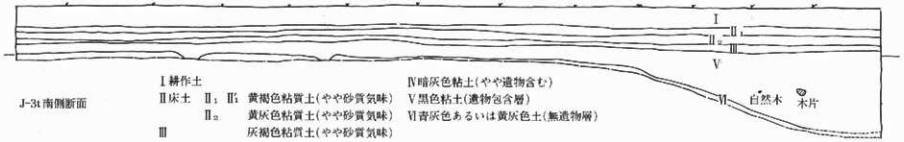


2．J-16t 方形ピット検出状況

3．下繰子遺跡地層図

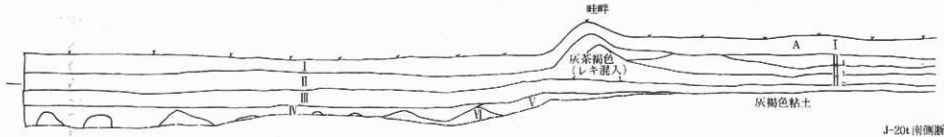


J-14t 南側断面

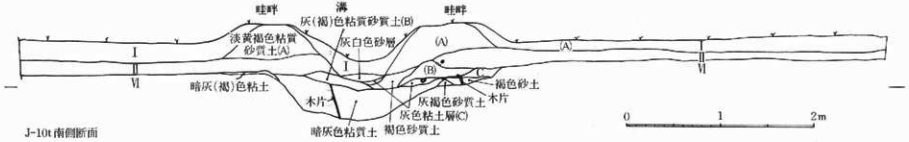


J-3t 南側断面

Ⅰ 耕作土
Ⅱ床土　Ⅱ1 黄褐色粘質土(やや砂質気味)　Ⅳ暗灰色粘土(やや遺物含む)
Ⅱ2 黄灰色粘質土(やや砂質気味)　Ⅴ黒色粘土(遺物包含層)
Ⅲ 灰褐色粘質土(やや砂質気味)　Ⅵ青灰色あるいは黄灰色土(無遺物層)

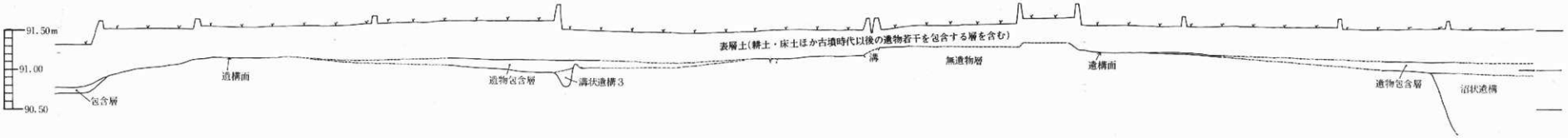


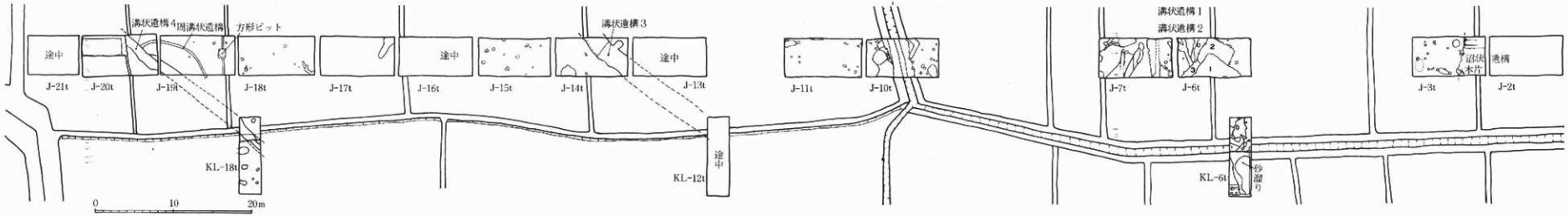
J-20t 南側断面



J-10t 南側断面

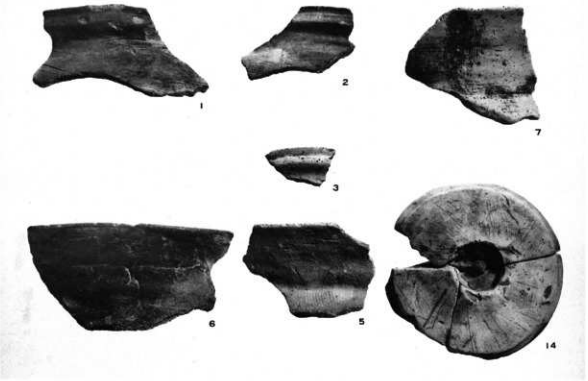
2．下繰子遺跡断面図





1．昭和50年度下繰子遺跡発掘調査平面図

1．J-2·3t 溝状遺構出土土器(上段1～3、下段6)
J-19t 方形ピット内 ·掘出土土器(中段2、下段3·9)



2．J-14t 溝状遺構出土土器

4

5

10

11

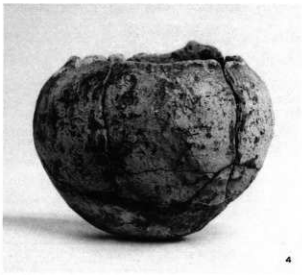
7

8

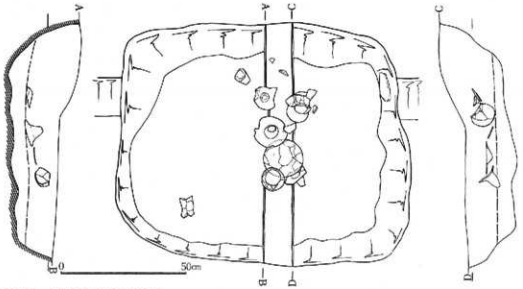
9

J-2-3t　沼尻遺構出土土器

J-141 溝状遺構出土土器



J-19t 方形ピット内出土土器

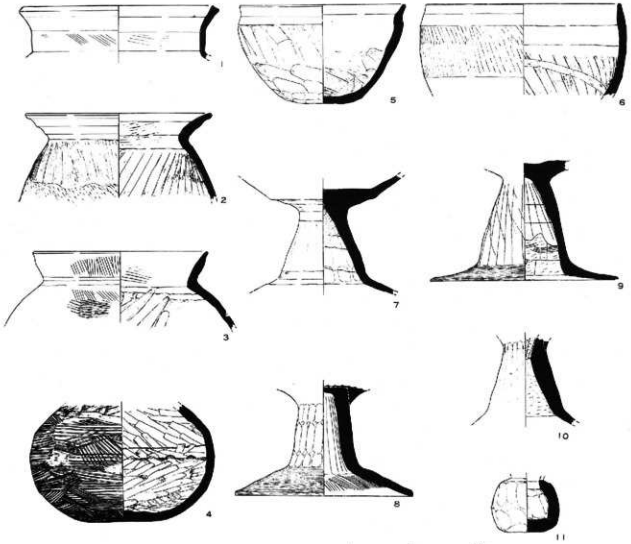


J-19t 方形ピット遺物出土状況実測図

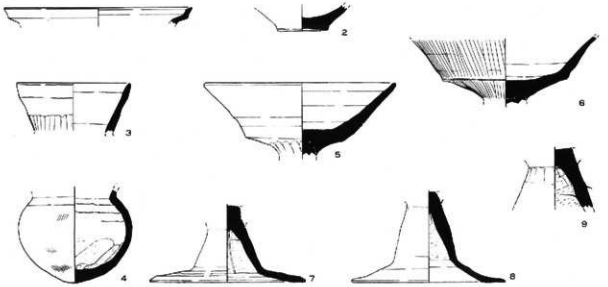
1．J-2·3t 沼状遺構出土木製品

2．J-3t 沼状遺構(1～4)
J-14t 溝状遺構(5·6)出土木製品

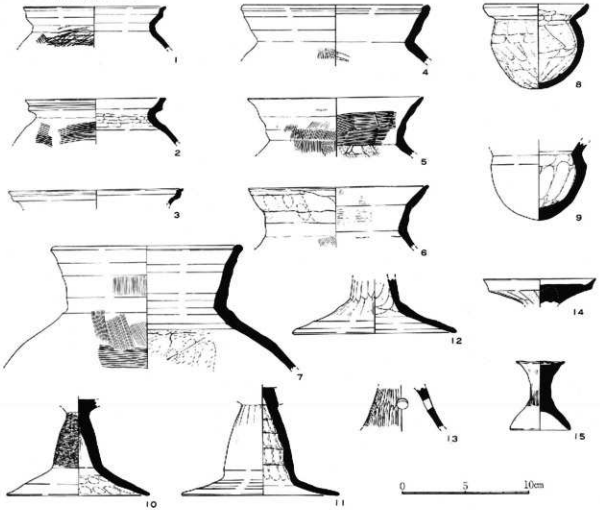
J-2·3t 沼状遺構出土遺物

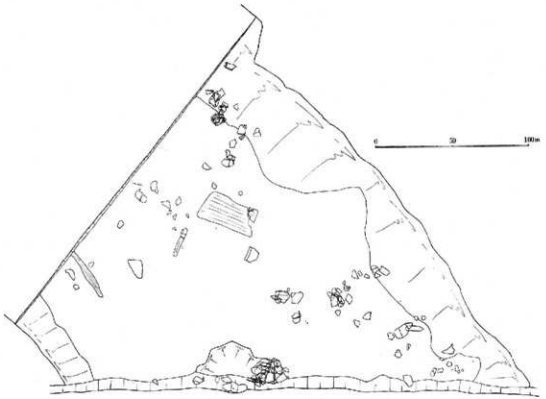


J-19t 方形ピット内一括出土遺物

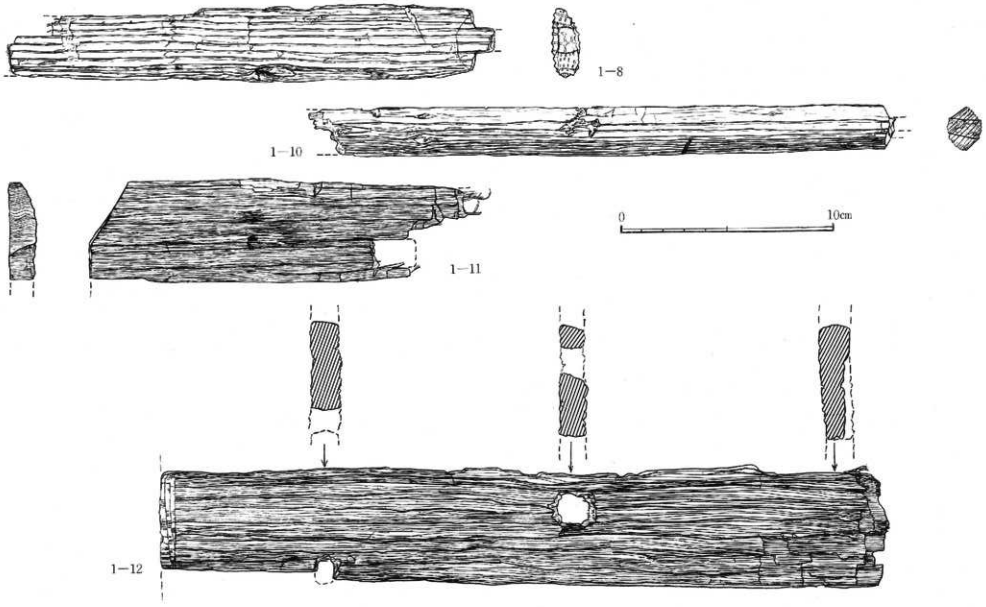


J-14t 溝状遺構出土・土器





J-14t 溝状遺構遺物出土状況



J-2·3t沼状遺構上層出土木製品

図版四九　遺物実測図

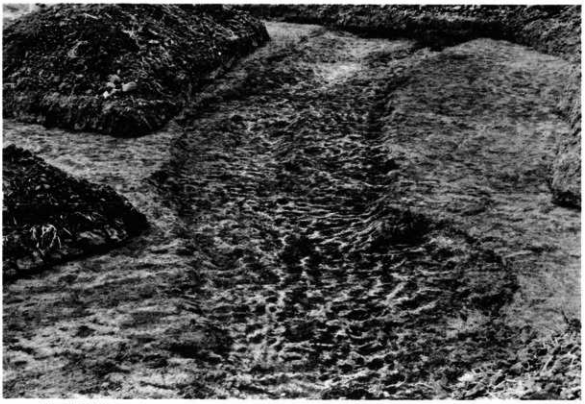
1．円通寺遺跡遠景

2．円通寺遺跡近景

1．円通寺遺跡第Ⅱ地区S1(南より)

2．円通寺遺跡第Ⅱ地区S1東壁土層断面

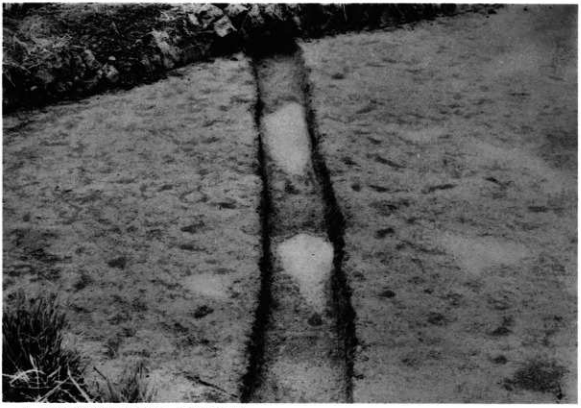
1．円通寺遺跡第Ⅲ地区DO～EN1，M1･M2(東より)



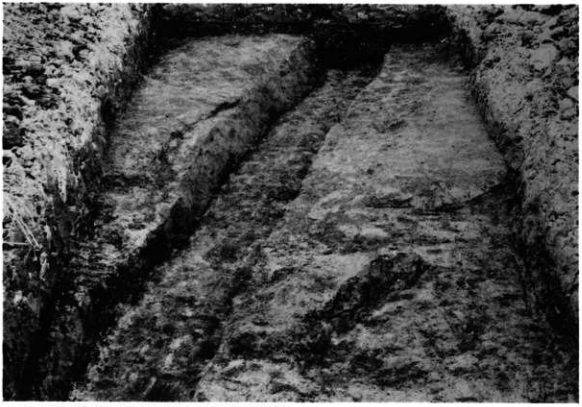
2．円通寺遺跡第Ⅲ地区DO～EN1，M1･M2(東より)

1．円通寺遺跡第Ⅲ地区BO～CO，M1(東より)

2．円通寺遺跡第Ⅲ地区BO～CO，M1(東より)



1．円通寺遺跡第Ⅲ地区EN1，M3(東より)



2　円通寺遺跡第Ⅲ地区FN2，M3及び北壁土層断面

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅱ－S10

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

Ⅱ－S1

Ⅲ－FS2

Ⅲ－M1

Ⅲ－M3

Ⅱ－S1

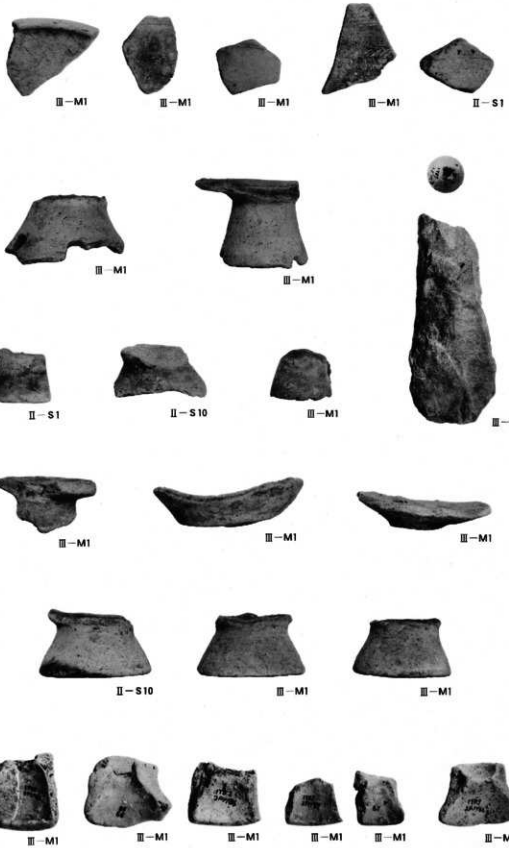
Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

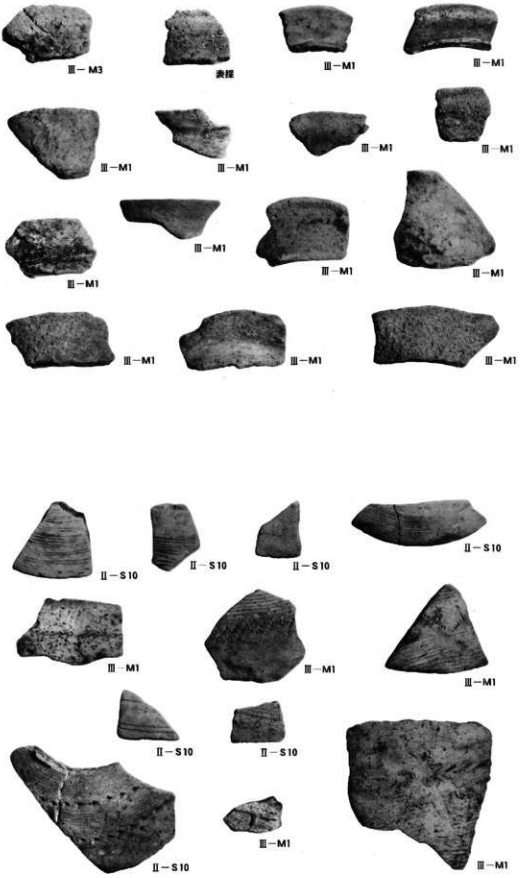
Ⅲ－M1

Ⅲ－M1

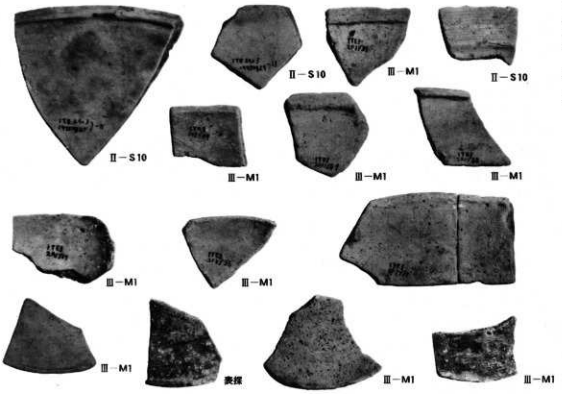
円通寺遺跡出土土器（アラビア数字は地層名、他は遺構及びグリット名、以下同じ）

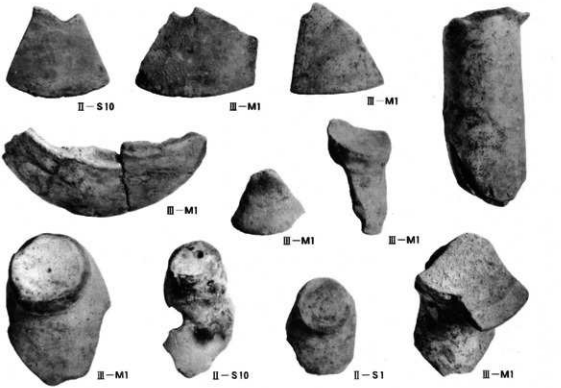

Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S1
Ⅱ－S10
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S10
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1

円通寺遺跡出土

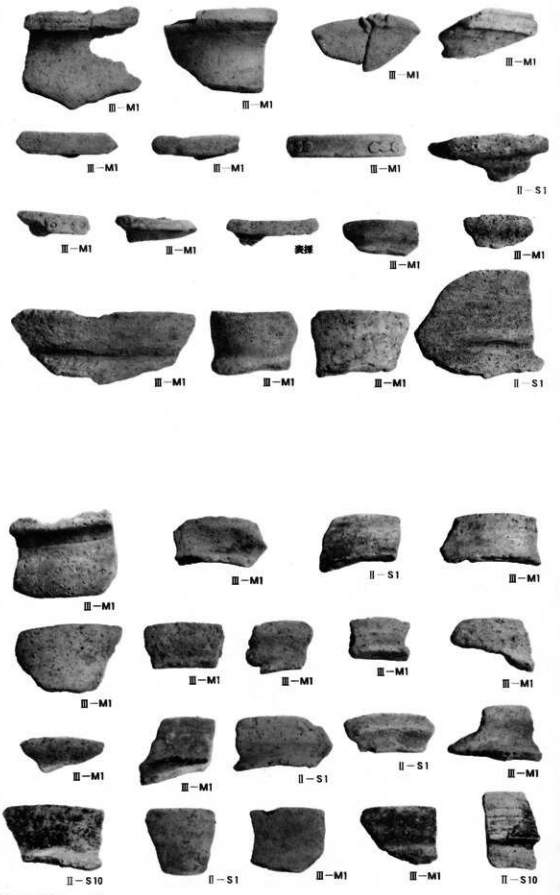

Ⅲ－M3
表採
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S10
Ⅱ－S10
Ⅱ－S10
Ⅱ－S10
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S10
Ⅱ－S10
Ⅲ－M1
Ⅱ－S10
Ⅲ－M1

円通寺遺跡出土


Ⅱ－S10
Ⅱ－S10
Ⅲ－M1
Ⅱ－S10
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
表採
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1


Ⅱ－S10
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S10
Ⅱ－S1
Ⅲ－M1

円通寺遺跡出土


Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
表採
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S1
Ⅱ－S1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S10
Ⅱ－S1
Ⅲ－M1
Ⅲ－M1
Ⅱ－S10

円通寺遺跡出土土器

Ⅱ－S10

Ⅱ－S10

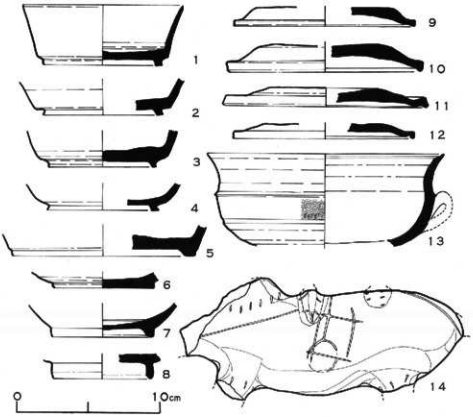
Ⅱ－S1

Ⅲ－M1

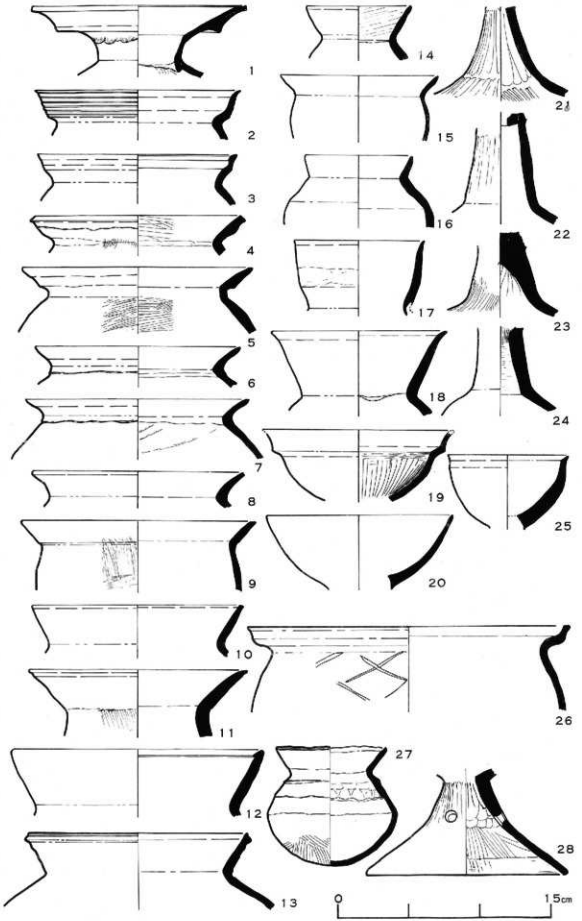
Ⅲ－GS1

Ⅱ－S10

円通寺遺跡出土土器



雛波遺跡出土遺物実測図（1）



難波遺跡出土遺物実測図 (2)

1976
昭和51年3月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅲ－Ⅱ

編集　滋賀県教育委員会
発行　滋賀県教育委員会
　　財団法人　滋賀県文化財保護協会
印刷　有限会社　真陽社
　　京都市下京区油小路仏光寺上ル
　　TEL(075)351－6034

2070